
W.E.M 【世界の終わる音が聞こえる】

作倉エリナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W・E・M【世界の終わる音が聞こえる】

【Nコード】

N2170B

【作者名】

作倉エリナ

【あらすじ】

初恋の女、愛里にピアノを習いながら彼女に執着し続けるテツ。テツの幼なじみで彼にとって大きな存在でもある御浜。御浜が恋する、才能あふれる音楽家ティース。紗良を誰より大事にするあまり、常に恋人を捜し続ける真。頑なで恋に不器用な紗良。兄の幼なじみに恋をし、つけこむスキを狙う柚乃。テツの父の全てを知りながら、それでも彼に執着し続ける愛里。恋と友情と進路に悩む人々の群像劇。

第1話 (the heads) 前編

楽しいことなんて何も無い。

世の中希望なんて何も無い。

オレだけじゃない。

誰も彼もそう思ってる。

そう感じるし、そう思う。それでいいじゃないか。

そう言ったら、笑うヤツがいた。

だからコイツだけは違うんだと、幼いころからずっとずっと思ってた。

彼はオレにとって誰よりも特別だった。

誰も彼も違うんだ、と全ての人間を排除しながら生きてきて、それでもそう思ってる。

沢田鉄人。

この無駄に強そうなのがオレの名前。

この名前をつけてくれた母親は妹を生んですぐ死んでしまったの

で文句も言えない。

「テツ！ホントにここにいた」

「…御浜。お前、学校は逆方向だろ？」

スタバには珍しく、店外に喫煙席がある。ここが毎日のオレの通う席だった。

御浜はオレン家の隣に住む、いわゆる幼なじみってヤツだ。高校から学校が変わったので、学校帰りにこうして会うことは、めったになくなった。

…はずなんだが。

「オレ、真に呼ばれて来たんだけど、知らない？」

「そんなこと、学校じゃ言ってなかったぞ」

真はオレのクラスメイトだけど、なぜか御浜のことを気に入ってるらしく、よくつるんでる。

「御浜！いたいた。…って、テツちゃんもいたの？」

「お前がわざわざここに御浜を呼び出したんだろ？ オレは大概ここにいます」

「はいはい。あの美人のピアノの先生待ってんでしょ？ 愛里ちゃんだっけ？」

つとに、こいつは見た目に違わず、思っつきし軽いな。なんで真面目が歩いてるような御浜と仲がいいのかな。

「ちゃんづけするような年齢かよ、あの女が」

「あら、言ってくれるじゃない、テツ？」

「げ、愛里…」

「カフェミスト、デйкаフェのツール。テツの奢りでね」

緩く内側にカールした長い髪を揺らしながら、こんなセリフを吐いてると思えないような、爽やかな笑顔でオレを顎で使う。

目線だけでオレを席から立たせ、愛里は代わりにそこに座った。いやいやレジの列に並ぼうと動いたオレを、真が止めた。

「オレも何か買ってこよ 御浜、何がイイ？」

「キャラメルスチーマー、ショートね」

「了解つ。相変わらずお子様だねえ」

御浜に対して小さく敬礼つばいポーズをとって、オレの背中を押した。

「見かけだけなら、お前が御浜をパシらせてそうなんだけどな」

「うわ、言ってくれるね、テツちゃん。オレ、こう見えても尽くすタイプよ？」

「…うそくせ」

デйкаフェは他のドリンクより時間がかかるので、後から注文した真が先に両手にドリンクを持ってオレの横に立った。

「今日、相原とか新島は？一人なの珍しくない？」

「あー、知らね。別にいつも約束してるわけじゃねえし。お前だって、いつも勝手に人の横に座ってんじゃん」

「ナマイキに男子高生が毎日のようにこんなところ通ってっから、付き合っやってんだよ」

「知るかよ。コーヒーは好きだけど、スタバは愛里の指定なんだよ。別にそのまま大学なり家なりくりや良いのにわざわざ…」

「付き合っであげてんだ」

「そうだよ」

「ふーん。テツちゃんてさ愛里ちゃんのこと相当好きだよね」

「……」

「……ばっかばっか！んなわけあるか、ばっか！」

「……今どきそんな真っ赤になって否定する方がハズカシイヨ……。もしや今までフリー？せっかく親にイケメンさんに生んでもらったのに」

あー、もううるさいこいつ！愛里のことなんか御浜にしか言われたことないのに。

「テツちゃん。ディカフェ出来たって」

鬼の首をとったみたいにへらへら笑いやがって、ちくしょ。

「わーってるよー！」

「子供だな。言わなきゃ何も変わらないのに。一生シロート童貞だな」

「うるさい。良いから愛里にんなこと言うんじゃないやねえ」

真は大抵のヤツがたじろぐオレのガンツケにビクともせずへらへらしたまま、

「よもやテツちゃん、自信がない？大丈夫じゃね？テツちゃん見映え良いし、年上受けするから、意外とイケそうじゃね？仲良いし」

「うるさい。ダメなもんはダメなんだよ」

「言い訳つけてビクついてるだけじゃん？」

「あいつ、親父の女なの」

さすがの真も黙ってしまった。

「…まったく、愛里ちゃんそんなタイプやないでしょ？大体、テツちゃんのお父さん、いくつよ？」

「35。金あるし、こんなでけーガキが二人もいるようには見えな
いし。奥さん死んでるし。24の院生なんてヨユーでしょ？オレ、
親父にそっくりだし」

「…自信過剰だよ。冗談だろ？」

「御浜に聞けば？ほら、冷めるから早く行こうぜ」

冬空の下、緑色の木枠の窓の向こうで、ピアノを弾くあの白い手
で煙草を持て遊ぶ彼女を、誰にもバレないようにそっと見つめた。

オレにとって、母親のようで、姉のようで、何よりはじめて好き
になった女。

ずっと彼女は家に通い、オレにピアノを教えてくれた。

彼女が家に通う理由が他にあると、オレが知ったのはいつだった
か。

それでもオレは、愛しい者を撫でるようにピアノを弾き、いつか、
いつもとは違うことが起きることを期待しながら、彼女をあの手で
待ち続ける。

楽しいことなんて何も無い。

世の中希望なんて何も無い。

そう思いながら、何とかなると期待しているオレがいる。
期待してるから、オレを絶望させた彼女にしがみつける。

今のオレの世界にはあのピアノしかなかった。

普通は受験のためにきちんとした先生をつけるものだ。

この待ち合わせのスタバからほど近い芸大で、オレは受験ために愛里にピアノを習う。

その様子を見た他の先輩達はみなそう言った。

佐藤愛里は舞台映えもするし、ピアノ科の院生の中でも巧い。だけど……って話らしい。

でも別にそんなことはどうでもよくて、オレは愛里にピアノを教えて欲しかっただけで、何だって良かった。

芸大に出入りしてるのだって、別にここに入りたからってわけじゃない。（そもそも部外者だし）

愛里の練習の見学とか手伝いとかいう名目で入ってるだけで、ホントにそれだけのつもりだし。

別に大学なんか、この近辺なら上から下まで選び放題だし。入れりや何処だっけいい。

もう2年も終わりだから、真剣に。特に音楽系は早めの対策をって言われるけど。

別に、なあ……。

「テツ、この曲は好きじゃない？」

大学の練習室でオレのピアノを聞いていた愛里がオレを制す。

「なんで？」

「つまんなそうだから。パワーゼロって感じ。ピアノだっていつも

はヤバいくらい神経質に触るのに」

神経質…。あのなあ。オレがどんな思いで…。

「受験は来年なんだから、今は好きなことしようよ。つまんないヤツはつまんないものしか造れない！…ですって」

受験は…てセリフはまずいだろう。目の色変えてるヤツもいるのに。

「造る？ピアノなんだから弾くで良いだろ？」

「だって、これ言ったのは陶磁科の後輩（同い年）なんだもの」

「ピアノ関係ないし…」

「あら、芸術に限らず全てにおいて、生み出すものには創造主の全てがにじみ出るものよ」

「じゃあ、オレのピアノは愛に溢れてるはずだ」

「あら、ナマイキに高尚なこと言うわね。音楽への愛だなんて」

「愛里へのだよ」

「あら残念。私、子供には興味ないから」

「奇遇だな、オレもおばさんには興味ないや」

「…テツ、あんまり失礼なこと言ってるその後が怖いわよ？」

「…自重します」

ホントに何かしそうで怖いっての。

ここで、本気で話せば、何か変わるのか？

冗談にしか取らないってわかってるから、何だって言えるさ。

ハズカシイなオレってヤツは…。

真の言う通りかもしれないな。

「失礼します」

練習用の個室に人が入って来るのはよくあることだったが、その時の声は、なぜか学校で聞いた覚えのある声だった。

「おー、ホントに沢田がいる。マジでピアノ弾いてたんだ」

「いつもそう言ってるだろうが。新島こそ、なんでこんなところに？」

新島灯路も真同様、よくあの場所に集まってくる。つるんでることもよくあるけど、芸大で会うのはさすがに初めてだ。

「いや、従姉妹がさ、ここの声楽科の編入試験を受けるとか言っていて、見学に来たわけよ」

「なんでお前まで？」

「案内だよ。ベルギーから来たばかりだし、こっちの地理に疎い上に方向オンチだし」

「ベルギーならあっちの音楽学校の方が…」

愛里が少しうらやましそうに言ったが、

「いや、あいつ学校行ってないはず…。なんかここの教授の名刺もってたし。編入が無理なら、まだ18だし、4月から入学でもいいして…。人数少ないし、年齢幅もあるから居心地は悪くないとか言われて…。なんかその教授に招待されたって言ってた」

「なにそれ、そんなおかしい話あるわけ?!留学生かなんか？」

「いや、名前は向こうの名前みたいなのついてるけど、ほとんど日本人ですよ?」

「愛里、なに噛みついてんだよ」

「噛みついてなんかいいわよ。」

噛みついた理由が少しだけ判った気がする。愛里はこの大学にはいるのに結構苦勞してるから、降ってわいたようなチャンスを貰ってる新島の従姉妹とやらが、気に入らないだけだ。

「灯路、知り合い？」

「何だよ、ティマス。賢木先生はもう良いのかよ」

「賢木先生ですって？ピアノ科の先生じゃないのよ？なんで声楽に……」

あー、なんか愛里の逆鱗に触れまくってるなあ……。しかも、拾ってきたのはあの賢木先生っぽいし。

親父の旧友で、ピアノ科の助教授。愛里としては気に入られたい相手だしな。

「さあ？なんか友達が来たからって、そっちに行っちゃったわ。勝手な人。ねえ、ここで誰かピアノを弾いてたでしょう？」

声と共に、軽やかな足音が徐々に練習室に近付いてくる。

どんな美人が出てくるか、当然のように期待してしまう。あの賢木先生が気に入ったってことは、相当美人なんじゃないの？そのティマスって女。

女の手が扉の向こうにちらつと見えた。その後、ゆっくり入ってきた。

「ねえ、ピアノひいてたの、誰？ここの学生さん？」

「違うよ。オレの同級生だよ。あいつ、沢田鉄人って言うんだ」

「ふうん」

じろじろとオレを見る女。確かに賢木先生好みの美人だけど……確か、年上だったと思ったけど？すっげえ童顔。賢木先生、これは

ロリコンじゃねえ？確かに体はすごいけど。

ダメージデニムに薄手のグリーンのニット。栗色の髪は多分地毛だろう。ショートカットに切りそろえていた。

さっぱりした格好で俺は嫌いじゃないけど、確実に愛里は嫌いだな、こういう女は……。全然タイプが違う。

「君さ、なんか、さっき賢木先生の所に来てた人に似てるね。兄弟かな？お兄さんとかいる？」

「あー。それ、オレの親父じゃないかな？賢木先生の友達」

「そーなんだ。じゃあ、君は高校生だけど、この大学の関係者ってこと？」

「いや、別に……。てか、あんた、妙にオレに突っかかってない？」

感じ悪い。この女、さっきからじろオレを見てるし、なんか話し方には棘があるし。美人だからよけーに冷たく感じる。

「べつに。ここの大学の人ってどんな感じなんだろうと思ったんだよ。だってさっきのピアノ、つまんなかったんだもの」

……なっ？！

言うに事欠いて、つつ……つまらないだとお？！

「ちょっと！あんたねえ？賢木先生のお気に入りだか何だか知らないけど、失礼にもほどがあるわよ？私が教えた子よ？」

「……なんで？だって君、ああいうの、弾いてて楽しかった？」

……そう言われると……。それは、どうだろう？

「ティアス、どうしてお前はそう気が強いんだよ。愛里さん怒って

んじゃん。すいません、ホント。沢田も悪い悪くすんなよ？コイツ、ちよつと口が悪いから。悪いな。ほら、謝れよ」

「なんで？怒らせたから？」

別に怒らせるつもりで言ったんじゃない、とでも言いたげな顔だった。

「気分悪くするようなこと言ったから。別に何を言うのも自由だけど、言い方に気をつけるってことだよ、もう。佳奈子さんが言ってただろ？」

なんか新島って、思ったより大人だな……。人の受け売りとは言え、そう言うこと言えるか？

「あ、そつか。そうだね。ごめんね」

「謝って済むわけ？相当失礼よ、その子！」

「愛里……。こいつ、謝ってんじゃん。……。それにつまんないって思ったの、ホントなんだろ？えっと……。ティマス、でいい？」

ティマスはオレを真正面から見上げたまま、頷いた。

確かに、彼女の言うことをオレは認めてはいたけど……。さすがにへこむな。

彼女はまだ何か言いたげにオレを見上げている。

「何だよ？」

「名前、何だっけ？」

「沢田鉄人。ホントに失礼な女だな、あんた！」

さっき新島が説明してただろ！あつたま悪いんじゃないの？

「沢田くん。ピアノ、真剣にやりたいなら、私とやろうか？絶対楽しくしてあげる」

「自信過剰じゃねえの、あんた？世話になんかならねえよ」

オレには愛里がいるのに。

「そう。残念」

意外にも、ティマスは特に怒った風でもなく、オレに笑顔を見せた。

少しだけ、胸の奥の方がざわめいた。

それが彼女の台詞のせいなのか、笑顔のせいなのかは判らなかったけれど。

声楽科の教室に戻っていくティマスの後を新島が追いかける。

新島がティマスには聞こえないように、俺達に身振りで謝ってるのが見えた。

「つまらないですって！何なのよ、あの女！」

新島達の姿が見えなくなったのを見計らって、オレに怒鳴りつける愛里。もう慣れっこだ。

「お前だって、同じこと言っただじゃねえか、愛里」

「私が言つのと、あんな一回聞いただけの女が言つのは別問題！あんたは私が教えてんのよ？私がバカにされたのも一緒よ！」

……ごめんな、愛里。

そう言うけど、オレはあの女の言つとおり、ホントは楽しくなかったんじゃないかって思うんだよ。

オレのピアノがつまんないって言うより、オレが楽しくないことの方がオレには問題だ。

だって、こんなに心の奥の方がざわついてるんだ。

『ピアノ、真剣にやりたいなら、私とやろうか？絶対楽しくしてあげる』

それにしても、何であんなに自信たつぷりなんだ……。信じられん。

ムカツク。感じ悪い。

でも、売り言葉に買い言葉とは言え、オレも相当やな態度をとってた気がする（だって、新島があんなに申し訳なさそうにしてた）

ていうか、何でこんなにオレ、自信喪失しちゃってんの？！

『つまんなそうだから。パワーゼロって感じ』

おかしいな。今日に始まったことじゃない気がする。

「……ちょっと、どうしちゃったのよ、テツ。なんか元気ないわね」
「いや、別に……。オレ、そんなにつまんなそうにピアノ弾いてた？」

「うーん。まあ、誰にでもそう言う時期はあるわよ。迷っちゃったり、判らなくなっちゃったりしてさ。メンタル面がどうしても強く

出ちゃうから。楽しいだけじゃどうしようもないことってあるわけだし。弾きたくなかったら弾かなきゃいいだけの話。自分を追い込んで、一皮むける人もいるけど、それで壊れちゃう人もたまにいるから、無理しない方がいいわよ」

ようするに、オレは相当つまんなそうに弾いてたわけね。

「もっとポジティブに考えなさいよ。誰だって迷う時期はあるんだから。受験シーズンじゃなくて良かったじゃない」

なんだよもう、受験受験って……。

「どうする？今日の練習。テツの好きにすればいいわよ？」

彼女はそう言って、ちらっとドアの方を見た。

正直、今日はもう弾く気にはなれない。でも、愛里がこれからどうしたいのか判っていたから、ホントは動きたくなかった。

「親父、来てるって……」

「会いに行くに決まってるじゃない。こんな堂々と会えることなんて最近無いから。ちゃんと帰って来てんの？鉄城は」

「そりゃ、あそこしか家はないみたいだし、夜と朝はいるよ。たまに夕食作って待ってるし」

「そうなんだ。受験シーズン近いから忙しいとか言ってたのに、そんなコトしてるんだ」

愛里にはそんなこと言ってんだ。オレ達には何も言わずに、いつも通りだったけど。

愛里も親父も、お互いに何もあるわけがないって言う。
でも、愛里はずっと親父を追っかけてる。
家に来るのは遠慮してるみたいだけど。

本当のところはどうなんだろう。そんな言葉なんて、信じられる
わけもないのに。

「他に別宅の一つや二つありそうだけどな、あの親父は。モテるし。
よく女から電話かかってくるし」

「ないわよ。確かにモテるから、女の一人や二人や三人はいるだろ
うだけど、そう言う男じゃないのよ、あんたの父親は」

人の目って言うのは……主観と理想が入り交じって、見たいもの
しか見えないものだよ、愛里？
何でそんなに親父が好きなの？

「オレ、一緒に行った方がいい？」

そう、精一杯気を遣ったオレの言葉を受け、彼女は

「あんた、時々子供みたいね。でも、嬉しいわ。来て欲しい。会い
やすいし……あんたの話もしておきたい」

「オレの話？」

オレの手を引き、練習室から引つ張り出して、扉に鍵をかけた。

「あんたの受験の話よ。本気で受験する気があるなら、いいかげんちゃんとした先生つけないとね。私だけじゃダメなのよ。そしたら、お金がかかるでしょ？お金出すのは鉄城なんだから」

「ああ、受験……」

なんか、いろんな意味で気が重いな……。

普段なら、どの練習室にいるかとか、教務室に聞きに行くのだが、今日はその必要はなかった。

「な……なによ、あれ!？」

音楽科棟内の一番はしにある大練習室。そこには異常な人ばかり。40人くらいだろうか？（一学年に40人もいないのに）普段は広すぎる練習室が狭く感じる。

その中心にいたのはピアノを弾く賢木先生と、歌うティマス。奥の方に新島と親父が控えていた。

何故か、隣で騒ぐ愛理の音が、耳に入らなくなってきた。

クラシックかと思ったら、ロックだった。

だとしても、それを抜きにしても……彼女の歌声はすごい、の一言だった。

楽しくしてあげる、って言葉、案外嘘じゃないのかもしれない。

ピアノと歌い手。たったそれだけの存在が作る場なのに、この大きな部屋と、彼女たちを囲む人間を揺さぶっている。

「テツちゃん！これ、なんて曲？」

「え！？」

人混みの中から声をかけてきたのは、真だった。

隣には御浜と……、確か真の遠縁にあたる南 紗良さんだ。クルビューティーって言葉がぴったりの美人だが、いつ会っても笑顔が固い。そういや、彼女も芸大だ、つつつてたな。

「知らない。ロックっぽいけど聞いたこと無い。何でお前らここにいの？美術じゃなかったっけ？彼女」

真が大学に出入りしている話はよく聞いてた。南さんに会いに美術科の方によく行くんだって。こんな山奥の、交通の便の悪いところまでわざわざ。

知ってたけど、大学内で会ったのは初めてだった。

「たまたまだよ。なんかすごい子がいるって美術の方にも噂が流れてきてさ。見に来たの。まあ、8割はその子がすごく可愛いってことだったんだけど」

「あれ、なんかプロの人が来るとかって話もなかった？」

「そうだったっけ？なんか情報が錯綜してるけどね。気分転換に見に来たってわけ。部室の近くだったし」

真と御浜がいたらしい「部室」がどこにあるかは俺はよく知らないが、美術科棟はこの音楽科棟から（心理的に）ちょっと離れている。（といっても、通り道が草木の手入れがしてなくて移動しづらいだけで、距離的には同じ敷地内なのでそうでもないのだが）

「すごいね、彼女。きれいな声だし。なんて言うか力があるよね。オレ、音楽のことよく判ないけど、彼女は何だか良いよね。すごく楽しそうで。見ててこっちも楽しくなるって言うか。そう思わない？ テツ」

御浜の言葉は、いつでもオレに重くのしかかる。
今までも、これからも、きつと。
でも、今日の言葉は……

「そ……そうかもね……」

重いつつーか、……痛いつつーの！

曲が終わり、彼女が一礼をすると、歓声と共に拍手がわき起こる。クラブやライブハウスではなく、大学の練習室でこんなことってあるのか？

「テツちゃん。聞きたかったんだけど、なんで奥に新島がいるの？ テツちゃんの親父さんがあそこにいる理由は御浜に聞いたけど」

「あー、なんかあの女の従兄弟で付き添いらしいよ？ さつき挨拶に来た。今日はやけに知り合いに会う日だな」

「ふーん。あの人、友達？」

新島の方を見てそう言う御浜。そういや、知らなかったっけ。

「まあ、そんなもんかな。テツちゃん、御浜にお友達紹介してないの？」

「お前が紹介すればいいじゃん……」

いろんなヤツと仲よさそうにしてくせに、どっか一線を引いてるような所があるよな、真は。

「じゃあ、紹介して、オレのこと」

「良いけど。珍しいね、御浜。あんまりそう言うこと言わないくせに。なに、彼女に興味持っちゃった？新島から紹介して貰おうってハラ？」

「言い方悪いけど、そうかな？」

……あれ？

なんだ？なんか今、やな感じがした。

さつきティースと話したときにざわついた場所が、引つかかれてるみたいに痛かった。

「オレ、あの子のこと、好きになっちゃったかも」

何言ってるの？

御浜の言ってること、よく判んねーって。

ティアスは、歌ってただけなの？

お前、そんなこと言うようなタイプじゃないし！

「へー。いいね。御浜、そう言うこと言わないから、オレ、手伝っちゃおっかなー」

「邪魔するのはよく見るけど？」

「うわー、酷いこと言うね、紗良。御浜みたいなお子さまにまでそんなコトしないってば」

「何だよ、お子さまって」

怒って見せる御浜は、オレの知ってる御浜だった。

人混みの向こうで、ティアスが賢木先生や親父と話している。

何の話してるか判らないけど、先生達は楽しそうで、新島が一人判らなそうな顔をしてるところを見ると、専門的な話でもしてるんだろう。

親父も、多少なら話が分かるし、賢木先生達といういつも楽しそうにするからな……。

その様子を遠巻きに見ながら、唇をかみしめる愛里の姿があった。

「なんか、テツと一緒に帰るのって久しぶりだね。家にはよく行くけど」

「そーだな。てか御浜、そのヘラヘラ浮かれた顔を何とかしろよ。さかりのついた猫かお前はっ！」

「えー。それはさすがに酷い言い方。オレが女の子に声かけちゃいけないわけ？」

「まったくだね。なーんでテツちゃんはそんなにかりかりしてんの？何かやなことでもあったわけ？愛里ちゃんのこと？」

「うるさい！何でお前が着いてきてんだ！真！」

「いやだー、この人。今日の愛里ちゃんの前での態度ったら落ち着き払ってて、一体どこのおっさんかと思ってたのに、今度は何だかかりかりしちゃって、情緒不安定な思春期の女子高生みたいー」

「だまれ！棒読みすんな！余計へこむわ！わーっとるっつーの！！」

すっかり夜も更け、芸大からの最終バス（20：10）に何とか乗り込んだオレ達は、バス停から歩いて家路についていた。

オレと御浜は良い。お隣さんだし、仕方ないけど、なぜか真が後ろから着いてくる。

いちいちオレをからかうような、カンに触る態度をとってきやがる。

確かに、真の言うとおり、今日はかーなーり、かりかりしてはいるけれど。

「南さんに送ってもらえばよかったじゃねえか、お前らは」

「だめだって、卒制があるから忙しいんだって」

「なに忙しいのに押し掛けてんだよ、そーんなに彼女に会いたいわけ？」

「仕方ないじゃん。紗良のヤツ、忙しすぎて帰ってこないんだから。年明けじゃないのか？卒制って……？」

……オレのつつこみはスルーかよ。顔色一つ変えねえ。

「ふーん。つき合ってるわけでもないのにご執心だな。……てか、

一緒に住んでるみたいな言い方」

「住んでるよ。言わなかったっけ？オレ、紗良んちに居候してるの」
「……そう言えば」

確か、真は家族を事故でなくしてて、遠縁の親戚の家に預けられてるって聞いてたけど、そこが南さんちか……。

「真は、ホントに紗良さんのこと好きだよな。すっごく大事にしてる」

「お！御浜は良いこと言うよね。そうそう、オレってば大事にしちやってるわけよ。あの人お堅いからさ」

「何が大事か！？見るたび、違う女連れて歩いてるくせに」

南さん一筋だというなら、そう言う態度をしるよ。軽すぎんだよ、お前は。いくらなんでも。（ある意味うらやましいけど）

御浜もそんな真のことを笑い飛ばしていた。

そういえば、今まで、御浜のそう言う話って聞いたこと無いよな。もしかしたら学校でそう言う女がいるかもしれないけど、御浜がオレに言わないわけがないし……。

どっちかつつと……相当奥手で、そんなに下ネタも興味なくて、中学の時から先輩女子に人気のあつたさわやか美少年はめとのイメージそのまんまのいい子ちゃん、ってかんじなんだけどな。

何で、急にあんな失礼な女が良いなんて言い出したんだか。

「ただいまー」

「おじゃましてーす」

「……って、何で真までオレんちに着いてくるんだよ！」

「あ、ひどいなー。御浜はよくてオレはダメなわけ？てか、御浜がフツーにこっちに来たから、オレもこっちに来ただけなんだけど」

ああ、もう何もつつこむ気にならん。……今日は一人にして欲しい。考えることが多すぎるよ。

「あ、テツちゃんおかえりー。御浜さんと真さんもいらっしやい」

セーラー服のまま台所から出てきたところを見ると、妹は帰ってきたばかりのようだった。しょっちゅう家に来るから、もう御浜も真も顔なじみだ。

「親父は賢木先生と飲んでくるから遅くなるって。ちょっとピアノ弾いてるから、テキトーにしてて」

玄関を上がったところで、学ランを脱ぎながら、御浜達を置いて奥にあるリビングに向かう。

「ちょっと、テツちゃん！待ってよ。御浜さん達とは言えお客さんよ？ほつといていいわけ？」

「10時までしか弾けないだろうが。今さら客もくそもあるかよ」

「あはは、良いつて、柚乃。テツ、なんか調子悪いみたいだからさ。あと30分しかないし、弾かせてあげようよ」

リビングの扉を閉めた後、電気もつけずに思わずその場に座り込む。

そんなこと、ここに来るまで一言も言ってなかったじゃねえか……。ホント、かなわねえな、御浜には。

なるべく、フツーにしてたつもりなのに。

……もう、何も考えたくない。とにかく弾こう。
弾いてる間は、忘れられる。
集中してれば……

ダメだ、なんでだ？

扉の前に座り込んだまま、体が動かない。

暗闇の中、どうして良いか判らない。

……弾かなきゃ。

御浜が、心配する。

何とか体を起こし、電気をつける。

母のグランドピアノの蓋を開け、赤いキーカバーを無造作にはずし、楽譜を開く。

シヨパンエチュード。確かに、面倒くさくて、難しい。けど、別に嫌じゃない。

指、動かねえし！なんで？！

ついこないだ、普通に弾いてたつもりだったのに。
これが愛里が言ってた、メンタル面ってヤツかな……？
でも、こんなことで？別に何も無いのに。辛いこととか、大きな
ショックとか、別に何も無い。

ティアスの言った「つまんない」って台詞？

いや、あの程度ならいくらでも言う奴はいる。

今、彼女の言い方を思い出せば、（あの時はむかついたけど）は
つきり目の前で言ってくれて、いつそ清々しいくらいだ。

あの大学で練習してたら、いろんな陰口が聞こえてくる。

愛里がティアスの待遇に対して怒ることをフツーに感じる程度に
は。それくらい、みんな苦労して入ってる。それでもさらに上を目
指すヤツもいる。そんな場所。

だから理解できる。

……あー。オレ、やっぱり楽しくないのかな？わかんねーよ。
動機が不純だからな。

愛里に教わってるのが楽しかった。

愛里が誉めてくれるのが嬉しかった。だから、毎朝5時に起きて
練習して、夜も10時までずつと練習。

部活も何もしないで、ひたすら練習してた。

それでも普通科高校を選んだのは（確かに県内にあまり選択肢が
なかったのもあるけど）迷っていたから。

「弾かなきゃ……」

迷ってる場合じゃない。愛里はオレの受験のこと、真剣に考えてくれた。

オレは期待に応えないと。

でも、愛里以外の先生なんていない。

だから、オレにはこれしかないのに。

焦れば焦るほど、オレの頭の中でティアスの歌がぐるぐると回る。

忘れようと思っても、忘れられない。

彼女が歌った後の周りの歓声、拍手。そして、彼女を見いだした賢木先生の満足そうな顔。

あの御浜ですら魅了された、彼女の笑顔。

なんか、「負けた」って感じたよな……。

「テツ、今日、ティアスに貰った楽譜あるだろ？弾いてみてよ。今日歌ってた曲だろ？」

「……御浜。何でここに？」

立ち上がった勢いで椅子が転がる。その失敗を取り繕うように、ゆっくりと椅子を拾い上げた。

御浜に対して、そのフェイクは意味がないと知りながら。

「良いから。初見だろ？ゆっくりで良いから、練習しながらで良いから弾いてよ。オレ、あの曲好きなんだ」

オレが最初していたように、彼は扉の前に座り込む。
しかし、彼の目はまっすぐオレを射抜いていた。

あの時、歓声がやみ、学生達の波が退いた後、知り合いの強みで彼女たちに近付いた。

新島とティアスに、真が御浜を紹介した。

何かトラブることを期待していた。でも真の気持ち悪いくらいの猫かぶりっぷりと、元から異常なくらい愛想のいい御浜でそんなことが起こるわけもなく、滞り無く話は終わった。

オレはもう、何も話もしたくなかった。

それなのに、あの女がこの楽譜を押しつけてきた。

今、賢木先生が使ったのと同じ楽譜だよ。と言って。

「何様だよ、あの女。いきなり押しつけてきて、弾けとも何も言わないで」

「弾けって言って欲しかった？」

「……なんで?!」

「弾いてよ」

御浜の言葉に押され、オレはピアノに向かう。

今度は、カンタンに指が動いた。

そんなに難しい曲じゃない。

初見でいきなり弾けるほど、オレにはテクニックがないけれど。

「50年代ロックンロールだな。賢木先生、年ごまかしてんじゃねえの?」

ただたどしく弾きながら、ピアノに集中しすぎないよう会話をはじめる。

「鉄城さんよりは少し上なんだっけ? 賢木先生、今年40だっけ?」

「…にしても、計算があわねえか。クラシックの先生が50年代口ツクンロールを、ピアノとボーカルだけで、しかも芸大内で披露しちゃうのか。だから敵が多いんだな、あの人」

「多いんだ、あの人」

「多いね。良い話も悪い話も、あそこにいるとたくさん聞くよ。在籍してるわけでもない、顔出してるだけのオレがこれだけ色々聞いてんだ。中ではもっといろいろ言われてるだろうな」

「敵も味方も多いってことか……」

賢木先生は、こんな風に弾いてなかったな。もっと……なんて言うんだろう？

「敵も味方も多いってことは、幸せなことだね。ねえ、テツ」

ティアスの目が、オレを射抜いた、あんなまっすぐな目ではなくて……

もっと……

「テツ？」

「え?!……いつの間に、横に？」

「てか、話聞いてた？手が止まってたし」

「聞いてた聞いてた。幸せなことだねってことだろ？敵が多いのは不幸じゃね？」

御浜は取り繕うようにそう言ったオレの台詞を受けて、静かに微笑むと

「両方あるから、ちょうど良いこともあるんだよ」

時々、言ってることが判らん。御浜の言うことはオレには難しす

ぎて。

ただ、心地よい重さでオレにのしかかる。その強引さも癖になる。だけど今日は何だか心臓に悪い。まだ、鼓動が早い。

「顔が赤い。ホントに調子悪かったりして。柚乃にいつとこうか？」
「いや、いい！何でもないから。それより、真はどうした。待たしてるんじゃないのか？」

「うん、そうだね。練習、してて」

あと10分。そう言って御浜はリビングを出ていった。

練習曲、やらなくちゃな。

そう思っても、先生のピアノ、彼女の歌声。絡み合って、オレの脳裏をぐるぐる回る。

つまらないって言ったティースと、歌うティース。

やっぱり、指は動かなかった。

練習を終えてキッチンに向かうと、大抵、御浜と柚乃がそこにいる。真がそれにつき合って……。

でも、今日は柚乃と秀二だけがそこにいた。

「御浜は？もしかして帰った？」

「真さんが、今日は御浜さんちに泊まるから、また明日って言うた」

「最近、よく来ますね、あの泉って子」

秀二は勝手しつたる何とやらで、勝手に換気扇を回し、側に椅子を移動し、煙草に火をつけた。

彼は向かいの開業医の次男で、N大の理学部で講師をしている。こうして時々家の様子を見に来る。

寝ぐせだらけで、もうそう言う髪型のように見えてしまう、手入れの全くされていない長髪に、中途半端に細い黒縁眼鏡。無精ひげもしよつちゆう生えている。はつきり言って、清潔感ゼロ（本人はわりと潔癖性なのだが）今どきオタクだってもう少し身なりに気を遣う。制服のままの柚乃とキッチンに座る姿は、はつきり言って犯罪一歩手前。

ちなみに、ただご近所さんだけではなく、戸籍上は御浜の「甥」に当たる。といっても、秀二はもう今年で32になるのだが。

「まだ31です。失礼な」

「そんなにかわんねえだろうが。1歳や2歳でがたがた言うな。こんな夜中に何しに来た？」

「テツちゃん。秀二さんは夕食持ってきてくれたのよ。様子見に来てくれたの、パパに言われて」

「先輩も助教授ともなると、忙しさに拍車がかかっているようですね」

「親父は賢木先生と飲みに行ったんだよ。いつものことだ」

「そんなこつたろうと思いました……」

親父と秀二はN大理学部先輩後輩だったそう。そのまま二人とも院にいき、教員になった。（その間、オレも柚乃も生まれてたし、母さんも死んでたのに、金は一体どうしていたのか？母さんの実家が金持ってるのは知ってるけど、子持ちの婿を院まで行かせるか？我が親ながら謎の多い人だ……）

「御浜が先に帰るなんて珍しい。何かあったのかと思ってましたが」
「何かって？」

「いいえ。……今日はちらし寿司です。桃の節句に向けて、花まるで特集してたので、参考にしてさらにバージョンアップ版です。錦糸卵の幅も均一で完璧です」

「秀二さんて、ちゃんと大学行ってます？何で、そんな朝やってる番組見て、料理作れるんですか？」

柚乃のつつこみももつともだ。家に来るたびマニア度の高い料理を持ってくる。

「ちゃんとしたもの食べないと大きくなれませんか？特にテツ。こそこそ毎朝ランニングしたりピアノ弾くだけじゃなく、ちゃんと栄養とんなさい、栄養を。だから筋肉ばつかついで、背が伸びないんですよ」

お前と比べたら、（真以外の）大抵のヤツは「背が低い」に分類されるつつの……。オレはフツーだ。
てか、それより……

「……何でオレの朝の行動を……ストーリーカー？」

「秀二さん、いつ寝てるんですか……？」

ノーコメントかよ。

「じゃあ、私はこれで。ついでだから、御浜の家にも差し入れしてきましようか。……テツ、何か伝言は？」

「伝言て……。別にないよ」

「そうですか。なら結構」

彼はそう言うと、たばこをくわえたまま、玄関へ向かった。

秀二がここに来たのは、親父に言われてオレ達の様子を見に来ただけなんだろうけど……。

「何なんだよ、一体？」

何か言いたげな秀二の態度が、オレの混乱を増していく。

第1話 (the heads) 後編

「こんにちは。灯路に聞いたらここだって言うから」

昨日の暴言を忘れたかのように、笑顔でそう言ったのはティラスだった。

彼女の後ろでは新島が苦笑いしてる。

いつものように、いつものスタバで愛里を待つ長い時間。誰か一緒にいれば喋ってるけど、一人の時は大抵譜面を読んでいることが多い。

新島も、いつもというわけではないけれど、仲はよいのでここで話をすることもある。

「昨日の譜面、読んでくれてるんだね」

オレの手元を見て微笑む。思わず手で伏せてしまったが、もう遅い。

「……別に。ついでだよ。大体、あんた、何のつもりでこんなもの？」

「いかんいかん。落ち着いて、冷静に喋ろうと思っているのだが……。口からどうしても暴言が……」。

彼女一人ならまだ良いけど、新島が隣にいるってのがな。

「だって、すごい真剣にこっちを見ててくれたじゃない、昨日。だから、好きなのかと思って」

席は4つ。彼女は極当たり前のようにオレの左隣に座った。……近いよ。

「ティース、なんか飲む？ついでだから買ってくるけど」

「あ、ホットカフェミスト、デйкаフェでツールね。よろしく」

愛里と同じのかよ。って、何でこんな小さなことに反応してんだオレは。乙女かよ。

大体、ここは愛里の席だし、愛里だってこんな近くには座んねーっつーの！向かいだよ、フツーは。

「何でデйкаフェ？」

あえて目をそらしながら話してるのに、彼女はオレとの距離をさらに縮め、でっかい目で下から覗き込むようにオレの顔を見つめた。

「いつもコーヒー飲み過ぎちゃうから。カフェインの摂取過多ですよ。日本はデйкаフェ少なくて困るんだ」

彼女の返事に、少しだけ困ってしまった。どうしても愛里と比べてしまう。

彼女はこんなにも愛里と違うのに、同じことばかり言うのだ。ここで焦ったら、みっともないだけだ。

「君と同じこと言った女がその内ここに来るよ。オレはその人待ってんだけど」

無理矢理笑顔を作って、覗き込む彼女と目を合わせた。

一瞬、彼女が目をそらしたのに、オレは満足した。

「ふーん。それって、昨日一緒にいた人？賢木先生と沢田先生がなんか言ってたなあ……。確か、佐藤さん？」

「そう。何、君も一緒に飲んだの？うちの父と、賢木先生と」

「ううん。帰ったよ。灯路も一緒だったし、沢田先生も「今日中には帰る！」って叫んでたし」

そういえば、朝はすっかり帰ってきてて、シジミのみそ汁とか作ってたな。

「私は、あなたのことが知りたくて来たんだけど」

「……オレ？つまらないとか言ってたくせに」

「あなた自身は面白そうよ？灯路の話を聞いても、御浜の話を聞いても」

……なんか、不審な名前が出たな。

「ってか、何で昨日の今日で御浜と、オレの話なんかしてんだよ！」

「んー……メル友？今日のお昼くらいまで、20通くらいしたかな？今日もこれから会う予定だし」

「何じゃそりゃ？！いつのまに？！」

「そんなこと言われても。御浜が会いたって言うんだもん。私も別に御浜のこと、嫌いじゃないし。あの子は一緒にいると楽しそうだし」

いや、まあ、御浜はこの女のこと相当気に入ってたみたいだから、良いことだけどさ。

それにしても、意外と手が早いな、御浜……。今までそう言うことがなかったから、たんに奥手なのかと思ってたけど、対象がいなかっただけなのか。押しまくってんな。

しかし、20通は、普通会ったばかりなら退くと思うけど、この

女も相当変わってるよな。

それとも、女の方もまんざらじゃないっつーことか？

うーん……相手が御浜だと思うと、なんか変な気分だ。

「御浜が、沢田くんのこと気にしてたから。仲いいんだなって思ってた」

「仲いいっつーか……まあ、隣にいても構わないっくらいだけど」

「そうなの？まあ、そんなもんなのかな。でも、御浜の話であなたに興味を持ったのは確かだよ」

「何言っただよ、あいっ……」

「沢田先生の息子さんだっけ聞いてびっくりしたけど」

新島が二人分のドリンクを持ってオレの向かいに座る。

ティースがドリンクを受け取りながら、笑顔でお礼を言った。

「沢田の父さん、かつこいいよな。優しいお兄さんだけど、いざつてとき頼れるって言うか、しっかりしてるって言うか。まあこんなでかい子供がいるから当たり前なんだけど、若いからかつこよく見えるっつーか。オヤジっばさゼロだしな。ティースもああいうの好みじゃんね？フケ専だし」

「灯路……フケ専で、言葉が悪すぎ！ちょっと年上の人の好みなだけよ。沢田先生はかつこよかったけど、あの人がかつこいいのは、子供がいるからよ？」

「そうなの？……不倫願望？」

「だーから、そう言うのじゃないってば」

「知ってるって。ティースはブラコンだから」

「だから！もうやめてよ、沢田くんの前で恥ずかしいし！」

なんか変な単語いっぱい出てきたし。

「フケ専なの？年下王子様系さわやか美少年（近所のおばさん談）は恋愛対象外？」

「は？沢田くん、何言ってるの？」

こころなしか、顔が赤い。

「いや、判んないなら良い。てか、うちの親父はぶっちゃけかなりモテルよ？」

「だから、そうじゃないって。聞いてた？」

やっぱり顔が赤い。

ちゃんと聞いてたって。親父をかつこいいとか、いい男とか言う女は結構いるけど、「子供がいるところが」って言ったのは多分初めてだ。ダシにされたことは数知れないけど。

「ブラコンなんだ？」

おっと、いかん。うつかり顔がにやけてしまう。なんか弱みを掴んだ気がするぞ。

「……違うもん」

なんだ。可愛いじゃん、この女。俯いて照れちゃって。拗ねてやるの。

「まあ、ここんちの兄ちゃん、苦勞してるからな。年も離れてるし。性格は歪んでるけど、結構すごい男だよ。だから、ちよつと男選びの基準がずれちゃったただけだよな？」

「……やっぱ、ずれてるかな？あの人、相当よね」

「うん、相当だよ?」

新島は自分でまいた種を刈り取るように、さりげなくフロアに入った。

「あれ、ティラス! 何でここにいるの? 待ち合わせは……」

何故か店に現れた御浜は、そう言いながら、空いているオレの右隣の席に座り、携帯で時間を確認した。

別に御浜とも待ち合わせなんかしてないけど、コイツがいろんなことを突然行うのはいつものことだ。

「うん。まだ時間あるから。沢田くんの様子を見に来たの」

「そう。奇遇だね。俺もちょっと早く学校終わったから、テツの様子見に来たんだ」

何でだ……。

何でオレがお前らに様子を伺われなくちゃ行けないんだっつーの……。

「これ、昨日の楽譜?」

まったく、ティラスも御浜も、めざとい。手で隠してたのに。

そろそろ愛里が来るころだ。ついだし、しまっておこう。

多分、愛里がこれを見たら、不機嫌な顔をするだろうから。

「……愛里が来るまで、時間があつたからだよ」

「また、弾いてオレに聞かせてよ。それで、ティラスと一緒に歌えばいい。きつと、賢木先生の時よりすごくなるよ」

「お前ね、芸大の先生と比較して、何言ってるの?」

「なるよ」

そう言って、御浜は笑う。

新島は少し苦笑いしていたけど、誰も彼の言葉を否定はしなかった。茶化すことすら。

オレだけかな？御浜の言葉に力を感じているのは。

ティマス達の様子を見る限り、そうじゃないと思いたい。

「かもね」

「うへー、沢田、自信過剰」

何でオレだとそう言う話になるんだよ。

「そっぴゃさ、佐藤さんて、いつ頃くるの？」

「さあ……今日は遅いほうかな？」

御浜に言われ、思わず携帯を見た。連絡はない。

まあ、酷いときは全く連絡なしで3時間くらい待たせるしな。

「ティマス、昨日メールした本さ、今から見に行こうか。ここ、上に本屋があるから。今日、夜は用事があるって言ってたろ？」

「うん。……灯路も……」

御浜と一緒に立ち上がるティマスが、新島に視線をくれる。

何だろ、どういふつもりなのかな、この女。

「後で行くわ。オレ、もうおっさんだから、ゆっくりさせてくれ。コーヒー残ってるし」

彼女はオレをちらつと見る。視線がぶつかったとき、思わず目を背けてしまった。

それは彼女も一緒に、もうオレを見ることなく、御浜の後ろについて行った。

「何だよ、御浜に気い使ってくれた？わざわざ」

「いや、オレ、邪魔かなー？と思ってさ。ティアスがついてこい、つつーから来たんだけど」

意外。あの女がついて来いっつつたんだ。メールの話を聞いた後だから、変な感じだな。

新島は空のカップを弄びながら、オレの顔を見ずに話を続ける。

「てかさ、よく判んないけど、白神ってさっき気を遣ったよな？お前になのか、ティアスになのか知らないけど」

「ああ、愛里のこと？」

「そ、佐藤さんの性格じゃ、ティアスと合わないのは明白じゃん？昨日もかなり睨んでたし、そうでなくても怒らせてたし。佐藤さんほどじゃないけど、ティアスも性格きつ从いから、衝突すんの目に見えてるし。女同士はえぐいからな……」

確かに。そんな怖い状況に立たされるのは嫌だ。もしかしてその礼ってコト？

昨日も思ってたけど、新島って、こういう所スゴいっつか、えらいっつか……。今まであんまり気にしてなかったけど。

「なんかさ、ティアスの保護者みたいだな」

時計仕掛けのオレンジのテーマが流れる。渋い着メロ。さすがにオレはその選択はしないな。

「わりい、ちょっと出させて。はいはい、なんすか、お兄さん？ ティアスですか？ いや、オレ、知らないなあ。うちの親とか連絡しました？ …… ああ、そりゃそうですね。オレも聞いてないですもん」

そう言ったところで、新島は電話を切った。
明らかに相手が途中で切った、って感じだけど。

「……ついさつきまで目の前にいたじゃん、ティアス。相手誰よ？」
「ティアスの義理の兄ちゃん。まあ、うっさい上に自己チューなんだわこれが。電話も勝手に切るし」
「……兄貴かよ」

さつきさんざん二人でずれてるだの、歪んでるだの言ってた、あの兄貴ね。どんなヤツだろ。

「教えてやればいいじゃん。てか、家出？」
「似たようなもんだよ。居場所ばれるといけないから、うちの親とかにももちろん内緒。アイツ、めちゃくちゃだよ？」

メチャクチャっつーか、クソ度胸はありそうだけど。

「ベルギーにいたのに、わざわざ兄貴の元から出てきて、なんでこんな片田舎に」

「さあ、あんまり詳しく聞いてないから知らん。横浜に兄ちゃんのマンションがあるから、そこに行くって言って飛行機代だけ借りて日本に来て、東京から『ながら』でわざわざここまで来たからほとんど金なし。いきなり携帯にかかってきて、どうしようって言われてな」

「どうしよって言われて、どうしたんだ？お前んちの両親とか知らないんだろ？」

「ああ、それは何とかしてる。携帯も昨日持たせたし」

「……何とかって……。てか、何でそこまですんの？いくら従姉妹だからって。もしかして」

新島って、ティアスのこと好きなんじゃ……。てことは、御浜の存在って、邪魔じゃない？

「いや、ないない。あの女、ガキだし。可愛いけど、年上だけど、妹みたいなモンって言うか……。まあ、アイツには借りもあるし」

「借り……？」

「そ。だから、別に白神がティアスのこと落とそうと落とすまいと、どっちでも良いって。そう言うことだろ？」

「いや、落とすかなあ。ああいうのと無縁の男だからな、御浜ってまあ、本気なら、うまく行けばいいかと思うけど」

「……ああ、そう。オレさ、別にどうでも良いけどさ」

「何だよ」

「もし、……もしもだよ？ティアスの意志が違うところにあつたら、オレはそれを尊重するよ」

遠回しに言ってるつもりかもしれないけど、それって、今の時点でティアスは御浜のことそうでもないってコト？幸先不安だな。

「お互いのことだろ？」

「こう言うのは環境もあるって。タイミングとかね。沢田はそう言うことなかった？」

入口に、愛里の姿が見えた。

「なさそうだな。沢田って基本的に『待つ』タイプだしね。オレ、そろそろ行くわ」

「ティアスの所？まだ30分もたつてない」

「いや、一応、連絡あるまでは待つさ。あいつ、白神のこと、まんざらでもないみたいだし」

今度はオレに気を遣ったってわけね。

「ご丁寧に、テーブルに残ってた3人分のカップをまとめて持ってた。いった。」

それにしても……どっちだよ。あの女は御浜に気があるのかわいのか、はつきりしろって。

結局、その後何も言わずに、新島と入れ替わりで愛里が来た。

「テツ、今、新島くんいたけど、ここにいたの？……テツ？」

「……あ、悪い、愛里。ちょっと考えごとしてた。なんだっけ？」
「だから、新島くんよ」

もしかしたら、嫌な気分だったかな？アイツ。

何であんな根ほり葉ほり聞いているかね、オレって。ティアスがどこに住んでようが、どうやってきてようが、関係ないじゃん。

あんな女、どうだって良いじゃん。

正直、練習には身が入らなかった。

今日は大学ではなく、愛里の家でのレッスンになったのもあるかもしれない。

大学で、他の人が出入りしてる環境の方が、ずっと良い。

でも、ちゃんと指が動いた。

それだけでも、何だか助かったような気がした。

愛里が……オレが指を動かせないって知ったら、どんな顔をするだろう……いや、してくれるだろう。

想像できない。

まっすぐ、家に帰る気にもならなかった。

愛里の家は、大学に近いけれど、オレの家からはちょっと距離がある。だから、いつも帰りは送ってくれる（8時過ぎるとバスがないし）

でも、今日はまだバスのある時間だったから、オレは彼女の気遣いを断って、一人で帰った。

そのまま、終点である地下鉄の駅前で降りた。

もうすぐ万博が始まるとかで、工事をしてるし、店が減っていた駅前だが、残っていた本屋に入って立ち読みした。

でも、すぐ閉店時間になり、ふらふら歩いて、コンビニに入る。

……いま気付いたけど、なんか、この無駄にふらふらしてる感じって……！

うっ、考えたくない。

何、町中さまよってんだ。マジか自分？

せめて、さまようなら、着替えてくればよかった……てか、その前に、さまよってる場合じゃねえだろ。

コートを着てるから、学生服は隠せるとして……このいかにも学校指定のバッグはヤバイだろ、この時間。

大体、オレが家に帰らない理由がわかんねえ！なんでこんな所で
ふらふらしてんだ。ピアノが弾けないからか？！

……って、答えでてるし。

もういいや。家に帰ろう。ピアノの前になきゃ良いわけだし。
それに携帯もなつてた気がするし……

着信履歴が15件で！まだ11時なんですけど。別に行方不明に
なつたわけでもないし。何だよ、誰だこれ？

もしかして愛里？

期待する自分の妄想力が悲しくなるな。御浜8件、真4件、新島
2件、オヤジが1件……。御浜、電話しすぎだろ。それに真や新島
からって珍しい。

そう思ってたなら、コンビニの前で御浜から着信。少し躊躇したけ
ど、取らないのもな。

『テツ。レッスン終わった？もう家に帰ってる？』

あれ？家にいないから電話してきたかと思ったけど、この様子だ
と御浜も家にいないな。

「いや、駅前のローソンにいるけど。お前こそどこにいるんだよ」
『真と新島くんと一緒に、駅前のクラブにいる。テツも呼ばうと思
って何度も電話したんだけど』

何、そのメンバーでクラブって。てか、それでこんな何度も……。
なんか、予想が出来たぞ。

「もしかして、ティアスが出るから？」

『そう。よく判ったね。テツもおいでよ。なんか、知り合いのコネで歌わせてもらえるって言って、喜んでた。ブルースだって言うてたけど』

「一人で歌うの？」

『なんか、その知り合いの人のバンドがいて、特別プログラムって扱いで一曲だけ歌うって』

なんだそりゃ。

そんなむちゃくちゃな話、あるかよ。

その知り合いのコネってヤツは、相当強力だな。また、愛里が聞いたら関係ない話なのに怒りそうだ。

『場所が判らないなら、そこまで行くよ。もうすぐ始まるから……』

「あー、良いよ。オレ、もう帰るから」

『いや、一緒に聞こう』

いきなり、後ろから腕を捕まれる。

「御浜……！」

「何、制服のまま？ちよつとまずいかなあ？」

心臓止まるかと思った。

道理で、周りが静かなわけだ。地下鉄も止まり、飲み屋も少ない。駅前の深夜は、ほとんど人がいない。

「せつかくここにいるんだから、ちよつと覗くだけでもよくない？この近くだし」

「いや、オレ、こんな格好だし」

「一曲だけだよ」

オレの腕も掴んだまま、強引に引っ張っていく。

「やだつて！何でそんな無理矢理……オレは別にあんな女の歌なんか……」

ここまで拒絶してんのに、無視かよ。
なに考えてんだ？

「テツ、そんなに嫌がる理由が判らないや。別にティアスのこと嫌いなわけでもないし、怒ってるわけでもないのに。そこまで拒否しなくても良いと思うけど。それに、ホントは聞きたいんじゃないかな？」

御浜の力なんか、すぐに覆せる。彼の腕を逃れるのなんか簡単だけど、そうしようとは思わなかった。

御浜には、理由がある。……多分。

「昨日、あの女の態度、悪かったんだぞ？お前は知らないだろうけど」

「新島くんに聞いた。佐藤さんが怒ってたって。テツにフォローしといてくれて頼まれた」

何もしてない顔してその気遣いは何だ、新島。

「愛里は……怒ってる。今日も、新島の姿を見かけたから、またあの女がうるついているんじゃないかってカリカリしてた。オレのこと、なんか言われたのが、相当いやだったみたいだし」

でも、それって、自分のことを言われたからだよな。

「そんなの、テツには関係ないし」

確かに、そうなんだけどさ。

愛里のことは、オレには関係ない。

って、何げに酷いこと言ってるって、御浜。それは……へこむよ、オレは。

いつの間にか、裏通りにあるクラブの目の前についていた。御浜はオレの腕を引っ張ったまま、階段を下りていく。

「……大体、あの女は何がしたいんだよ？昨日はロックで、今日はブルース？」

「聞けばいいじゃん。聞いてから文句言えば？彼女みたいに」

チケットは？もしかや顔パス？

扉を開けると、ホールはざわついていていたが、奥の方に用意された舞台に、ティアスが立っているのが見えた。

「後ろでキーボード弾いてるの、女優の佐伯佳奈子じゃねえ？」

「だれ？佐伯佳奈子って？」

「しらねえの？とし行ってるけど、2時間ドラマとかでてる……。ほら、こないだ深夜の音楽番組でちよつと喋ってた」

なんか、バンドに有名人がいるらしく、ホールからしきりに佐伯佳奈子って名前が聞こえてきた。

「テツ知ってる？佐伯佳奈子って。周りがなんか騒いでるけど」

「うーん、どんな顔か知らんけど、オレが知ってる佐伯佳奈子って

女優は、クラシック雑誌にコラムを書いてる」

「その人かなあ……？オレ、あんまりテレビ見ないから判んないんだよね」

本人かどうか知らないが、奥でキーボードを弾いてる年輩の女性
は、周りがかすむほど華やかな女だった。

中心に立つ、ティアスを除いては。

昨日とは違って変わって、落ち着いた感じのタイトなブラックド
レスだった。

キーボードのソロから、曲が始まった。

「あ、御浜！いたいた。ホントにテツちゃん連れてきたんだ。すげ
ーね」

「あれ？新島くんは？」

「一番前」

「そうなんだ。さすがに、あの人数を割って、今さら前には行けな
いな……」

彼女の歌は、力強く、心地よかった。

原曲は確かにブルースだった。けれど、アレンジがされていた。

彼女の歌の持つ世界は、まっすぐな一本の光のよう。

アレンジされた曲の持つ疾走感に、彼女の声も昇っていくようで。

ヤバイ……、ちょっと、好きな声かも。

「ティアス、綺麗だと思わない？」

「まあ、舞台映える子だよな」

「そうじゃなくて、歌ってるところが」

「何、御浜ってそこがよかったわけ？」

「……だから、いまそう言う話をしてるんじゃない？」

聞いたら、またオレはこうして彼女に引き込まれてしまうんじゃないかと思って怖かったんだ。

だって、それは愛里を裏切ることにならないか？

彼女が育てたオレのピアノを否定したティアスを、オレが認めるだなんて。

彼女の歌が終わっても、ホールはざわついたままだった。

バンドが舞台からはけてる最中も、音楽が流れ、踊り始める。

「テツちゃん？終わったよ？何ぼーっとしてんの。てか、制服じゃん？！」

「え？あ、真、いたのか」

「ずっといたつての。ティアちゃんに挨拶して帰るけど？」

ティアちゃんて……ああ、ティアスのことか。何なんだよ、その軽い呼び方。

「来るだろ？テツ」

「いや、先に帰るよ」

「なんで？すっごい真剣に聞いてたくせに」

オレはやっぱり、御浜にはかなわないかもしれない。

改めて、そう思う。

舞台のさらに奥に、楽屋が用意されているらしい。真の案内でそこへ向かう。

さっきから、顔パスで入ったり、楽屋まで押し掛けたり……。一体何がどうなってんだ？歌ってたヤツの知り合いだからって、……いや知り合いつつつても、昨日会ったばかりなのに。

「てか、テッちゃんは何で制服なんだよ？どこいたの？」

「それがさー、家にいないで駅前のコンビニにいたんだ。珍しいよね。今日はどっちで練習してたの？」

あー、もう、うつさい。その話題には触れるな！

帰りたくなってふらふらしてました、なんて言ったら、何言われるかわかんねえ。

黙殺。黙殺するに限る！

楽屋の扉前の廊下にティアスと新島がいた。

デニムにセーター、ごつめのジャケットにニット帽。夕方会ったときと同じ、カジュアルな格好だった。さっきのドレスは舞台衣装だったらしい。化粧は落としてないのか、ちよっときついまま。

二人はなにやら争っていたらしいが、傍目からちょこつと見た感じでは、ティアスに新島が言い負かされているように見えた。

「ティアス！よかったよ、今の」

笑顔で彼女に駆け寄り御浜。さらっとそう言うことが言えるんだよな、お前は。

「ありがとう。沢田くんも……来てくれたんだね。どうだった？」
「別に」

「また、聞いてね」

我ながら素っ気ないし、冷たい態度だと思ったのだが、彼女は気にする様子もなく、笑顔でそう言った。

「そっぴやさ、なんか喧嘩してなかった？二人？」

「いや、大したことじゃないんだけど……。ティマスがよけいな気を遣うから」

「余計じゃないわよ。フツでしょ？じゃ、私、もう行くから」

「だから、帰ればいいって言うてんだろ。オレのことなんか気にするなっつーの」

ティマスは黙っていたが、歩みを止めようとしなひ。それを新島が必死に引き留める。

一体何があつたんだか。

「……沢田んち、妹がいたよな、確か。今夜もいる？お父さんは？」

「ああ。いるけど……。オヤジはどうか？電話があつたし。柚乃がどうかした？」

「ティマスのこと、一晩泊めてやってくんない？」

「はあ？」

何をわけの判らんことを！

「いや、ティマスのことさっき話しただろ？で、コイツ、オレに気を遣って今夜は部屋に帰らんって言うんだよ。コイツ、言い出したら聞かないからさ。だからって、この時間にコイツを一人で放り出すのも悪いしさ」

「ちよつと待て、それで何でオレんちなんだよ！」

御浜が……。

「だって、白神の家は父さんと二人暮らしだし、オレン家に連れて帰るとあの凶暴なにーちゃんにばれちゃうし。お前んちなら妹いるから間違いも起こらないだろうし、お父さんも顔知ってるからさ」

確かに……。賢木先生のとつで、一緒に飲んでるくらいだしな。どんな紹介をされたかしらんが、オヤジと賢木先生はかなり仲良いし。

って、そうじゃなくて！御浜がこの女に気があるって知ってて、それはどうよ！？いくら柚乃がいたって……。

多分、オヤジも柚乃も何も言わないと思うけど……。

オレはどうなる？高校生男子の家に、こんな……可愛い女……。

「今夜だけで良いから、頼むって！」

「……わかったよ」

新島にここまで頼まれちゃ仕方ない（ホントに保護者みたいだな）。それに、ここで頑なに断る方が、なんか変な気を回してるみたいでよくない気がしてきたし。

御浜がずっと笑顔なのが気になるけど。

「それでいいだろ？ティース。大丈夫だって、ここんちの妹は確実に可愛いし、この系統の血が入ってるなら」

「それ、何か関係あるの？……ホントに良いのかな、沢田くん？」

「良いよ、別に。泊まってくただけだろ？どうせ家は人の出入りも激しいし。御浜なんか入り浸りだ」

何でオレって、こういう言い方しかできないんだよ……。

「えー、ちゃんと夜には帰ってるよ」

……うん。御浜も気にしてないみたいだし。てか、コイツは俺が愛里のこと好きなの知ってるしな。そんな心配なんかしないか。

「……じゃ、よろしくお願いします」

彼女はオレに向かって、軽く頭を下げる。

こつ言つとこ、可愛いんだよ。

「別に」

思わず、顔を背けてしまった。

「テツちゃん、冷たいね。そんなんじゃ、モテないよ？いくら顔がよくても」

「てか沢田って、……うんと、硬派、ってヤツなのかな？」

新島、お前、今ものすごく言葉を選んだだろ。

「女の子の扱いを知らない、お子さまってコト？」

「いや、そこまで言ってないし。泉は沢田にメチャクチャ言い過ぎだって。でもまあ、女がいるって話も聞いたことないし、女がいるような感じもしないし。古風って言うか」

「新島、テツちゃんにははつきり言った方がいいって。あの人根暗だから、根に持つよ？あれでしょ？女を知ってんのか知らないのか！」

「……知らない、かな？」

「あー、だよなー」

頭痛い……こいつら。好き勝手言いやがって。

「え？テツは中学のとき彼女いたよ？」

「そうなの？意外！その子とはどうなったの？」

ティアスまで……何こんな話題に食いついて。泊めてやんねーぞ、このやろ。

「んつと……2人だっけ？」

「3人だよ」

「そうそう。みんな3ヶ月くらいしか保たなかったけどね」

何で真も新島も不審そうな目で見るかな？オレに女がいたのが何がおかしいんだよ。

「あー、でもなんか予想できる。下手に見かけが良いから、女の子から告られて、興味本位でつき合ってみたものの、結局どうでも良くなっちゃって、やることだけやってポイ捨てしたあげく、彼女に悪い噂とか流されたりしてそう」

「顔が良いからつき合ってみたけど、超つまんない、とか言われてそうだな。そう言うところ、中坊は酷いからな」

見てきたのか、お前らは！御浜もなんか頷いてるし！

ノーコメントだ！何も言わない、表情すら変えるもんか！

ここでまだ、真や御浜が愛里のことを口にしないのが救いだけど……。

「へー……」

オレを見上げるティラスから、必死に目をそらす。
何がそんなに面白いんだ、この女は。

「良いから、さっさと帰るぞ。それでも家は門限にはうるさいんだ。
さっきだってオヤジから電話があつたし」

なぜだか複雑な表情でオレを見つめる彼女。
でも、つつこむわけにも行かず、オレ達はその場で真と新島に別
れを告げた。

駅から家はそんなに離れていないので、御浜とティラスと3人で
話ながら歩いて家に帰った。

20分くらいの距離だったけど、御浜がいれば、そこまで酷い態
度をせずに彼女と話が出来た。

家についたときには、時計の針はもう12時半をさしていた。
玄関の前で御浜と別れ、彼女を家の中に促す。

この時間なら、オヤジも柚乃も大抵起きてるはずだった。

「……あれ？」

台所の電気が消えていたので、不審に思って、電気をつけてテ
ブルの上を確認する。

……携帯、オヤジから電話があつたはず……。
あれ？メールも入ってる。柚乃からだった。

『今日はパパが急な出張で帰ってこれないそうです。テツちゃんと
連絡つかないって、怒ってたよ？適当に誤魔化しておいたけど。私
も出かけるので、パパにはうまく言つといてね（*ハ―ハ*）』

ちょっと待て！

てことは何か？今夜はこの女と二人きりってコト！？

どうしよう。とりあえず、ティアスには事情を説明するしか……。

そうだ、それで帰って貰おう。余計な誤解を生んでも嫌だし。あ、帰るところはないんだっけ？

「ねえ、誰もいないみたいだけど？」

「えと……悪い、今日、妹もオヤジも出かけてたらしい……。オレも今知った。いや、ホントに、マジで。ほら、メールの履歴、0時になってるし！」

「……そんな必死にならなくても」

わざわざ携帯まで見せてんのに、あつさりしたもんだった。

てか、必死になるっつーの！お前、もしかしてオレを男扱いしてないな？襲われるぞ？

それに、御浜が……。

そうだ！御浜んちに……。

「もう無理よ。御浜の家はお父さんが高齢で、この時間はもう寝てるって言ってたし。うるさくしたら悪いよ。沢田くんさえよければ、この家に泊めて貰っても良い？沢田先生とかいない方が、逆に気を遣われなくてすむし」

「……あんたがよければ、それで良いけど」

うつわー、冷静だな、おい。一人でおたおたしてるオレが、かつこわるいだろ？

「……和室でいい？布団もあるから」

「ありがと。でも、沢田くんのピアノが見たいな？どこにあるの？」

そんな展開になるような気がしてたけど。他に興味がないのか。心配するとかさ。

別に減るもんじゃないので、リビングに彼女をいれ、電気をつけた。

彼女はためらうことなくピアノの前に座った。

「スゴイね、グランドピアノ持ってるんだ」

「母さんのだよ。弾くなよ。もう遅いから。近所迷惑」

「判ってるよ。どうしてそう言う言い方しかできないかなあ？」

「お前だって相当だと思うけど」

「失礼よね。……お母さんは？」

「オレが子供のときに死んだ。音楽の先生だったらしいけど」

「そうなんだ」

彼女はオレを見ることなく、ただ黙ってピアノの前に座ったまま。会話が続かないので、彼女を置いてキッチンに向かった。

案の定、冷蔵庫にはシュウジが作った夕飯が残っていた。今日はレバニラ炒め（ピーマン混入）だった。一応、柚乃のメモが残ってる。

そっぴや、何も食べてなかったな。

「こんな時間にご飯？妹さんが作ってくれてるの？沢田先生？」

いつの間にかリビングからこっちに来ていたティマスが、普通にオレの向かいに座った。（隣に座るかと思っていた）
オレが作ったという発想はないのか？！（作らないけど）

「オヤジも妹も作るけど、これはシユウジが作った」
「誰？」

「親父の後輩で御浜の甥で、お向かいさん」

「????え?.....うーんと、男の人?いくつなの？」

「10年近く女のいない、悲しい32歳だ」

「わざわざご飯作りに来てくれるの？」

「うーん、それもあるだろうけど、趣味もあるかな?テレビ見て料理作るわりに、あいつんちにレトルトの食材とか調味料とかあるの見たことないし。老酒とかテンメンジャンとかフツーにおいてあるんだぞ」

「スゴイね.....」

「.....お前、食いたいの？」

ものすつごく物欲しそうな顔してるんですけど。

「食べたい」

ハラ減ってんなら言えっつーの。

仕方ないので、かろうじて炊飯器に残ってるご飯をよそい、箸と作ってあった海苔と卵のスープを用意してやる。

「すごい、おいしい!」

.....よーけ食うなあ.....。ほとんど二人分残ってたからよかったものの。まあ、うまそうにしてるから良いけど。シユウジにも言っ

といてやろつ。

あんなきついことを言う女だから、どんなかと思ったけど、笑ってれば可愛い。美味しそうに食べてる姿も。

「ごちそうさま」

綺麗に残さず食べてるし。よっぽどハラ減ってたかな？

「沢田くんの笑った顔、初めて見た」

彼女はそう言って、また笑った。
オレ、今笑ってた？

「オレだって、笑うことくらいあるし……」

あー、ホントだ。なんか顔が緩んでる。何でだ？

「笑ってた方がいいよ。なんか、そうしてる方が話しやすそうに見えるし」

普段は話しくそうってコトですか？そうですか。

「笑ってたら、ピアノ……楽しくなると思うよ？残念だな、こんな時間じゃなかったら、沢田くんのピアノが聞きたかった」

「つまんないって言ったくせに」

「だって、君がつまんなそうだったから。楽しそうに弾いたら、変わるよ。私は、沢田くんのピアノ、好きだけだな。だから、つまんなそうなのはもったいないって思っただけ」

「……言葉がたりねえよ、お前」

「それは、お互い様よ」

この女はー！ああ言えばこう言いおってからに！

「コーヒーいれて良い？」

「ああ。コーヒー豆は戸棚だ」

彼女はオレの顔を見ずに席を立ち、人んちだと言うのにコーヒーをいれようとする。わけわかんねえ、この女。

大体、今さっきまた。お前はオレに喧嘩を売っただろうが。

……ホントに、この女は……。

「だーっ！何やってんだ、さっきからおとなしく見てりや！コーヒー一杯までもにいれられねえのか！しかもコーヒーメーカーなのに！漫画かお前は！」

コーヒーメーカーにフィルターペーパーも敷かずに、豆も挽かずにいれやがった。こーいうわけの判らんヤツって、ホントにいるんだな。

「コーヒー、いれたことないの？」

「インスタントなら……」

「良いから貸せって、座ってろ」

コーヒー二人分をテーブルに出し、牛乳もごく丁寧に温め、ピッチャーにいれ、角砂糖も用意する。

うん、何でオレがこんなコトしてるんだ？

「スゴイね、沢田くん……。美味しいよ、これ」

「当たり前だ。インスタントと一緒にするな。てか、お前、ホントに何も出来ないんじゃないの？一人暮らしだろ？今」

「……まあ、何とかしてます。……何でしょうか、その珍しい生き物を見るような眼差しは？」

「別に……」

「ごめんなさい……」

「何、謝ってんの？」

「怒ってたし」

もしかして、それでコーヒーいれて誤魔化そうとか思ってたんだろか。

謝るんなら最初から謝れつつーの。

まあ、オレの言い方も悪かったけど。

「別に。オレ、こういう言い方しかできないんだろ？」

「やっぱり怒ってるし。しかも根に持ってるし……」

彼女の頬に、右手を伸ばす。

髪に触れ、耳の後ろ側を軽く指でなでる。

「持ってないって、別に」

「……顔が怒ってるし」

少しだけ、彼女の顔は赤くなっていた。

自分でも、何で彼女に手を伸ばしたかは判らなかったけど、今さら引っ込めることも出来なかった。

「テツちゃん？まだ起きてるの？……って、何してんの？！女の子連れ込んでる！スゴイ！あり得ない！明日、地震！？」

そう言うオチか……！オヤジじゃないだけマシか。
それでも、彼女の頬から手を離さない自分がいた。

第1話 (the heads) エピローグ

一通り、誤解が生じないように、ティアスのことを柚乃に説明する。

まだ、2時半なのに、帰ってくるの早すぎるって。

キッチンに向かい合わせに座ったまま、ティアスは俯いていた。

「どうしよう。私、友達の家泊まりに行った方がいい？それともシュウジさんとか……」

「お前、人の話聞いてたか？何を勝手に捏造しとるか！」

「だって、このテツちゃんが！女の子を家に連れ込むなんて！すこくない！？」

「いや、そう言うんだったら、絶対家には連れてこないから。こんな人の出入りの激しい家に！」

「え？でも、ホテル行くお金なんかあるの？……ああ、相手の家に

……」

「だから、違うつつの。いい加減にしろつつの！」

「だって、さっきの説明に、その、ものすっごくいい感じに恥ずかしい雰囲気の説明がなかったから」

うん、それはオレが悪かった。

と言うか、つつこまんでくれ。ホントに。

「彼女じゃないの？」

「だから、昨日会ったばかりだって！大体、ティアスだって帰る家あんのに、何で今日に限って帰らんとか言ってたんだよ。オレ、事情聞いてないぞ！」

「……何で私に矛先が向くのよ。また怒ってるし」

「怒ってないっつーの。なんかもう、新島も誤魔化しながら喋ってたし。どういうことだよ。オレ、相当人が良いぞ?!」

「テツちゃん、みつともないから逆切れしないで」

誰のせいだ!

「……テツちゃん、相当恥ずかしかったのね、彼女とのかをからかわれるの。カリカリしてるけど、割と「別に」とか言って冷めた返事をしては、女の子に逆切れされるタイプなのに。彼女、照れちゃってるじゃない」

「お前、何でそんなに発言がおばさんぽいんだ。何様だお前は。それに、ティアスはこんな子供みたいな顔してるけど、オレより年上だぞ」

「え?! そーなの? 中学生くらいかと思った」

それはさすがに失礼だろう。でも、ティアスは柚乃には何も言わなかった。

「今住んでるマンションが、灯路の彼女の持ち物なの。それで、今日は彼女と灯路が会う日だから、私がいたら邪魔でしょ? だから、消えてようと思ったのに、灯路が『そんな気を遣う必要ない』って言うのよ。全然、会えないくせに」

「へえー……新島の彼女の……?」

新島に彼女?

「アイツ、今彼女いるんだ。初耳。4月ごろに女子校の女と別れたっつーのは知ってたけど」

「その彼女、すごくない? だって、自由に一人でそのマンションを使えるってコトでしょ?」

柚乃の言うことにも一理ある。

どこのお嬢様？金持ってるよな。

新島んちは、ふつーのサラリーマン一家だから、そんなもの持つてるわけもないし。それに、新島んちのものだったら、ティアスがそこにいるのがばれるから、違うし。

「今日はそのマンションに二人でいるってコトか。わざわざマンション用意して男と会うつてのも……。どんな女だよそれ、すげえな、マダムか！？それに、全然会えないってのは、忙しいってコト？」
「うん。そうね。今日は来てたけど」

新島のヤツ、隠してんのかな？そう言うタイプじゃないんだけどな。

ティアスに興味がないって言うときに、「彼女いるから」って一言言えばよかったのに。

「年上で、働いてるわね、その人。しかもバリキヤリじゃない？その新島つて人、テツちゃんの同級生でしょ？すごくない？」

「うーん。そうだよな。うちの親父と母さんみたいな感じかな」

「あ、そっか。そうだよな。パパって、高校生のときにママと結婚したんだっけ」

興味本位で話すオレ達を見つめながら、ティアスはただ黙っていた。彼女はどうか、それ以上話すつもりはないらしい。

オレの問いに答えた。それだけなのだろう。

柚乃もさすがにそれを察したらしい。

「私、お風呂入ってから出かけたからさ、もう寝るね。ティアスさん、気にせずシャワー使ってくれて良いから」

ステージ用のきつい化粧のままのティアスを見て、由乃はそう言った。

「ティアスで良いよ。ありがとう」

「テツちゃんのお客さんだから、あと頼むね。ついでに客間で一緒に寝たら？」

「うるせえ、早く寝ろ。おっさんかお前は！」

柚乃はオレの台詞を笑い飛ばすと、キッチンを出ていった。

「悪い、ティアス。ちよつとコーヒー飲んどろ」

そう言つて、彼女をキッチンに残してオレは柚乃を追いかける。二階にある彼女の部屋に入ろうとしてるところを、捕まえる。

「柚乃！ちよつと待て！話が……」

「何よもう。邪魔しないから」

「そうじゃないつて、ティアスとオレが二人でいたこと、御浜には言っなよ？」

「何で？何で御浜さんなの？」

「だって、お前だつて変だと思つたろ？御浜があんなに一人の女に執着するなんて。ティアスがいるから言わなかったけど、アイツ、あの女を見たときに『好きになったかも』なんて言つてたし。だから……何もないつて思つても、気にするだろ？」

「……御浜さん、ティアスのこと好きなんだ。そうよね、すつごく可愛いし」

「うん、まあ、可愛いところあるけど。……お前は怖いぞ」

もしかして、とは思ってたけど……。てか、ほぼ確信してたけど、
柚乃って……。

「テツちゃん、頑張つてね。私もいたことにしといてあげるから、
何があっても今なら誤魔化せる」

悪魔的契約？

御浜とティアスを引き離したいだけじゃん、それって。

「あのなあ、オレは……」

「冗談よ。でも、ホントにいい感じに見えたけど？愛里さんより、
よっぽどいい人だと思うけどね。あの人は、パパの追っかけだし。
私は……」

そう言つて、柚乃は黙った。そして、小さく「ごめん」と言つて、
部屋に逃げ帰った。

柚乃が愛里のことをあまり好きじゃないのは知ってる。でも、オ
レがあんまりあの女に執着してるから、気を遣ってるのも知ってる。
だから、オレと柚乃はそこら辺の兄弟よりよっぽど仲がいいのに、
そのことに関しては腫れ物を扱うようにする。

そのたびに、オレだつて申し訳なくて仕方がない。何度もこの思
いを捨てようと思った。

だけど、それが出来ない弱い自分がいる。

それは何だか、ピアノの前で弾けずに苦しんでる自分と同じだつ
た。

くだらない。女一人のことで、こんな風に考え込む自分なんか。

それより、さっさとキッチンに戻って、ティアスに部屋を用意してやらないと。

「ティアス、部屋を……」

F o r e s t a n d m e a d o w a r e s t i l l .
e a c e f a l l s o n v a l l e y a n d h i l l .

食器を洗いながら彼女が口ずさんでいたのは、モーツアルトの子守歌だった。(しかも何故か日本語でもドイツ語でもなく英語!) ついさつき、ステージ上でバンドをバックに、あんなに力強く歌っていたとは思えないくらい、優しく、そして子守歌にしては甘い歌声だった。

「あ、ごめん、何だった?」

「いや、何でもない。食器、洗ってくれてたんだな」

「うん。これくらいなら出来るから」

「英語で歌うんだ、子守歌」

「あ、ごめんね、夜中なのに」

「良いよ、今くらいの声なら。それより、続き、歌って」

彼女は心底驚いたような顔をした。

「聞きたい」

彼女が照れたように微笑む。それに答えるかのように、オレも笑った。

明日、弾いてみようかな、この曲を。

第2話 (the heads) 前編

01

朝7:00。何故か「月光」で起こされた。

何でオレ、リビングのソファにもたれて寝てたんだ？

ピアノを弾いていたのはティ阿斯。オレを起こしに来たのは柚乃だった。

「テツちゃん、今日は走んないの？大体、いつ寝たのよ、こんな所で。真冬なのよ？風邪ひくわよ？」

布団になるものが何もなかったからか、オレはティアスの着ていたコートにくるまっていた。

昨夜、結局ティ阿斯とオレはずっと話をしていた。

一応客間も用意したし、風呂にも入った。だけど、リビングに戻って、ピアノの前で話をしていたら、いつの間にかここで寝てた。清々しいほど、やましいことは何もない。

そして、オレはすっかり寝てしまったというのに、俺と一緒に話していたはずのティ阿斯は、朝からピアノを弾く程度には元気だった。

「いや、もう、走ってる時間とかないし。……眠いし。今日休もうかな」

「私は止めないけど、パパは今日、帰ってくるわよ？」

「……顔、洗ってくる」

「朝食の準備、手伝うよ」

ティマスは柚乃のあとについてキッチンに向かう。何でそんなにタフなんだ。

なんか、すっげーくだらないこと話してた気がする。いつ寝たのかも覚えてないし。

『良いよ、今くらいの声なら。それより、続き、歌って。聞きたい』

あの時から、オレは確実におかしくなってる。
何であんなこと言ったんだか。

顔を洗って、制服に着替えてから、リビングに戻る。
そう言えば、最近朝は練習曲ばかり弾いてた気がする。

彼女が昨夜歌った、モーツァルトの子守歌の楽譜を探す。たしか昔、弾いたことがある。

彼女の歌を思い出しながら、指を動かす。

「朝から子守歌で寝かしつけてどうすんのよ？ご飯出来たよ？」

リビングまで呼びに来てくれた柚乃の後ろで、ティマスが微笑んでいた。

彼女の微笑みが、少しだけ照れくさい。

「なんか、すごく優しい。沢田くんのピアノ」

「つまんなかった？」

「ううん。すごく良かったよ。私はああいう、感情的なのが好きな。すごく丁寧だし」

優しい？感情的？丁寧？

ホントは、今のオレは、指が動いただけでも驚いていたのに。

「ティマス、今日はどうするの？家に戻るの？」

「ううん。芸大に行つて、賢木先生の所に顔出して、受験の話しようと思つて」

「受験？」

箸と茶碗を持ったまま、オレの顔を見る柚乃。

「そっぴや、そんな話、オレもすっかり忘れてたし。」

「試験を受けるとかつて新島から聞いたけど。学校とか行つてんの？」

「ううん。でも、高卒認定は持つてるから。来年の入試を普通に受けるよ。推薦枠があるつて、賢木先生は言つてくれたけど、あの大学、ただでさえ人数少ないし」

「そだな。声楽なんか、たぶん5人くらいしか入れないはずだしな」

昨日、芸大に行つて、ちよつと考えが変わつたつて感じたな。

「受験しないかもしれないし。なんか、大学に入らなくても良いかなつて思つて」

「なんで？てか、お前、何しに日本に来たの？兄ちゃんがベルギーで探してんだろ？」

「あ、それはね……」

呼び鈴が鳴る。多分、御浜だ。

たまにこつして呼びに来るけど、今日は絶対来ると思つてた。

「オレ、出るわ」

もう食べ終わつていたので、片づけを任せて玄関に向かう。

やましいことは何もないけど、心苦しかったので、というのもある……。

「ティアスとちゃんと仲良くしてた？」

「お前はお母さんか！別に、フツーだよ、フツー。柚乃とキッチンで飯食ってるよ」

フツーフツーと言いながら、必死にフツーに取り繕う自分は、もういっぱいいっぱいだ。

「今朝、ピアノ弾いてたね」

「……月光は、ティアスだよ？」

「でも、子守歌はテツだろ？珍しいね、朝、練習曲じゃないのを弾くのって」

「たまたま楽譜があつたからだよ」

ティアスの顔を見に来たであろう彼を、彼女の元へ案内する。

「今日、鉄城さんは？」

「出張だつて。……柚乃はいたぞ」

「別に何も言つてないのに……」

……なんか、墓穴を掘つた気がするな。

余計なこと言わんどこ。でも、誤解されても嫌だしな。

「急な出張だったんだね。いつもは前日かその前には判るのに」

「そつえば、そつだな。まあ、親父が何してるか、俺もよく判つてないし」

そう言えば、御浜が家に来る時つて、大抵親父がいないときだな。

まあ、フツは家に親とかがいたら気い使っちゃうから、嫌かもしれないけど。ティアスも、親父がいない方が気を遣わなくて良いって言ってたし。なんか親とかにいちいち説明すんの、めんどくさいし。御浜って、そう言うタイプじゃないけどね。

「ティアス、今日は何か用事がある？」

キッチンにつくなり、朝食をとるティアスに声を掛ける。ほとんど変わらない、柚乃の微妙な表情の変化に、オレは背筋が凍る思いだ。うちの妹は本気で、怖い。

「あ、ごめん。御浜のメール、今朝見たばっかなんだ。今日は大学に行くつもりだから……」

「あ、いいよ。そんなの気にしないで。また、連絡する。昨日みたいなことあったらまた呼んでよ」

「うん。ありがとう」

御浜のためには、こいつらを二人にしてやった方がいいのか？

「テツ、今日はバス？バスなら、そこまで一緒に……」

「……いや、今日は愛里の試験が近くてレッスンないから、原付で行く。バスだと時間かかるし」

朝の通学時間ですら、巡回バスしかないんだぞ？一時間に二本だぞ？私立みたいにスクールバスくらい出せっての。

「そつか。じゃあ、ティアスにはバスの路線はオレが教えるよ。新島ちゃんと連絡付かないんだろ？」

「ありがと。今まで移動は灯路に頼りっぱなしだったから、どうやって移動して良いかわかんなかったんだ。助かるよ」

こいつら二人を見てる方が、よっぽど恥ずかしいっつーの。
なんというか、不愉快だな。

人の幸せって、妬ましいっつーか……。

「じゃ、バスの時間あるから、オレ行くね。ティアスも、バス停まで案内するよ」

そう言つて、二人は慌ただしく出ていった。

「テツちゃん……気を遣つたんでしょ？あの二人につて言うか、御浜さんに」

「何を？」

「一緒にバス停まで行けばいいじゃない。芸大なら、テツちゃんの学校の方向じゃない。何も、二人で一緒に行かなくても」

「いや、でも、ティアスだって、こっちに来たのが先週だつて言つてたから、御浜が案内してやんのは別に良いんでない？」

「それが余計な気遣いだつて言うのよ」

「なるようにしかなんないって」

「うわー、テツちゃんのくせに、なんかヨユーの発言。知つたかぶつた発言。嫌な感じ。そんな、なるようにしかなんないような経験ないくせに」

何その、妹のくせに、人をバカにしたような発言は。

しかし、御浜がいなくなった途端、嫉妬に狂いまくってるな。

「お前、ティアスのこと嫌いなのか？」

「全然？嫌いじゃないわよ？借りてきた猫みたいで」

嫌味たっぷりじゃねえか、お前は。

「ねえ、何で、ティマス？」
「何が？」

柚乃の質問の意図がよく判らなかった。

02

御浜の登校時間とずらしてさっさと学校に行くつもりが、結局遅刻する羽目になってしまった。

学校からほど近い公園の駐輪場に原付を隠し、そこから歩いて登校。とつくに始業ベルは鳴っていた。

まあ良いか、なんて思いつつ、メールの着信を確認。

「昨夜はお世話になりました。ありがとう（*^|^*）」

ティマスからのメールだった。

えっと……昨夜、教えたんだっけ？

なんか、すっげえもり上がったのも覚えてる。オレは始終笑ったり怒ったりしてた。

でも、彼女のこの行為に抵抗はなかった。特に驚くことでもないし。

「新島にツケとくから気にするな。バス乗れた？」

「今バス停で待ってます。本数少ないよ」

「乗るバス、間違えんなよ？」

「……テツちゃん。何にやにやしなからメールしてんの、気持ち悪い……」

「どわっ！？真！！何でお前？いつの間に？」

遅刻してるというのに、（してるからこそ）堂々と裏にある非常口から教室に入ろうとしていたら、隣に真がいた。コイツもどうやら遅刻らしい。

「……お前、遅刻だろ？」

「まあ良いじゃない。どうせ明後日には冬休みだし。今日も来るか迷ったくらいで」

「どうゆう理屈だ。だいたい、バス通じゃねえのかよ？お前」

始業ベルにちょうど間に合う時間のバスは2本しかない。この時間に遅刻してくるヤツは、家が近い自転車通学の連中だが、真もオレも路線は違えどバス通だった。

「寝坊したから紗良に送ってもらったんだよ。天気予報で雨降るとか言ってたし。もうすぐ1限目始まるよ？扉の前にいると邪魔」

「悪かったよ……」

「何、いやに素直。気持ち悪い」

「どうすりゃ良いんだよ、オレは！」

メール打つのに必死になって、扉の前で立ちつくしてたから、悪いと思って謝っただけじゃん！なんだよもう。

ホームルームの終わりを見計らって、1限目の先生が来る前にこっそり教室に入る。

「なんだよ。泉も沢田も今ごろ来たのかよ、めずらし。バス遅れて

た？」

席に着いた途端、後ろを向いて話しかけてきたのは相原だった。

「いや、今日はバスじゃないから」

「ふうん。じゃあ、今日はあの美人のピアノの先生とは会わないの？顔見に行こうと思ってたのに」

「お前な、何しに来るんだよ。毎回毎回」

「目の保養だつて。佐藤さん、気の強いところがあれだけど、タイプだなー」

美人見たらすぐそれ言うじゃねえか。どうというのがタイプ何だか……。

「相原、今日は新島どうしたよ？いないの？」

真が相原の隣の席を指さした。

「なんか、病欠つて親から連絡あつたらしいよ。風邪でもひいたんじゃないね？」

「いや、違うと思うな……。確実に女といるぞ、アイツ。泊まりだし。」

しかし、親から連絡つて。親もグル？！

「ティアちゃんに引つ張り回されてんじゃないの？アイツ、保護者じゃん」

「いや、違うつて。ティアスは今朝、一人で芸大に行ったし。御浜が朝来てバスの路線教えてた」

「あ、そーなの？怪しいねー、新島のヤツ」

どうやら、真も同じコトを考えたらしい。

「何？誰、ティアスって。新島の女？」

「いや、違う。新島の従姉妹だよ」

「でもあの二人、怪しくない？ティアちゃんて、超可愛いし」
「違うってさ」

ここで新島に彼女がいることを言っているいいものか、一瞬ためらった。

普段なら気にすることもない会話なんだけど、今回の新島の態度は何か違っていたし、何よりティアスがすごく気を遣っていたから。

「てか、何でその超可愛い女の動向を沢田が知ってるの？」

相原め……顔が良いって聞いたなら、何にでも食いつくな。

「関係ないつつの、前向けって」

先生が教室に入り、号令をかける。1限目はオレの苦手な英語だった。予習も何もしてない。

愛里が、後々のことを考えたら、英語は力を入れておいた方がいいって言ってたけど、どうも身が入らない。

受験でも必須だし、仮に音大に入ることになったら……。

なんか、何も考えたくねえな。

今日、愛里に会わないですむのはよいかもしれない。

彼女のことを考えれば考えただけ、気持ちが悪くなってくる。

指も、重くなる……。

なんで、オレはピアノを弾けたり弾けなかったりするんだろう。

一人で弾いてると？

愛里のレッスンや、御浜やティアスの前では弾けたんだ。

誰かがいれば弾けるってのか？そんなおかしな話あるのか。それって、自己顕示欲が強すぎて、みつともなくないか？要するに、人が見てるから、努力しますよってコトか？自分……。

『すごく良かったよ。私はああいう、感情的なのが好きだな。すごく丁寧だし』

つまらなさそうに弾いてるって言われたり、丁寧だって言われたり……。どっちなんだよ。

でも、昨日はピアノを弾きたかったんだ。彼女の歌のようなのを。

オレは彼女を羨ましがっているのか？

オレは彼女をねたんだいるのか？

どうしてなのか。この羨望と嫉妬に似た感情は何なのか、オレには判らない。

それでも、昨日一晩彼女と話して、判ったことはある。

オレは彼女を嫌いじゃないし、どちらかというに興味を持ってる。

それは、御浜が興味を持った女だから、というのももちろんあるし、何より彼女の歌と、その姿勢に惹かれた。

オレにはない、彼女の強い意志と力。

歌を聴いたあとで、彼女の話聞いた。だからこそ、その力を感じた。

御浜はもしかしたら、オレが一晩話して（ぼんやりとだけど）やっと気付いた彼女の姿に、一目で気付いていたのかもしれない。そして、彼のことだから、それ以上に彼女の何かを感じ取っているのかもしれない。

でも、御浜って、ホントにティアスの何がいいんだろうな。あんなに熱心に口説いちゃって。あの勢いだと、親父がいないって判ってたなら、うちに一緒に泊まってただろうし…。

御浜があんなに興味を持つような女か……。ホントは彼女って、どんな女なのかな？オレが知ってるのなんて、きっとほんの一部分に過ぎないんだろうな。

ちょっと気が強くて、でも怒られるとすぐ弱くなる。

言葉が足らなくて誤解を生みやすくて、でも悪いと思ったら謝れる。

あと、不器用だ。一人で暮らしていけなさそうだもん。オレがしてやらないとダメだったし。なんか新島が保護者みたいになってるのも判る気がする。ちょっと危なっかしいところあるし。

確かに、最初の印象は悪かったし、愛里はティアスが嫌いだけど、オレは嫌いじゃない。

少なくとも、あの女の歌は、スキかもしれない。

「さーわーだー？なあ泉、この人なんかおかしいよ？顔にやけてるし。オレ、沢田って古風でお堅い硬派な男のイメージがあっただけど

な。今どき珍しい、天然記念物みたいな」

「いや、意外と影でやるこたやつてたらしいよ？オレ、テツちゃんに中学の時とは言え彼女が2人もいたことにショックを受けたね」

「マジで！？この年寄りみたく枯れた男に人並みの性欲が！？……

あ、でもどーせ、顔目当てでよってこられたはいいいけど、すぐに飽きられて振られたりするパターン？その場しのぎは得意そうだけど」

「それ、昨日オレも言った」

「やつぱねー。……って、ホントに沢田おかしくない？」

「テツちゃん！授業終わったよーん。ノートは？」

なんか好き勝手言われてなかったか？オレ。真がオレの頬を引っ張る痛みで気が付いた。

「いてえよ！ノートがなんだって？」

「いや、オレ途中で寝ちつたから。相原も寝てるし。なんか、期末に出るとか言ってたのしか覚えてなくて、とってないかなーって思っただけど……」

真が人の手元をじつと見つめながら、ため息を付く。ノートなんか取ってねえつうの。

「何これ、怖！沢田寝ぼけてた？何このノートにある無数の点は！」

相原に言われ、初めて気付いたが、シャーペンの先で、ノートを何度も弾いたような痕が残っていた。

「いや、なんか考えごとしてたからさ。授業とか全然覚えてないし。てか、オレもう英語捨ててるし」

「威張って言うことか。もーいいや、誰かノートとってねえかな？聞いてくるわ」

……あ、オレも焦んないといけないんだった。

ホントに、何もかもどうでも良いな。どうでも良いってのはヤバイか。ただでさえ英語苦手なのに。

オレの気分を察したかのように、空はどんどん曇ってくる。原付で来たのに、勘弁してくれ。

「やつべ、今日は雨じゃなくて雪だって！雨だと思ったから送ってもらったのにな」

携帯で天気を確認しているらしい真は、画面と空を交互に見上げた。

「いいじゃんよ、オレなんか原付だぞ？……あ、降ってきた」

小粒の雨だったが、みぞれが所々混じっていた。道理で寒いはずだ。

「道が凍ったら危ないだろうが」

「ああ、南さんがね……」

その気遣いを他のヤツにもしてくれっての。メールを打ってただ、相手はきつと南さんだな。他に彼女いるくせに。

ついでに自分の携帯を確認したら、メールが入ってた。ティアスだった。

『どうしよう、迷っちゃった！（＜|＞）大学に着かないよー。周りに畑しかない……』

「はあ？！」

突然立ち上がったオレに、びっくりした真。目をむいてた。
オレは真と画面と空模様を交互に眺めた。

あの女は、ホントに一人じゃ何も出来ねえっつか、お騒がせっ
つか……。

「早退する。あと頼むわ」

「テツちゃん、なんか昨日から変だね。……御浜がさあ」

真が何か言いたそうだったが、オレはコートとバッグを抱え、こ
っそり教室をあとにした。

03

原付をのメットインの中に学ランだけ押し込んで、コートを着た
あと、一瞬我に返った。

オレ、どうするつもりなんだ？

大体、『迷っちゃった』だけで、オレに助けを求めたわけじゃな
いし、もしかしたら御浜や新島にもメールしてるかもしれないし。
なんか、勢いだけで出て来ちゃったし、何で自分がこんなコトし
てんのかよく判ないけど……。

昨日の新島とティアスの様子を見るからに、こう言うときに御浜
に連絡するとは考えにくいんだよね……。仲はよいけど、頼ってな

いって言うか。ちょっとまだ、一線引いてるところがあるって言うか。それにしたって、オレの所にこんなメールを……。

とりあえず、新島に電話してみよう。連絡もらってるかもしれないし。

……………。

電源切ってやがんのか、あの男！相手はどんな女だ！言って見ろ！

しかたない。なんかものすつごく気が進まないけど、御浜にメールだ。

『あの後、ティアスからなんか連絡あった？』

たかが一文打つのに、こんなに気を遣ったことはないっつーくらい、気合いを入れたぞ。なんて当たり障りのない、完璧なメール。

『バス停で別れたきりだけど？どうかした？』

『何でもない。うまく引っかけたのかと思って』

よし、やっぱり完璧だ。妙な誤解も生まないし（多分）。さりげないぞ。

……って、何で御浜に連絡すんのにこんなに気を遣ってたんだ、オレは。何も無いんだから堂々としてりゃ良いんだけど、変な誤解を生んでもやだなあとは思うわけで……。

友達の彼女って、結構めんどくさいもんなわけね。

まあ、まだ彼女ってわけじゃないけど。

それにしても、予想通りというか……彼女は御浜には連絡してな

かったか。多分、新島にはしただろうけど。（でも気を遣ってしなかったかも）

オレよりは、御浜の方が助けてくれる気がするけど、何でだ？

雨が強くなってきた。霰が顔に当たって痛い。コートの上から合羽を着込んで（意外と暖かくて良いんだ、これが）木陰に避難する。

「ティアス？お前、何してんだよ？どこにいるんだ？」

『ご……ごめん……。なんか、迷っちゃって、どこにいるか判んないの』

いきなり怒鳴ったからか、ちよつと声が小さくなっていた。子供かお前は。

「周りに何がある？畑だけ？道は？大通りある？」

『えっと、民家と……。遠くの木の下に、大きな運送会社の看板が見える。トラックがたくさん走ってるけど、そんなに大きな道じゃない。工事してるみたい』

「バス停はどこで降りたんだよ？」

バス停と、彼女の見た景色で大体の場所は判った。確かに何も目印のないところだから、初めて歩いたら迷うかもしれないけど……そもそも何でバスを間違えるかな？天然ぼけか？

ホントに、誰かいないと生きてけないのに、無茶ばっかしやがって。

「どつか雨宿りできる所ある？雨が強くなってきたから」

『あるけど……。どうしたらいいの？私。道を教えて？場所判ったんでしょ？』

「うん、でも、お前、絶対また迷うから」

『あ、酷い……』

ちよつとむつとした声になった。なぜだか、彼女の表情が手に取るように判る。

昨夜話していて判ったけど、本当によく表情が変わる女だった。

「迎えに行つてやるから、待つてろ。近付いたら連絡する」

『え！？』

彼女が驚くのを無視して、オレは電話を切った。

雨と霽の中、原付を走らせた。

あの女は仕方がねえなあ、なんて思いながら。

ティアスは思ったより早く見つかった。彼女は随分歩いたらしく、かなり町中から離れた（といっても、芸大方面行きのバス自体が町中から離れたところも通るけど）所に来ていたので、他に何もなく人がいそうな所が限られていたからだ。

彼女の目の前にオレが立ったときには、雨はやんでいた。

でも、空気はますます冷たくなっていた。

「世話かけませんな！」

「沢田くん！ホントに来てくれたの？……あの、あり……」

「大体だな、お前一人じゃ何も出来ねえんだし、土地勘ないんだから、何で言われたとおりにしないんだよ。どうせ乗り換えのときにバスを間違えて、大学方面にいくヤツに乗ったつもりが、全然関係ないルートのヤツに乗ったんだろ？それか、うっかり乗り過ごして芸大通りで降りるつもりが、前熊あたりで降りたとかだろ。で、芸大に向かつてたつもりが、逆方向に歩つてたつてとこだな、この位置からすると。漫画かお前は！」

「不愉快だけど的確に人のミスを付いてくるわね……。せつかくお

礼言おうとしてんのに、そんなに文句言わなくなっただっていいじゃない！」

顔を真っ赤にして怒るティマス。そんなに怒んなくても良いじゃん。

「一応、怒ることは怒っておかないと。良いから後ろに乗れ、雨がやんでるうちに移動するぞ」

「え？」

「迎えにきてやったんだから、当たり前だろうが。大学までならすぐだから」

彼女がオレの後ろに座ったとき、愛里のことが頭をよぎった。多分、オレがこの女と一緒にいたら、彼女は怒る。嫉妬なんかしてはくれないけど、オレは彼女の所有物の一つだ。できれば、鉢合わせはしたくない。

「あの……ホントにありがとう、沢田くん。ごめんね、来てくれたのに文句言っちゃって。授業中でしょ？今……」

「いいよ。どうせ、勉強する気なんかなかったし。明日は終業式だってのに、授業なんかする方がおかしいだろ」

「そうかしら？」

なんでだ？この女が『ありがとう』なんて言った別に、ちょっと動揺してるぞ、自分。

彼女の手が、オレの腰に回る。そっと力を込めたのが伝わってくる。

彼女の手からまわりついてくる何かを振り払うように、エンジンを掛け、走り出した。

「さつきまで、学校で何の授業してたの？」

「英語。まあ、元々苦手だし、良いって」

風の音と、カブのエンジン音に負けないように、声を張り上げて会話をする。

雨のやんだ田舎道は、他に人もいなくてのどかなもんだった。

なんか、こういうシーン、映画で見たことあるな……。

港町だったか、のどかな風景の中を、初々しい高校生カップルが、こつやって原付2ケツで走ってんだよな。最終的には悲恋なわけだけど、幸せな風景として。

まあ、それはないか。カップルでもないし、おしゃれスクーターでもないし。別に幸せな風景でも何でもない。

「良くないよ。私、英語なら得意だから。一応喋れるし」

「あー、そういや、向こうに住んでたっけ？でも、ベルギーって、英語？」

「ううん。場所によって違うけど……オランダ語かフランス語かな。私がいたところはオランダ語だったけど。でも、その前は英語圏の国にいたから、日本の高校英語くらいなら教えられるよ？」

そ、それはなんか……魅力的な話？

いやいや、試験勉強で良いんだから、別にそんなに真面目にやる必要はないって。ちょっと出そうなところだけ、やっときゃ良いんだし……。

「忙しそうにしてるけど、お前にそんな時間あるわけ？オレが勉強するのって、練習したあとだよ？」

「じゃあ、その時間で良いじゃない。今日のお礼に教える。何かさ

せてよ」

「良いよ、それであんたの気が済むんならね」

って、何オツケーしちゃってるかな、オレは。

それに、何でこの女も、オレに教えることをそんなに喜んでるわけ？

……まあ、いいか。別にやって損があるもんでもないし。

「ついたぞ」

話してるうちに、いつの間にか大学の中を走っていた。音楽学部棟の前で彼女を降ろす。

「ありがと。帰りは大丈夫だから……。また、連絡するね」

棟の中に入っていく彼女を見送る。思わず頷いちゃったけど……これで良いのか？

「まあ、いつか……」

オレ自身を納得させるために、そう呟いてみた。

空から雪がちらついてきた。天気予報通りだ。

ここに来るまで、雨に降られないで良かった。ホントにそう思った。

とりあえず、誰か知り合いに見つかる前に帰るかな……。なんか、妙に人がいないのが気になるけど。

「沢田くん……」

「何やってんだよ？ ついさっき入ってたばっかじゃねえか。賢木

先生は？」

「もー、あの人信じられない！昨日電話したときは、明日学校にこいって言ったくせに、教員室にも研究室にもいない上に、休みだつて言われたの！しかも、大学も今日から冬休みだつて！」

……うーん……。相変わらず適当だな、あのおっさんは。

それにしても、今日から休みだったのか。それで、愛里のヤツ、他の場所に行ったのかな？

「ティアス、とりあえず、戻る？ここにいても仕方ないし。学生がいないのに、部外者がいるのもな」

「戻るつて、どこに？学校？」

「いや……今さら戻つてもな。早退つて言つて来ちゃったし。せつかくだし、どこか出かける？こつちの方、あんまり知らないんだろ？」

「うん。灯路んちの実家つて子供のころに来て以来だから。でも大丈夫？まだ学校の時間なのに。私は一緒に行きたいけど」

「……いいつて。どうせうちの学校だつて、週末には休みに入るんだから。一日二日早くたつて大丈夫だつて」

「そつ言つ問題？いいけどね」

ん？これつて、オレがティアスを誘つたつてコトにならない？でも、ティアスも行きたいつて言つたし。

04

彼女を後ろに乗せ、いったん家に戻る。さすがに制服のままふらふらするわけにはいかないので、着替えるためだ。

二人で家を出るとき、ちょうど雪がちらつきはじめた。

一緒にバス停まで歩き、二人で並んでバスに乗る。会話は今まで
のことを思うと少なかったけど、彼女が隣にいるのはなぜだか心地
よかった。

地下鉄に乗って栄まで出て、オレも上ったことのないテレビ塔に
行った。二人でご飯を食べたあと、雪の降る町を歩いていたらいつ
の間にか暗くなってきた。

平日だったのではほとんど客のいない観覧車に乗った。向かい合わ
せではなく、隣同士で。

……完全にデートじゃん、これ……！

いや、観覧車の個室で、隣同士に座りながら後悔してる場合じゃ
ないけど。

でも、御浜になんて言うかな……。こんなコトになってることを。

流れに任せてたらこうなっていました、とか。

誘ってみたらついてきたのでなし崩し的に、とか。

自分でもよく判らないままこの状況に、とか。

うん。我ながらわけが判らん。てか、そんな理由でどこの誰が納
得する？

大体、何でオレはこの女を連れて歩いてんだ。

何で……一緒にいようと思ったんだ？

愛里のこと……は？オレ、忘れてないし、こんなにも心の奥底に
引っかかってる。

彼女の顔を、こんなにも簡単に思い描ける。

残念ながら、どうしようもないくらい、自分でもバカだと思っけれど、彼女が好きだ。あの、酷い女を。

じゃあ、ティアスは？

「なんか、デートみたいだね」

……言わないようにしてたのに。あっさり口に出すか、この女は。

「よかる？オレとデートできるの」

「自信過剰よね」。顔が良いからって、うぬぼれてんじゃないわよ」

笑いながらばっさり切るな。

もしかしたらこの状況を気にしてるのはオレだけか？

御浜の存在、引っかかったままの愛里、そしてティアス自身の思い。

どれもこれも、オレが思っているだけのことだ。もしかしたらそれぞれの人たちは、そんなことすら気にしてないのかもしれない。

御浜は、別にオレがティアスとどこに行こうが気にしないかもしれない。オレがどうかではなく、ティアスが彼に答えてくれることの方が大事なはずだし。……多分。

愛里はオレのことなんか、親父に近付くためのダシと、自分が育てた生徒って言う程度の感情しかない。だから、彼女はオレに対してどこまでも残酷だ。それすらも彼女は何も気にせず行っているかもしれないのに、振り回されるのはオレの心のせいなのだ。

ティアスは……。

「なに？何かおかしい？私」

ティアスが少しだけ顔を赤らめる。オレは彼女の言葉を気にせず、ただまじまじと彼女を見つめた。

何でこんなコトになってんだ？オレとティアスって、一体何？
だって、この女とはつい一昨日会ったばかりで、昨日はうちに泊めて話し込んで、今朝は彼女を迎えに飛び出して……。

……わからん！

てか、考えたくもない！

「あ、ついたみたいだよ」

ビルの3階にある乗降場についた途端、彼女は焦って立ち上がる。

「……沢田くん、出ないと」

オレのコートの袖を軽く引っ張った。

それに引きずられるように、ゴンドラから降りた。少しだけバランスを崩して、彼女に一步近付く。

「沢田くん？」

オレとティアスって、一体何？

オレは一体何に引っかかってる？御浜？愛里？ティアス？……それとも、オレ自身？

「沢田くん、ここだと邪魔になるから、行くよ？」

近付いたままのオレを意識することなく、彼女はオレの背中に手をまわし、ぽん、と軽く叩いた。

彼女は、誰に対してもこうなんじゃないのか？

ビルとの間に設けられたステップを渡る彼女を追いかけて、肩を抱いた。

肩から、彼女の腰に掛けて、ゆっくりとなでる。

「さ……沢田くん！？」

彼女の動揺を見て、オレの心は少しだけ満たされる。

つい昨日の出来事と同じだ。

彼女の動揺を、彼女の心が僅かでもオレに傾くことを、オレは悦んでる。

僅かだけれど、心が満たされる。

その、満たしてくれる何かが、昨日よりも大きくなっている。それだけ。

それはオレにとって何も脅威ではない。

オレは何をこんなに不安に思っているんだろう。

考えることがありすぎて、もう何もかもを捨てたくなる。

ただ彼女の動揺が、オレを満たしている。

オレを襲う脅威を、不安を、薄めてくれることはないけれど。

正体が、判らないからか？

「連絡、あった？新島から」

彼女の右手を、彼女の背中越しに右手で掴む。手を絡ませる。

「え？だけど……」

こんなコトされたら、動揺して当然だ。

そう言う意味で、彼女のこの反応は予想通りだし、期待通りだ。それがオレの心を僅かだけれど満たす。

この心は、残酷なんだろうか？オレはどうして満たされるのか？

「邪魔されるのは、いやかな。いやじゃない？」

「……いやだ」

彼女と右手を絡めたまま、オレの左手は、コートのポケットの中にある携帯へと伸びていた。彼女に気付かれないように、手探りで電源を落とす。

まるで彼女の言葉に導かれるように。

「そう、良かった。一緒だね、私と」

邪魔されたくない。一緒にいたい。その思いがオレにも彼女にもあると。

「沢田くんちって、門限あるの？今夜、沢田先生帰ってくるんでしょ？」

「うーん……連絡すればうるさくは言わないけど……柚乃にはうるさいかな、さすがに。なんで？」

「何時まで一緒にいられるのかなって思ってた」

そう言いながら、彼女はオレが絡ませた手はずした。

「終電までだろ？でも、地下鉄の終電だぞ？その時間はもうバスないし。お前が帰れるのか？どこら辺なんだよ、住んでるマンション

って」

「ん？言ってなかったっけ？星ヶ丘だよ。終電の止まる駅だって」

一歩ずつ、オレから距離をとりながら、言葉でオレとの距離を縮めてくる。

オレとティアスって、一体何？

「じゃあ、遅くなったらお前んちに押し掛けよっかな？」

「明るい時間ならね」

彼女の顔に、動揺はなかった。笑顔のまま、オレとの距離は保ったまま。

「おなか空いたね、何食べる？なんか辛いもの食べたいな」

方向を変え、一人でエスカレーターへ向かう。
その後ろ姿を、オレは黙って追いかけた。

ティアスにとって、オレって一体何？

第2話 (the heads) 後編

05

結局、終電で帰り、オレは歩いて家へと向かった。

雪は積もることなく、降ってはやみ、降ってはやみを繰り返していた。

携帯の電源を切っていたことを思い出し、ポケットから取り出す電源をいれた途端、メールが何件も入ってきた。

留守電も入っていた。

大きくため息をつく。吐いた息は白く、空気にとけていく。
意を決して、まず留守電から……。

『ちーっす。新島です。ティアスから今朝Te11あったんだけど、その後連絡とれません。何か知ってたら連絡ください。てか、すみません、ホント。迷惑掛けてます』

……留守電でこれって言うことは……メールもこれ関係ってコトか？

思わず、道ばたで座り込んでしまった。

『新島からテツちゃんともティアちゃんとも連絡とれないって連絡来てるよ。どこ消えた？』

『真から早退したって聞いたけど、具合悪い？』

か……帰りたくねー。

でも、今日は親父も家にいるはずだし、御浜が家に来る可能性は

……。てか、親父がいても、なんか余計なこと聞かれそうだな。
どうすつかな。

……しょうがない。借りを返してもらっかな、早速。

息子も家を出ていたせいか、深夜に一緒に帰ってきたオレを、新島の両親は快く受け入れてくれた。

新島んちって初めて来たけど、……こう言っちゃなんだが、ホントにフツーの家だ。築10年って所だな。この辺じゃ何も珍しくない、猫の額程度のお庭がついてるマイホーム。

ますますティアスの住んでるマンションっつーのが怪しいな。どこでそんな女と……。

「こんな遅くに突然押し掛けても、何も言わないんだな、お前んとこの親」

「いや、今日はたまたまだ。ちゃんと連絡いれてたし、そのついでにお前を連れてきたことになってるし。いつもうるせえよ？昨日もいなかったから怒られたし。お前んちの方が絶対楽だって」

新島は自分の部屋にオレを案内すると、床にクッションをおいてそこに座るよう促した。言われるままに座ると、冷えた缶ビールを投げ渡された。

「この雪の降ってる日になあ……」

「文句言うならやらん」

「いや、飲むけど」

部屋に小さな温冷庫があった。ナマイキな。

「何？ティアスとなんかあった？もしかして。わざわざ家に帰らず、オレんちに泊めるだなんて」

「いや、別に何も無い」

「でも、学校抜けて、ティアス拾いに行つて、そのまま栄でデートしたんだろ？ティアスに聞いた」

「何、出かけてた用事つて、ティアスと会つてたつてコト？」

そう言つたオレを、新島が目をむいて見ていた。

「……ああ、そう言うこと？違つて、彼女と部屋にいたら、ティアスから電話かかってきたから、駅まで迎えに行つたんだ。その時聞いた。留守電も聞いたろ？」

「さつき聞いた」

「何、ご丁寧に電源切つてたわけ？」

「お前こそ、今日は『風邪で休み』つて親が連絡いれて……」

親？ここんちの親は休んだことすら知らなかったみたいだけど……
…誰が連絡したんだ？

「彼女が連絡いれてくれました」

「そついやお前の女つて、一体何者？！」

「……佐伯佳奈子」

「マジっすか！」

そつだ、昨日確かにいた！ティアスの後ろでキーボード弾いてた！ライブ中に騒がれてた！確かに彼女くらいの女なら、マンションの一つや二つ持つてるだろうし、音楽関係にも顔が利く！昨日のライブも彼女がティアスを引っ張つてきたと考えたら、判らないでもない。

でも……

「中学生くらいの娘がいるって、雑誌で書いてるの見たことがある……」

「よく知ってるな。ああ、そっか。クラシックの雑誌読んだっけ、お前」

「いや、そんな普通にしなくても」

「だって、何もおかしくない」

うちの親父より年上だっつーの！

「いいじゃん、東京タワーみたいで」

「まあ……美人だしな。それで言わなかったわけね、彼女のこと。てか、なんでオレにその話をするわけ？確かに怪しかったけど、黙っとけばいいじゃん」

「別に、このままティأسとお前がつき合い出したら、その内絶対ばれるからさ。先に言っとこうと思って」

そう言つて、彼は一気にビールを飲み干す。

「……なんで黙ってたんの？」

「誰と誰がつき合ってた？」

「だから、沢田とティأس。わざわざ気のない女のために学校抜けるわけないだろ？しかも、白神と顔あわせたくなくて、わざわざオレんちに逃げ込んだんだろ？泉だと、白神に連絡しそудし。そんなに気に遣わなくて良いんじゃない？別に白神とティأسだってつき合ってるわけじゃないし。お前と一緒にいる時間の方がよっぽど長いし」

何それ、オレとティأسって、つき合ってるってコト？

「いや、別に何もなし」

「うん。聞いた。迎えに来てもらって、そのまま一緒に遊びに行っただけだっ」

「まあ……成り行き？」

「あ、そう。成り行きね。佐藤さんのレッスン振ってまで」

「いや、今日はレッスンは休みで……」

「なるほど、計画的か。昨日、ティマスが泊まったときになんかあったかな……。アイツも沢田に対してエライ好意的になってたし」

「え、そうなの!？」

どうしてそうやって、あからさまに引いた目でオレを見るかな!？

「沢田って……なんか、泉の言ってたことって、的を射てるわけね」
「なにが？」

「いや、判んないなら別に良いんだけど。要するに、沢田はあれだろ？白神がティマスのこと狙ってるの知ってるのに、ティマスのこととっちゃおうとしてるから、白神に会わせる顔がない、と。だから、さつきも言っただけ、そんなことは気にする必要は……」

「ないの？なんで？」

「ないだろ。だって、つき合ってるわけじゃねえんだし。確かに、気まずいかもしれんけど、彼女が選んだんだからって話だし。何をそんなに白神のこと怖がってるかな？」

誰が、誰を怖がってるって？

誰が、誰をとっちゃおうって？

「オレは別に、ティマスのことなんか、好きとか嫌いとかつき合おうとか考えたこともない。大体、あの女はついこないだ知り合ったばかりだぞ？」

「つき合うまでに時間は掛けるかもしれんけど、好きになるのに時

間は関係ないだろう。そうでもなくても、お前ら、充分濃いつて」

「でも、オレは……」

「はいはい、佐藤さんね。判りやすいよな」

……えつと……、新島にもばれてるわけね。てか、オレってそんなに判りやすい？

「オレは……別に御浜のことなんか怖がってないぞ？アイツの何が怖いって言うんだ」

「その態度のどこが怖がってないんだ？」

おっさんの顔をしながら、新島はため息をついた。

空き缶を二つ持って部屋を出ていき、しばらくしてから布団を持って帰ってきた。

「布団、しばらく使ってなかったけど、これで良い？」

「……ああ……??？」

さっきの話はこれで終わり？

結局新島が何を言いたかったか、よく判らなかったぞ？

オレが御浜を怖がってるだの、オレとティマスが付き合うとかつき合わないとか……。

新島はオレの存在がいなかったかのように、フツーにしていた。部屋に着替えて、布団に入る。オレもそれに倣った。

もう1時近かった。外は雪が降っている。

カーテンを閉めたら、音がしないことに違和感が生まれた。

「観覧車の写真、見せてもらった」

「……うん」

恥ずかしいな、何見せてんだよ、あの女は。
オレにも送ってもらったけど、一緒に写ったヤツ。

「あんまり、振り回さないでくれよな、ティアスのこと。オレ、保護者だから」

電気を消しながら、新島は責めるわけでもなくそう言った。

「……振り回されたのはオレだっつーの」

「あ、そ。自覚してるなら良いけど。オレから白神には言わないよ。ティアスにそう言うな、とは言えないけど」

オレの表情は、新島には見えないはずだった。
でも、まるで彼にはオレの表情が見えてるみたいだった。

「御浜だけじゃなく……真にも言うな。頼むから」
「なんで？」

「真は、例えばそれがどんな状況でも、御浜の味方だ」

「なにそれ。あの、泉が？アイツ、執着とか、真剣味とか、無縁な感じじゃん？」

「そうでもない。極端だから。その代わり、オレも彼女のこと誰にも言わない」

「そうしてくれると助かるよ」

眠れるはずもなかった。

酷く、心が重かった。

冬休みに入って、愛里は用事でも出来たのか、オレの冬休みが明けるまでレッスンは無しだと伝えてきた。しかもメールで。相変わらずだ。代わりに大量に課題を出されたけど。

でも、正直、助かった。

これで、指が動かなくても、つまらなさそうにピアノ弾いても、オレに何か言ってくる者はいないはずだ。御浜とティマス以外は。

愛里に言われるよりは、良い。オレの心に深く突き刺さったりはしないから。

「……沢田、お前、ちゃんと寝た？」

「多少……」

起き抜けに布団の上で、眉間にしわ寄せながらメールチェックしてたオレを、怪訝そうな顔で見ていた。

「大丈夫かよ……」

携帯を触っていたら、ティマスからメールが来た。

『昨日はありがとう。楽しかったよ。また一緒に出かけようね（*
^|^*）今日はちゃんと学校行ってね』

「沢田……顔、にやけてる……！ホントに大丈夫か？」

「にやけてた?!」

「うん。ただでさえお前、愛想悪いんだから、急ににやけると怖いよ。モテなくなるよ?」

「モテてるか?」

「あんだけ声かけられりゃじゅうぶんだ。お前、顔が恵まれてるんだっての。口も愛想も悪いけど。……何でかな?」

もうそう言うの、どうでも良いって。中学のときに懲りたから。

「中身お子さまのくせに、何でそんな人生悟りきつた爺の顔してんだろね、お前」

「どういう意味だ!」

「良いから、メールに集中すれば? 誰から?」

「……いや」

すいません。布団も片づけずにメール打ってて……。

しかし、そんなににやけながらメール見てた? 失礼な。

確かに、ちよつと浮かれてるけど……。

でも、この浮かれてると、オレの心が重たいのは別問題なんだよな。

新島の両親と、談笑しながら朝食をとり、新島と学校に向かった。昨日、雪が降ってたとは思えないほど、外はいい天気だった。バスから見える景色がいつもと違っていて、妙に気持ちが高ぶっていた。

「ティアスって、今日はなにしてるの?」

「さあ、家でおとなしくしてんじゃない? 賢木先生がいなくて怒ってたし」

「……ふーん、そっか……」

新島がオレのことを不審な目で見る。

「いや、別に特に何も……！ほんとに」

「別に違うなら違うで良いけどさ。……あ、泉」

もしかして、真っていつもこのバス？路線違うから知らなかったけど、いつも同じバスだったらしい。

「なんでテツちゃん一緒なの？てか、新島昨日休みだったし、テツちゃん抜けてたし」

「昨日、たまたま会ったから、話聞くついでに家に泊めたんだよ。ちなみにオレはサボリ。……泉くん、昨日の古典のノートを……」

「あはは、高いよ。それよりテツちゃん、どこをふらふらしてたんだよ。御浜が心配してたっつーの」

新島のフリは、最高だったと思います。当たり障りないっつーか。

「あのなあ。御浜はオレの保護者か？お前は御浜の保護者か？」

「うーん……。テツちゃんの保護者かどうかはともかく、御浜の保護者はやっても良いかな？で、なにしてたの？」

「お前だって、時々ふらつといなくなるじゃねえか」

「テツちゃんはその言うこと無いでしょ？最近言動が怪しいけど。愛里ちゃんはどうしたよ？」

「休み明けまでレッスンなしだった。レッスンない方が課題がきつい……」

真は苦笑いを見ると、オレの横に無理矢理座ろうと入ってきた。二人がけの座席に、二人で座ってるっつーの！あげく、この巨体でオレの膝の上にのしかかる。

「御浜がさ、昼くらいからテツちゃんともティアちゃんとも連絡が取れなくなっちゃったって、心配してたんだよね。テツちゃん、オレのメール見た？」

「いや、夜中に見た。電源きれてるのに気付かなかったし」

「あつそ。御浜にフォローいれた？」

「だから保護者かよ。親父よりうるせえな」

隣で新島が苦笑いをしていた。

昨夜、真と御浜の話をしたけれど、理解してもらえた、と思っていた。

それにしても、オレより新島の行動の方が怪しいんだから、そっちにつっこめばいいのに……興味ないってコトかな？

「良いから、重いから退け。膝に乗るな」

「やだー。オレ、体力無いしー。終業式なんだからさばればよかった。テツちゃん、今日の午後は……」

「自主練習」

「あつそ。つまんない。良いバイトの話があるんだけど」

「バイト？」

金はあるって困るもんじゃないぞ？

「そ、知り合いの代理店の人が、安く使えるモデルが欲しいって言うてんの。事務所経由すると高いし、動けなくても良いって言ったから。友達でいない？って」

「そういうのかよ……。お前、よくそう言う話持ってくるよね。顔広いつつーか。オレ、勘弁して、そう言うの。無理。御浜は？顔良いし。近所のおばさん達に大人気よ？」

「うーん……ちょっと違うかな、イメージと。まあ、放課後まで考えといて。……新島、女モデルも頼まれてんだけど……」

「……ティアス自身はともかく……。いや、まあ聞いとくわ」

「？微妙なお返事。まあ、他にも声かけるから良いけど」

そう言っつて、真が膝から降りた。もうバスは学校の前に着いていた。

「なあ、昨日の英語のノートって、どうなった？」

「ん？コピーあるよ。何、英語なんか捨てたって言ってたのに」

「いや、やらんとさ……」

昨日、ティアスが教えてくれるって言っつてたのを思いだした。

「あー受験ね。昨日、進路相談表を配られたから、机ん中につっこんどいた。年明けに出せつてさ」

バスを降りながら、オレと新島の顔を交互に指さした。

「テツちゃんは音大でしょ？大変だよな、学校はフォローしてくれないから」

「……いや、判んないけど。そういや、お前がどこ行きたいとかつて聞いたこと無かつたな」

コイツこそ、南さんを追っつて芸大！とか言いそうだけど。

校門を抜け、校舎へ向かいながら、真は珍しく少し考えていた。

「うーん。市立大の情報科学部とか、良いかなって。大学は行けつて言われたんだよ、おじさん達に」

……そっか、コイツ、時々忘れそうになるけど、両親いないんだっけ……。

もしかして、すごく考えてたかな、進路のこと。
行きたかったとしても、確かに、言いにくいよな。

「新島は？」

「オレ、関東行くよ。どこでも良いから、6大学。理系でね」

う……みんな考えてる。御浜はそのまま持ち上がりで大学部に行くだろうし……。

教室着いたら、怖いけど相原とかにも聞いてみよっかな。

そう言えば、ティアスはどうするんだろう。来年度、普通に芸大受けるって言うてた。何か目的があつて、わざわざベルギーから来てるはずだし……。

オレだけか？オレだけなのか？こんななんの！？

07

会えない時間って言うのは、どうしても妄想過多になってしまう。

毎回そうなんだ。

愛里は学校が休みになると、どこかへ出て行ってしまふ。オレには行き先を告げず、突然。別に、そんな仲じゃないけど、一応……オレの先生なんだから、連絡くらいよこしても罰は当たらないと思う。

この間は……たしか、秋の3連休のころだったかな。ちょうどそ

の時期に教授がいなかったからと言って、1週間くらいフランスに行っていたらしい。帰ってきたとき、その話をやっと聞いた。

今回もそうだ。この間、新島の家泊まったときに来たメール以来、いっさい連絡無し。電話はつながらない。かといって、愛里の実家にそれを聞くのもどうだろう。

彼女は今ごろどこでどうしているのだろう、なんて、考える。

無駄な行為と知りつつ、オレはそれを繰り返す。あまりに非生産的だ。

「……この、大量の課題が悪いと、オレは思うんだ」

「何が悪いの？」

「いや、とにかくだ、何もかも」

「要するに、うまく進まないってコトでしょう？ピアノも良いけど、冬休みって宿題とかでないの？テツの高校」

ピアノの前で、愛里の残していた課題を前にばやくオレに、何故かうちのリビングでたらだら過ごしつつつこんできたのはミハマだった。

「あるに決まってるだろ？お前んとこはないのか」

「あるよ。内申書に響くからね。やってるよ、それなりに」

人んちのピアノの横でソファに座りながらジャンプを読んでるヤツの台詞か、それが？

「オレだって、やってるわい。……それなりに」

英語以外だけだ。

「……何かクリスマスっぽいモノ弾いて」

「何だ、ぼいものって」

「だって、思いつかないし！町中で流れてたって、曲名まで判んないって?！」

「思いつきで言うなよ、もう」

そう言いながら、練習に飽きていたオレは、棚から楽譜を探す。確か昔、母が使っていた楽譜の中にあつた気がする。探している最中、呼び鈴が鳴った。

「御浜、出てこい」

「……テツんちじゃん」

ぼやきながら、彼は玄関に向かった。
戻ってくる時には真を連れてきていた。

「なんだよ。お前の客じゃねえか」

「よく判ってるじゃない、テツちゃん。ミハマンちに行ったら、ここだって言うから。あ、……何かクリスマスっぽいモノ弾いてよ」

ピアノを指さし、指定する。どいつもコイツも、思いつくのはそれかい！

「なんだ？誰の携帯が鳴ってる?」

オレの言葉に、真と御浜が首を振る。……オレか。
ソファの上の携帯を手に取り、着信相手を見て、思わず御浜の顔を見てしまった。

「どうしたの?」

「いや……、ちょっと……」

携帯片手に、御浜達から距離をとって、リビングを出る。

「……なんだよ」

『なんだよって、随分よね。どうしてそんなにいつも喧嘩腰なの？』

ティアスも、愛里と一緒に突然なんだ。
まるで彼女のように、オレを振り回す。

「いや、喧嘩腰……ではない」

『だとしたら、自分を知らなすぎるわね』

コイツは……ホントに、ああ言えばこう言う。

でも、電話に出てしまう自分が悲しい。なんでだろう。

「だから、なんの用だよ？」

『冬休みじゃないの？』

「冬休みだけど？」

『御浜と一緒に出かけないかって誘われたんだけど、一緒にいるの？』

……すみません、質問の意図が全く持って判らない。

思わず、リビングの扉を見つめる。何だか怖くなってきて、少しずつ、リビングから距離をとる。

「一緒にいるけど……。二人で出かければいいじゃねえか」

『御浜が、みんなで出かけようって言ったの』

「ますます持つて意味がわからねえ！」

『いるんならいいよ。それだけ』

電話切りやがった……。御浜も意味わかんねえけど、コイツも意

味がわかんねえ。

……また呼び鈴鳴ってるし。仕方がないので、今度はオレが出る。玄関にいたのは、ティラスと新島だった。

「どっから電話かけたんだよ」

「そこ」

御浜んちの前の方を指さすティラス。

「へー。そう言えば、沢田んちって初めて来たかも。お坊ちゃんか、お前は。でけえ家だな」

「グランドピアノあんのよ、この家」

「クラシックやるヤツは、大抵金持ってるって言っけどなあ……」

人んちの玄関で、人んちを値踏みしないでくれ。

「なんで新島まで来てんだよ？クリスマスなら、彼女といればいいじゃん。こんなガキといなくても」

「ガキとはなによ！！失礼ね！！」

「まあ、仕事だし」

……そりゃそうか。思わず納得。

それにしだって、電話の意味が判らん。

「なんで電話なんか……」

人が質問してんのに、二人揃って勝手に上がってるし。

「まだ入れとも、良いとも言ってますんが」

「まあまあ。呼んだのは、白神だしな」
「何で家なのか……」

我が物顔か？御浜！？意味が判らん。

「テツちゃん、ただいま。御浜さん、まだいる？……お客さん？テ
ィアス？」

帰ってきた柚乃が、玄関に上がっていたティアスの姿を見つけて
挨拶をする。なんかどんどん人が増えていくな。

「テツちゃんの友達？」

「新島って会ったことなかったっけ？ティアスの保護者だよ」
「間違つてねえけどな」

柚乃は新島に簡単に挨拶をすると、ティアスと一緒にリビングに
向かっていった。その後を、オレと新島はゆっくりついていく。

「お前の妹、予想はしてたけど、むっちゃくちゃ可愛くない？！明
らかにお前と同じ顔の遺伝子が入っているのだけが気に入らんけど」
「……兄妹なんだから当たり前だろうが。てか、そんなに似てる？
オレら。自分たちじゃ全然わかんねえけど。親父ともそっくりって
言われるけど……」

「本人達はそんなもんだって。端から見たら、よく似てるよ。あんなに可愛いのはなあ……」
「オレを見るな、オレを」

しかも嫌そうに！！

「てか、何でオレに電話なんかするんだよ、あの女は。思わず御浜

達から逃げちゃったじゃないか」

「たち？」

「いや、真がいるんだよ」

「あつそ。てか、何で逃げてんのか、その方がわかんねえし」

「電話の方がわかんねえって。どうせ来るんなら、電話する必要ないし。オレが呼んだ訳じゃないし」

新島は不審そうな顔でオレを見つめながら、わざとらしく目を伏せ、大きく溜息をつきやがった。

失礼なヤツだ。意味が判らん。

「そんなの、考えなくたって判るじゃん。大した理由なんかないし。だって、メールはしてんだろ？」

「……えつと」

「何でそこでエロ本見つかった中学生みたいな態度になるかな……」

「わざわざ隠さないし」

「メールは隠すのに……」

「だって、さっきの明らかにおかしいし」

「おかしくないし、何でこだわんのかの方がオレにはわかんねえや。電話来たなら、『オレに電話がしたかったんだな』って納得して喜んでけば？」

喜んでけばって言われても……。

「いちいち理由なんか考えてたら、疲れるだけだって」

「いや……気になるだろ？」

「お前、映画とか考えてみるタイプだよな？」

「あんまり見ない」

「あつそ。理由考えるより、これからどうしようかなって考える方が楽しくない？」

そう言って、新島は笑う。

「……新島って、そうやって彼女とつき合ったんだ」

「そうやって、つき合ってるんだよ」

彼はオレの言葉を訂正してから、リビングに入っていった。

どうしてそんなに良いように考えられるのか、不安がないほど安定しているからなのか。

理由は判らないままだけど、オレは無性に新島の状況がうらやましくなった。

彼は決して、陽の当たる恋をしているわけではないのに。

08

「あれ？なんか人数多いな……。ま、いつか、多い方が楽しいよね、きつと」

ソファに座ったままリビングに集まった人数を見渡し、満足そうにそう言ったのは御浜だった。

隣でシンが、いつもの嘘臭い笑顔を浮かべながら相づちをうつ。

オレは、話に入る気などもちろんなく、二人を少し離れた場所から見守っていた。

「動くのめんどくさそうだけどねえ。どっか行くつもり？」

「……考えてなかった」

「あ、やつぱり？」

……人んちのリビングに多人数集めたかと思ったら、何も考えてなかったのか、こいつら。

おおかた、ティアス呼びつける口実って所だな。結局、また新島連れてきちゃってるけど。

「紗良さんも連れてくればよかったのに」

「今日ねえ、バイトなんだって。その後、研究室の人たちと飲み会だって。寂しいよねえ」

そついや、御浜っていつの間に南さんとか仲良くなってんだろ。何気にすごい。オレだって、ほとんど面識ないのに。

「そついや、秀二さんは？あの人、大抵この家にいるのに」

「そんなにしょっちゅうはいないよ。それに、年末年始は忙しいって言ってたし」

このメンツの中に秀二がいたら大変だろうよ。あいつ、自分の独壇場以外は、ほとんど喋れないし、若い力にあのおっさんが勝てるとは思えん。

「テツちゃん、なんか目つき悪いねえ」

「いつものことだって。ほら、あの人ああ見えて人見知りだし、人が多いところ苦手だしね」

うるせえよ！聞こえるように悪口言っただの！お前らは！

「うわ、睨んだよ！！ひどーい」

「絶対、『うるせえよ！』とか思ってるね、あれ」

……お前はオレの心が読めるのか？御浜！

「ティマス、きてくれたんだね、嬉しいよ」

御浜達にティマスが近付くと、彼は屈託のない笑顔で彼女を受け入れる。その笑顔に、彼女は笑顔で返す。

まあ、この場面で、あんな可愛いこと言っちゃうのが御浜だよな。

「忙しかった？」

「ううん」

彼女は少しだけ照れていた。まるで、一緒に出かけたあの時のように。

クリスマスイブに、気に入った女呼びつけて、多人数とはいえ出かけようってのは……御浜にしては、良い傾向かな。こんなコト、あいつには今までなかったし。

その相手がティマスじゃなければ……。

いや、別にティマスでも良いじゃん。オレとティマスなんか、何でもないし。新島が変なこと言うから。

そりゃ、こつそり一緒に出かけてるし、メールもしてる。電話だって、別に初めてじゃない。

でも、べつに何でもないじゃん、オレ達は。

彼女は、オレの方をちらつと見ると、微かに微笑む。

思わず、オレもこつそり笑顔を送ったりする。だけど、その行為に、オレの心臓は高鳴ると同時に、締め付けられる。

だって、御浜が見てる。

友達が好きな女とつき合うなんて面倒なこと、オレはしたくない。これは別に、御浜を怖がってるって言うのとは違うと思う。だから、こないだはすっかり一緒に出かけちゃったりしたけれど、もうしない。

……連絡はとり続けてしまつかもしれないけど。

「どこ行くの？」

「名駅とかは？イルミネーション綺麗らしいよ？」

「えー、御浜、こう言うときは、もっと人の少ないところへ！今日なんか、あり得ないくらい人がいるよ？」

「じゃあ、どこ行こうか」

「……要するに、決まってるのね」

ティアスの突っ込みに、3人で笑い合う。

なんか、一緒にいるところをあんまり見てなかったからその様子にまだ違和感を感じるけど、いつの間にかそれなりに仲良くなってたんだな。そのわりには、まだ保護者付きか。

でも、つき合うなら、さっさとつきあえよ。めんどくさい。

「沢田、何でそんな遠巻きに見てんの？」

「……別に」

「眉間に皺寄ってるし」

「ほっとけ、いつものことだ」

新島はこう言うとき、特に機嫌を悪くするでもなく、苦笑いをする。なんか、妙に落ち着いてて、大人っぽい。

正直、羨んでるんだろうな、オレは。こんな新島のことを。

「そついや、お前、ホントに良いの？ティアスと一緒にいて」

「なんで？別に、いつものことだし。オレ達、仲良いんだよ、こう見えても」

「いや、何がこう見えてなのか。充分すぎるほど仲良いつて。そうじゃなくて、こんな保護者まがいのこととして振り回されてて、それで良いのかってこと」

「楽しめばいいんだって。オレは、ティアスのこと気に入ってるし」

「気に入ってる、ねえ」

「いいじゃん、顔は可愛いんだし」

「……他は？」

「まあ、いろいろかな」

誤魔化したな。

「また、眉間に皺寄ってる。言いたいことがあれば、素直に言った方がいいこともあるよ？人生長いんだし」

何でかな。やっぱりあいつらの方を見ると、嫌な顔になるな。別に、どうだって良いのに。

「出かけますよー」

「重たい、乗るな！」

「いてえって！、泉！」

こそこそしてたのが気に入らなかったのか、真がオレと新島の間割って入り、無理矢理オレ達二人と肩を組んでのしかかってきた。体でかいんだから重いっつーの！

「オレ達、一緒に行く意味あんのか？」

御浜には聞こえないように、真にそう聞いたのだが、コイツは一切顔色を変えなかった。

「一緒に行かなきゃいけないくらい、初々しい関係なわけよ、そこんとこ判ってる？」

「しらねえよ」

あからさまに嫌悪感を示してしまい、しまった、何て思った瞬間、地面が軽く揺れる。そんなに大きな揺れではなかったけれど、体が浮くような、妙な感覚が残った。

「最近、こういう小さい地震多いよねえ」

「そうか？」

「ほら、夜中とか……。テツちゃんて、あれだよね、鈍い？」

「お前が神経質なだけじゃねえのか？」

……うまく話がそらせたようで、何より。

ピアノの前では、ティラスと御浜が笑い合ってる。

それで良いんじゃない？何だか楽しそうだし。

そう思えるのに、どうしてこんなに鮮明に、彼女と出かけたときのことを思い出しているんだろう。

09

なんでこのクソ寒いのに、オレ達は動物園にいるんでしょうか？

「テツちゃん……思いつきり不愉快な疑問がありますって顔、しないの！」

「オレのその不愉快な疑問が判ってるなら、答えをくれ、答えを」

吐く息が白いつつーのに、どうしてこんな所にいるのか。

騒ぎながら園内を歩く御浜達の後ろから少し離れて、オレと真がゆっくり後を追う。

園内にある遊園地に向かうエスカレーターに乗った。

「まあ、もう昼過ぎてたしねえ。オレ達、車もないから、足ないしさ」

「近場ですませたってわけか。でも、なにもこのクソ寒いのに、わざわざ動物園？」

しかもこの動物園、壁もないし、微妙に山の上にあるから、冬は寒いし夏は暑い。

「いや、動物園じゃなくて、あのタワーとか、観覧車とか、ちつさいコースターとか、いろいろあるじゃない、遊べるもの」

「お前だって、普段こんな所来ないだろ？」

「そうでもないよ。ここ安いし、こういうの好きな女の子、いるよ」

「お前が言つと信憑性があるな」

「統計とってますから」

マフラーに顔を埋めながら嫌味を言ったんだが、当然といった顔で返された。一体何人と「おつきあい」してきてるんだか。

「まあ、金ないし、町中ふらつくか、カラオケかってとこじゃない？」

「ボウリングとかでも良いじゃねえか。室内だし、町外に出るならN市に出てもO市に出ても同じだろ？」

「……先に言つてよ、それ。ボウリングで良いじゃん。大人数で楽しめそうだし。健全そうだし。……でも、テッちゃんちからだと乗り換えとかめんどくさいや」

そう言いながら、真もまたマフラーに顔を埋め、肩をすくめる。

「女の子ってさ、あんなミニスカートで寒くないのかな？」

「寒いだろうよ。中身、相当着込んでるぞ、柚乃なんか」

「まあ、なに着てても、外見が可愛ければ良いんだけど、あんまり酷いとかっかりするかな」

「酷いつて、どれくらい？」

「うーん」

透視でもする気か？その目つきは。

「テッちゃんてさ、ティアちゃんとうなの？」

「何が？意味が判らん、その質問の。つか、その呼び方こそどうなの」

「良いんだよ、オレはこう言うので。なんかさ、こそこそ目配せしあつたりして、やらしい感じ」

「してないつて、別に」

「新島とはホントになんもないみたいだし」

「だから、新島とも、オレともないつて」

そう言つたじゃねえか。全く、何を探りにきてんだ、コイツは。

「……御浜が、何か言ってるわけ？お前に」

「いや。あんな感じよ、いつも。今日だって、『せつかくだからみ

「なんで出かけようか」なんて可愛いこと言うから、うつかり来ちゃったわけよ」

「可愛い、ねえ？」

「幼いとか、初々しいとか言うけど」

「ああ、そうですか」

完全に楽しんでやがるな、コイツ。

「観覧車、3人ずつで乗る？」

いつの間にか観覧車の前に来ていた。少し距離のあるオレ達に御浜が大声で声をかける。

「……いや、3人ずつって、どんな組で分かれると!？」

柚乃は御浜と乗りたがるだろうし、御浜はティマスと乗りたがるだろうし……。かといって、そんなバランスの悪い組合せは逆にどうよ?ってかんじだし。ティマスがどうするか判らんけど、いつものように保護者よろしく新島と一緒に乗るかも知れないし……。

「あー、オレ、テツちゃんと話してるから、4人で乗れば?乗れるでしょ?」

「……男2人で観覧車?気持ち悪!？」

「まあまあ、たまには良いじゃない。女の子なんて、いつでも乗れるでしょう?」

「……いつでも?」

ティマスがオレ達を指さし、嫌そうな顔をした。

真は、そんな彼女の言葉を無視して、ほぼ強引にオレを引っ張って、御浜達を追い抜き、観覧車のゴンドラの中に押し込めた。御浜達4人は、その様子を呆気にとられたように見ていた。

「……いつでも、は乗れませんけど」

「なに、ティアちゃんと乗りたかった？」

「なんで？」

こないだ一緒に乗ったし。

「愛里ちゃんとはどうなったの、美人女教師は!？」

「どうもこうもあるか、別に」

思いださせんなよ、ちくしょう。

「……不機嫌？」

いつもの笑顔のまま、向かいから顔を覗き込む真が、余計に不愉快だった。

「うるせえな」

「そういや、休み中ってレッスンとかしないの？」

「御浜みたいなこと聞くなよ。愛里がどこかに旅立ってるから、レッスンはない。自主練習!」

「それで機嫌悪いの？ホントに愛里ちゃんのこと好きだよねえ」

……この男は……一体何が言いたい。こんな密室で。
なんか……蒸すな……。

「なんか、不満そうだね。テツちゃんの顔が赤いのは、とりあえず置いていて」

「うつさい!いちいち言うな!」

余計恥ずかしいっつーの!

「オレなりに御浜にも柚乃ちゃんにもティアちゃんにも気を遣ったつもりだけど」

「まあ、角は立たないけどよ、あの組合せは。違和感もあんまないし」

御浜達は4人でゴンドラに乗り込んでいた。上から見下ろした限りでは、御浜の隣に座る新島が苦笑いを浮かべているのが見えた。

「新島が不幸だな」

「仕方ないんじゃない？保護者なんだし」

「そうだな。借りもあるらしいし、きつちり返させとけばいいか」

なんかくだらない会話ばかりしてる気がするが……しかし色気がねえな。男2人で観覧車って……。

「テツちゃん、そんな嫌そうな顔して人のこと見ないでよ。何でそう常に喧嘩腰？」

「元々こういう顔なの！うつせえな！」

「喧嘩腰じゃない人は、うつせえな、何て怒鳴んねえつつうの。なんだろね、常に心に何かやましいことがあるから喧嘩腰なのかな？」

「……そんなことはないと思うが」

「テツちゃんて、難しいよねえ。なんか子供みたいだからさ」

「誰が子供だ」

ちくしょう、早く下につかねえかな。

こないだは、こんなコト思いもしなかった。

隣に座る彼女と、ホントは何を話して良いか判らなかった。必死だった。でも、あっという間にゴンドラが下について、それが何だ

か寂しかった。

あの時の状況に動揺してたオレに対して、あまりに普通に彼女はかわした。だから悔しくて彼女をわざとからかった。オレにだってそれくらいの余裕はあるんだと。

別に、好きじゃないから、なんだって出来る。

何だって出来るはずなのに、どうしてこんなに引がかかってるんだろう。

「ティアちゃんのこと、見過ぎだよ」

「別に、あの女を見てるわけじゃねえし」

「そつ、だったらいいけどね」

本当にただ、あの女を見てるだけなら、そんなに簡単なことはないのに。いや、簡単ではないけれど。少なくとも、オレの中では楽になる。御浜のことは気に掛かるけど。

だって、こんなにも愛里の存在が、痛い。

彼女はオレに対して、いい顔など見せやしないのに。それどころか、オレを簡単に突き落とすくせに。

本当は、もう、何年も前から、彼女のことなんか忘れたかったのに。

「何だよもう、黙るなよ。こっちだって、男2人で観覧車は初めて緊張をだね……」

「うるさい、黙れ」

「ひどいボケを拾う気すらないのかよ！あんまりまじめな顔しないでくれる？オレがいじめてるみたいじゃん」

「っーか、今のボケ？つまんねえ」

「鬼か！テッちゃん冷たすぎ！てか、顔怖いつて」

彼女に相手にされないから、彼女に裏切られ続けているから、オレがこんなに寂しくて苦しいままだから。

だから他に逃げ道を探しているのか？

オレにとってティラスって、もしかして逃げ道なのかな？

だから、自分でもよく判らないまま、引っかかっているのかな。

第2話 (the heads) エピローグ

10

「つーか、いきなり遊園地か。まあ、人数もいるし、保護者付きとはいえ、よく会ってるみたいだし。まあ、こんなモンかな」

観覧車から降りた後も、何故かオレと真は、4人を離れたところから追うように歩く羽目になる。

真なりに、御浜に気を使ってるのか、微妙な修羅場に巻き込まれたくないだけなのか、どっちだ。

「急に何だ。意味が判らん」

「いや、距離感がどうかなあってさ」

「距離感？」

コイツの言うことは、よく判らん。

「いや、いきなりがついたら、女の子は退くかなあって思って」

……。いきなり2人で観覧車に乗ったり、腰撫でたりしましたが……。

それって、がつついてる？

「経験上？」

「経験上」

しかも言い切ったし。

「まあ、適切なんじゃないやねえの？　そう言う意味では」

「テツちゃんからそんな台詞が出るとは思わなかったけど」

「何で？　出るだろ、それくらい」

「いや、テツちゃんて、ティアちゃんに気があるのかと、オレ、わりと本気で思ってたのね」

「意味がわかんねえ」

「オレもだけど。愛里ちゃんいるのにね」

「……愛里の話はするな」

ダメだ。どうして表情に出ちゃうんだ。

「御浜がかわいそうだからさ」

「御浜、本気かな」

「どうだろね。まだ判んないよ。2週間？　3週間くらいだっけ？」

「そんなもんだな」

そんな短い期間で、人間の何が判断できるというのか。

「あー、でも、いるよね。クラス替えしたとたん、3日くらいでつきあい始めて、1週間くらいで別れちゃう奴」

「そう言うの、つき合うつてカウントして良いのか？」

「本人達がそう思つて、やることやつてりゃ、そうなるんじゃない？」

「自分のことか？　真」

「オレはそんな、即決即断は出来ないって」

笑い飛ばすが、やってそうな気がするな。それとも、つき合うつてカウントしてないか。……後者かな？

どっちにしろ、めんどくせえ。オレはごめんだな。

1人の女のことを考えるのだって大変なのに、そんなのがめまぐるしく変わったら、疲れてしまう。

「オレ、やっぱ戻ろうかな……」

携帯を開くと、メールが入っていた。相手は、愛里。

どうせ大した用じゃない。彼女から連絡があるときは、レッスンでオレが遅れたときか……オヤジのこと。

「何？こんな時にメールとか見てんなよ？」

「重てえから寄つかかな」

でけえ図体で、オレの肩を寄せ、乗っかってきた。もしや逃げられないように？

「……寂しいねえ。何、このメール」

メールには『鉄城どこにいるか知ってる？』とただ一言。

オレが知るかよ。大学じゃねえのか。……あ、もう休みだって昨日言ってたな。出勤するらしいけど。

大体、愛里は海外に行ってるんじゃないかねえのか。

「いつものことだよ」

「こないだ言ってたこと、ホントなんだ。なんか、愛里ちゃんも振り回されてる感があるけど」

「振り回されてるっつーか、相手にされてないっつーか」

「へえ……。テツちゃんこわーい……」

そう言いながら距離をとる。

「このメールのために戻るの？」

「そう言うわけじゃないけど」

思わず、御浜とティアスに目がいつてしまった。
その様を、真にはしっかり見られたが、知らないフリ。

「だって、こんな来たって、オレにどうしろと?!しらねえっ
の」

……なんかここにいて、こんなメール見ると、おかしくなりそ
うだ。

「ふうん。返信するの?」

「……え?」

「……するんだ。どうしろっていうの、このメールに
考える」

「へえ……。DMだよ、テッちゃんて」

DMて!!

「何を根拠に」

「根拠って言った。認めてんのかお前は」

「認めてるか!?!」

「認めてるでしょう?このメールのために帰りたくって仕方ない?」

違うって。ただ、寂しいだけ。

……そうなんだ。なんでか知らないけど、寂しいんだ。ずっと寂
しくて苦しくて、仕方なかった。

愛里のメールが、それに拍車をかけた。

「沢田くん」

「……うわ!!」

「……うわ、って。この人、失礼よね？いつものことだけど」

目の前に立っていたのはティラスだった。笑いながらオレを指さし、真に同意を求めている。

「どうしたの？具合でも悪い？」

「別に？」

「なんか、あれだよ。ほっとけない顔してる」

何っ！ことを！？そう言うこと、さらっと言うか、この女は？

思わず隣の真の顔を見てしまったが、何故かちよっと照れていた。

「……何で照れてんだよ」

「いやあ……ねえ」

「何よ、2人とも」

彼女はむっとしてみせる。ホントによく表情の変わる女だ。黙つてると、綺麗なんだけど。

……違うな。そう言うことじゃ、ないな。

引っかかるんだけど、……なんて言ったらいいか。

「何？私の顔、なんかおかしい？じつと見て」

今度は彼女が照れていた。

「別に」

わざと、オレは笑ってやった。嘲るように。

「ホントに失礼よね、沢田くんて。いこ、真。何で2人だけ、こん

なに離れてんのよ」

「あはは。ごめんごめん。男同士で内緒話なんだわ」

「なにそれ。気持ち悪くない？」

「あ、やっぱ？オレもそう思っただけだし、ほら、テツちゃんて根暗でひきこもりで人見知りじゃね。だからあわせてやったわけよ」
「真だつて、人見知りじゃない」

彼女は少しだけまじめな顔でそう言った。

よく見てるな。

それがオレの、正直な感想だった。

このヘラヘラした男が、いかに人見知りで、人を選んで接しているかなんて、理解するのは難しいだろうに。

オレだって、御浜に言われて気付いたぐらいだ。言われてみれば、思い当たるフシがある、その程度だった。それ以後は、気をつけて真を見て、つき合っていれば、よくよく判ることだったのだけれど。

「オレはそうでもないよ。テツちゃんみたく、友達少くないし」

「友達の数は関係ないでしょ？良いけれどね」

彼女は笑顔で、前を歩く御浜達の方へ行こうと指さした。

「すぐ追いつくから、もどんなよ。根暗は根暗同士、話してるんでついでに、そろそろ腹減らない？って、聞いたいて」
「自分で言えればいいのに」

彼女は、あっさりと引いた。走って御浜達の前へ向かう。

「よく話してんの？あの女と」

「そうでもないよ。彼女の行動範囲は限られてるからさ。偶然会ったり、御浜と一緒にいるときに一緒にいたり。そんなもんかな。話もしやすいしね」
「そうなんだ」

全然、知らなかった。話をしてるって言うのは聞いてたけど。ティアスのメールにもあったし。

「意外と、距離あるね、2人」

「何が？」

「だから、テツちゃんとティアちゃん。あの子、テツちゃんの顔みないし、沢田くん、なんて呼んで、よそよそしい感じ。基本、フラシクな子なのにね、彼女」

「あつそう。オレ、そう言うの苦手だな。いきなり馴れ馴れしいの」

「そうなんだ、DMのくせに」

「それ、関係あんのか？」

「いや、気の強い女に虐げられてんのが好きなのかと……」

「あるか!？」

何でそうなる。愛里のことは、別に虐げられてるわけじゃねえって。

……似たようなものかも知れないけど。

11

どうしても溜息をこぼさざるをえなかった。それでもオレは、携帯をとりだし、オヤジに電話をかける。

「テツちゃん。人という時はだねえ……」

コイツ、細かいことに五月蠅いな。

「あ、オヤジ？今日、何してんの？」

『何って、今日は出勤だと言ったろうが。休みは29日……いやあれ？何日からだっけ？』

オヤジの電話の向こうからは、たくさんの男性が騒いでる声が聞こえる。その中から『30日です』と答える声がいくつか聞こえた。一体何が行われてるんだ、この職場は。

『何か用か？用なら戻るが……』

「あ、いや。大したことじゃないんだ。今日の夜は家にいるのかな、と思って」

『そうか。悪い、連絡しようと思ってたんだが、忘れてた。ついさつき、東京出張が決まって、戻りは明日の朝だな、早くて。明朝、直帰して良いか？』

思わず返事してしまいそうになったが、電話の向こうの研究室の誰かに話しかけたらしい。遠くから『3時にミーティング入ってます』の声がかかる。

『戻れたら、明日の朝に戻るよ』

「忙しそうだな。相変わらず」

『そうでもないさ。年末だから、こんなモンだろう。それより、ティアスは？お前、仲良いんだろう』

「は？」

思わず大声を上げたオレに、真が目を丸くして見つめていた。

『なんだ、この間、家に泊めてただろう』

「いや、それは、たまたまで……。事情は説明したじゃねえか。関係ねえし。別に、そんな。つーか、何だよ、突然。何か関係あんのかよ！」

『何でそんなに喧嘩腰なんだ、お前は。いや、連絡とってるなら、オレの携帯に連絡するように伝えておいてくれ』

……意味が判らん。何でオヤジに？

「テツちゃん、どうしたの？急に立ち止まって。電話すんのは良いから、とりあえず歩いてよ。変だよ、こんな所で」

真にそう言われ、辺りを見渡したら、周りは家族連れやらカップルが仲良さそうに歩きながらフードコートに向かっていた。この中で立ち止まってたら、さすがに変かも……。

何食わぬ顔して、オレは再び真の横を歩き始めた。

「何で？」

『……「音無が連絡をよこしてきた」そう伝えればいい。賢木のヤツは、海外に出てって、彼女に連絡することすら忘れてるみたいだから』

「音無……？って、オヤジの友達の」

確か、プロのジャズピアニストだ。子供のころ、何度か会ったことがあるぞ。でも、オヤジの友達って、（オヤジ含め）勝手な人が多い印象があるんだけど。

『そうだ。ふらふらしてて、ちっとも連絡がつかん。どうしようも

ない』

「オヤジだって忙しそうにしてるから、結構お互い様な気がするけど」

『音無にもそう言われたよ。じゃあ、頼んだから』

そう言つと、電話を切ってしまった。

「……って、近っ！？お前、人の電話聞いてんなよ！」

いつの間にか、横を普通に歩いていたはずの真が、オレの携帯の声を聞くように、頭を寄せていた。距離近いっつの、気持ち悪い。

「趣味悪いな」

「ジャズピアニストの音無^{ハルカ}って、音無悠佳？あの、日本より海外の方で売れているという……」

「っか、日本ではほぼ無名に近いんだが。よく知ってるな、コイツ。」

「いや、実際の活動は日本がメインで、ほとんど日本にいるらしいけど。日本語しか喋れないらしいし。よく知ってるな、お前」

「うん。紗良がそう言っの好きだからさ」

「ふうん。実際は、子供みたいなおっさんだけだな。子供過ぎて、日本だといろいろ問題起こしてて、関係者に嫌われてて売れにくい、みたいなことをオヤジが言ってたけど、良くわかんねえし」

「てか、テツちゃんのお父さん、そんな人と知り合いなわけ？すごいくない？」

「……すごいのか？いや、聞いたことないから判んないし。何か、オヤジの知り合いって言うだけで、素通りしてたな。ジャンルも違

うし。

「どうだろ。でも、家の母親の大学の後輩らしいし。……すごいんじゃない？」

「テツちゃんのお母さんて、音大出なんだ。だからあんなでかいピアノが」

「言ったじゃねえか」

「いや、お嬢さんなら、嫁入り道具に買ってもらってもおかしくないかと」

「何かお前、発言がおっさん臭い」

「酷！テツちゃんて鬼！ドMのくせに！」

だからそれ、関係ねえって。

「ふうん。沢田ってドMなんだ。そんな気はしてたけど。そんな話してんなら、さっさと合流しろよ。オレ、疲れちゃったよ」

若干不愉快そうな顔をしながら、話に混ざってきたのは新島だった。いつの間にか、先を歩く御浜達に随分近付いていた。

「ティアスが、様子を伺いに来てたろ？」

「来てたけど」

「そんな時に来ればいいのに。泉も、オレをあんな微妙な空気の中に放り込むな」

口をとがらせながら、真を責めた。真もまた、ヘラヘラしながらそれに答えた。

「いや、だって、判りきってるじゃない。大丈夫だって、相手は御

浜だから」

「うーん……白神が、天然なのか、判ってるのか、判らんな。女の戦いは熾烈だよ。いや、戦ってるわけじゃねえか。柚乃ちゃんが怖くなったり、オレを睨んだりするくらいか。ティアス自体を嫌ってるわけじゃねえみたいだけど、白神がなあ……」

やれやれ、といった顔で頭を搔く。

「ティアスも判ってんだかどうかって感じだけど」
「あんなにあからさまなのに……」

思わず、真と2人で顔を見合わせた。

「いや、気付いてるけど。どうなんだろうな。悪い気はしてないみたいだけど」

そう言って、何故か新島はオレの方を見た。

「オレに関係があるか？」

「関係してると思えば、そうなんじゃない？」

うつ……真も新島も、好き勝手言いやがって。

「座ろうよ」

大声でオレ達を手招きする御浜。思わず真もオレも苦笑いしてしまっ。

「うるせえよ。恥ずかしいから大声出すんじゃない」
「さっさとこないから」

呼ばれたのに、オレは彼の元に駆けよることを躊躇った。
真が動いたのに、オレは動けなかった。

それは多分、彼のせいじゃない。

もちろん、彼の隣にいる彼女のせいでもない。

自分でも判らないけれど、どうしてこんなに、気にしてるんだろ
う。

「沢田って、ホントに判ってないのか？」

「……何が？」

新島がオレの背中を軽く叩き、一緒に来るように促した。

「ティアスのこと、『状況判ってんだか』なんて言えるんかねえ？」

「だから、何だ。言いたいことあるならはつきり言えよ。つか、
言いてえんだろ？」

だって新島は、言いたくないことは口にもしない。

「オレは、お前らが気にするから、お前ら二人で出かけたり連絡と
ってることとか口にしないけど」

そう言いながら、彼は御浜を見た。

でも……お前らって……。

「そんなくらいには、お前のことティアスも見てる」

聞きたいような、聞きたくないような。

「オレは、彼女の味方だよ」

彼のその潔さが、まっすぐさが、真正直さが、今のオレには辛かった。

第3話 (the heads) 前編

01

『オレは、お前らが気にするから……』

確かにオレの目の前にいるこの男は、そう言った。

そんなにストレートにそんなこと言われても……。しかもこの状況で。もっと違う状況なら、判りやすくて良かったかも知れないけれど。

「……えっと、オレ、用事思い出し……」

「逃げんなくて」

新島は、がしっ、と音がしそうなほど、力強くオレの首根っこを掴んだ。

「それはいくらなんだってずるいだろ？オレ、そう言うのどうかと思うし」

「いや、どうかとって言われても……。オレにはオレの事情があるよ。お前はそう考えるかもしれないけど、同じような状況になったら……」

「逃げたって、なにも解決しないって。どっちかつつと、状況はどんどん自分の意志とは関係ない方へ向かう。一応言っておくよ、経験上」

経験上、経験上って……新島も真も、大人ぶっちゃって、むかつくな、おい。

そんなにオレの行為はお子さまか？

「意外とき、沢田って壁にぶつかっていったことないんだな。壁があっても、避けてきたっばいんだ。そんな風に見えないからさ、意外だな」

「……待てよ。その言い方は……」

「あ、悪い。失言だった」

「失言どころの騒ぎじゃねえと思うけど」

「だから、意外つつたじゃん。そんな風に見えないって」

「それが余分だっつーの！」

だから、凶星刺されてっから、さらに腹がたつんだって！

っーか、凶星って判る自分も不愉快だ！

ちくしょう……オレ、絶対今、相当嫌な顔してる。

「灯路、なにしてんのよ？」

しかも、よりもよってこんな時に首を突っ込んでくるか？ ティアスは。

「行くわよ？」

「お前、何でそんなに偉そうなんだよ」

文句を言いながらも、新島は嫌な顔をしてなかった。

新島の背を押しながら、肩越しに彼女はオレの顔を見つめた。

『そんなくらいには、お前のことティアスも見てる』

どうしたらいい？

ホントに新島の言うとおりなのか？！

だとしたら、……だとしたら、今までの彼女の行動に簡単に理由

が付けれてしまう。彼女からのメールも、あの日の行動も。今日のこの行為ですら。

どうしたらいい？

新島はそう言うけれど、彼女はそう思っているかも知れないけど、彼女とあんなに楽しそうに話す、御浜はどうなる？

……よりにもよって、御浜は1人で座ってオレを待っていた。

周りの席にはカップルやら家族連れやらばかりで、連中の姿は見えなかった。

「他の連中はどうしたんだよ？」

「何か、座っててって言われて。テツのこと待ってるように言われたから。並んでるよ」

御浜の指さす先には、話しながら売店に並ぶ新島達の姿があった。

……真と柚乃がいねえけど。

「座れば？今日、何か変だよ？もしかして調子悪かった？」

「寒いから疲れただけだ」

……なんでだ？今朝まで普通に話してたのに、なんで今は顔を見ることすら出来ないんだ？

どこに座ればいい？なるべく視界に入らないようにしたいんだけど……。

仕方なく、円形のテーブルを囲む椅子から、御浜の向かいも隣も避け、一つ分椅子を挟んで座る。

「ふうん。テツって結構、判りやすいからさ」

「お前ほどじゃないぞ。大体、オレがこう言うの苦手だって、知ってるじゃん、お前」

「オレもそんなに得意じゃないよ？」

「……企画したのお前だし……」

「いや、最初はグループで攻めた方がいいって、真が……」

入れ知恵してんじゃないかねえか、あの男は！いかにも御浜が考えたみたいに言いやがって。なに考えてんだ。

「真はオレの味方だけど」

「だけど？」

？突然、何なんだ？思わず御浜の顔を見てしまったが、いつも通りだった。

「だけど、テツの味方じゃないんだよね、残念ながら。いや、普段はテツの味方でもあるんだけど。オレとテツなら、オレを選ぶんだな、これが」

「お前、結構すごいことを、さらっと言ってるぞ……？」

力抜けるなあ、もう……。事実だけど、判ってるけど、判りきってるけど。だからこそオレは新島に釘を差したんだし。

「あいつの好き嫌いがはっきりしてるのは充分判ってるって。だからいったい何なんだよ」

「うん。オレも何なんだろうって思ってる」

「聞いたのはオレなんだけど」

「真がそう言う態度に出てるのだけは、判るんだよ。何でだと思っ
？」

……何でしょう……。

真っ正面から見るの、やめてもらえませんか。

御浜は、ホントは何でも知ってる。何もかもお見通し。

そう言うところがあるんだよ。

なのに、どうしてそう言う問いかけを、オレにしてくるかな？

お前、本当はどこまで、『何もかも』知ってる？

「さあ、オレにはよく判んないけど。何か勘違いしてんじゃねえ？」

「勘違い？」

「誤解とか？」

余計なことを言ってしまった気がする。

「誤解ね……何を誤解してんのか、オレにはよく判らないけれど」

ほら。

御浜は、しつかり突っ込んでくる。オレの今の台詞は、完全に失言だ。

「そんなに、一体何を気にしてるの？ テツは」

「……別に、何も？」

「そう。気にしてるわけじゃないなら良いけど。テツは、自分が思ってるよりいろんなことを気にしすぎだし、空回りするから」

「……お前には、お見通しって？」

「さあ、どうだろ。そう思ってるなら、そうなんじゃない？」

「何？二人して」

いつの間にか、真がオレと御浜の間に座っていた。

「何でもない」

「何でも無くないでしょ？ 釘でも刺された？ つーか、刺した？」

ストレートに、当たり前のように、でも茶化しながら、真はオレ

と御浜を交互に指さした。

「刺されてはいないみたいだけど……刺したつもりだよ」

「お、怖いね、相変わらず」

真はその御浜の台詞に大喜びするが、オレは背筋が凍る思いだった。

『つき合ってるわけじゃねえんだし。確かに、気まづいかもしれんけど。何をそんなに白神のこと怖がってるかな?』

怖がってないし、怖がる理由はない。ただ、気を使ってるだけ。
オレは彼と同じ土俵に立ちたくはない。ただそれだけ。
彼女のことなんか、どうだって良い。

02

「柚乃はどうしたんだよ? あいつらと一緒にはいないみたいだけど?」

オレは話を変えるつもりで、売店に並ぶティース達を指さしながら、真に聞いた。

「さあ? 電話鳴ってたから。どこかにいるんじゃない? すぐ戻ってくるでしょ?」

「ああ、そう」

目的を果たし、ほっとした途端、オレの携帯が鳴り響く。
相手は……愛里だった。どうして?

「……テツちゃん、どこ行くのさ？」

真の声を無視して、オレは彼らから距離をとり、電話に出た。

「どうしたんだよ」

『テツ、今どこにいるの？港にすぐ来れる？』

「……港？港のどこだよ？」

『観覧車のあるところ。今日、花火やるのよ。でも、迎えに来て』

「……迎えにつて……意味わかんねえし」

『良いから来てよ。すぐね』

電話切りやがった。あのわがまま女。

迎えにつたつて……お前を送り迎えしてる連中見たく、オレには足がないだろうが。高校生だぞ？！判つてんのか？

「テツちゃん、何？またお父さん？それとも愛里ちゃん？」

真のその台詞に、一瞬、御浜がオレを見たが、すぐにいつも通りの表情に戻った。

「……愛里」

オヤジだと言ったら、きっと御浜は嫌な顔をする。その理由はよく判らないけれど。愛里だと言っても、あまりいい顔はしないけど。

「オレ、帰るわ」

「つーか、なに言つてんの、テツちゃん！？ちょ……御浜も何とか言つてよ」

「え？うーんと、寒いから気をつけて」

「何それ！？意味判んないし！！」

そう言うヤツだって、御浜は。

重荷にも、抑制力にも、推進力にもならないし、なろうとはしない。

しないけれど、釘はきちんと刺すし、何かあったら隣にいる。

オレにとって、必要な存在だって、痛いほど判ってる。こういう何気ない時にこそ、それを痛感する。

だからこそ、オレが彼の邪魔にはなりたくない。

『何をそんなに白神のこと怖がってるかな？』

だけど何で？何で、あの新島の言葉が、頭を離れない？

「沢田くん、どこに行くの？」

新島と一緒に売店の列に並んでいたはずのティアスが、オレを追いかけてきた。

「……なんだよ」

「なんだよ、じゃないわよ。……どこに行くのかと思って」

少しだけはいかんだように、オレの機嫌を伺うような聞き方をする。

その彼女の様子に、再び新島の言葉を思い出す。

そうだと思えば思うほど、どうして良いか判らない。

「別に……用があるから、帰るだけ」

「そう。寂しいね」

「え？」

直球！直球過ぎるよ。しかもちよつと可愛いし。そう言うところ、ずるいよな。

ちくしょう、悪い気はしないし。

オレは別に、御浜のこと以外は気にしてないけど……でも、嫌いじゃない。多分、それだけ。

「冗談よ」

「あ、そ。そう言うこと言わなくてもいいんじゃないか？」

「お互い様。私、こんなに酷くないけどな」

「酷い？お前、本人を目の前にして酷いってなあ……。つか、何でお前の話になるんだ」

「だってトージが、君と私が似てる、なんてこと言うんだもん。失礼よね。私、こんなにぶしつけじゃないし、偉そうじゃないし、口も悪くないし」

「そっくりそのまま返してやるよ」

……あれ？てことは、やっぱ似てるのか？

「強がつてるくせに、弱っちいところもそっくり、なんて言ってた」

「オレは違うけど、お前はそうかもね」

彼女のメールも、電話も、回数を重ねれば重ねるほど、それを感じていた。

言葉が足りない彼女の心が、少しずつオレにも見えてくる。

そんな感覚を覚えていた。

だから、何度もやめようと思ってた。

これ以上、深みにはまる前に、やめたかった。

彼女の歌を聴いて以来。

彼女がオレの家に泊まって以来。

彼女と一緒に出かけて以来。

彼女と連絡を取るようになって以来。

ずっと、思ってた。

思ってたのに、やめられなかった。

こう言うの、なんて言うんだっけ？

「冗談でしょ？それは、君だよ？自覚してる？」

「失礼だよ、お前。オレは弱っちくなんかないって」

「弱いつて言うのは語弊があるかも知れないけど……なんて言うか、何か、常に怖がってるって言うか」

「怖がってる？誰が、何を？」

「判んないけど……そう見えるよ。何か、自分みたいで、判るんだ」

メールでも電話でも、そんなことは言わなかったくせに。

「うるせえよ、お前。オレは急いでんだ。もう行く」

「そう。寒いし、人も多いから……気を付けてね」

そう言ってくれたティアスの顔を、オレは見る事が出来なかった。

どうして彼女はそうなんだろう。

まるで御浜のようなことをさらっと言う。

なのに、まるで愛里のように振る舞うときもある。

でも、何より、彼女はオレに似ている。

だからだ。だからこんなに、彼女のことを引つかかるんだ。

オレは別に、それ以上の意味で気にしてるわけじゃない。

御浜も怖くない、彼女のことも気にしてない。あれは新島の勘違いだ。

だってオレは、こんなに急いで愛里の元へ向かおうとしてるのに。
まだオレは、悲しいくらい、オレに振り向かないあの女を思っている。

03

愛里に言われるまま、港にある遊園地に来たのが良いが、入れず、入口で彼女を待つ羽目になった。

ここに来るまでに、結構時間がかかってしまったせいか、空はすっかりオレンジがかったいた。

「あ、テツ！遅い！！もう、何で入ってこないのよ？」

「知らねえよ。何か、花火やるから入場整理券がいるとか言われて……だれ？」

オレに駆け寄る愛里の後ろから、1人の男が追いかけてくる。何か、愛里の好きそうな顔ですけど？何か、てかてかの黒いジャケツト着てますけど？

「ああ、気にしないで」

彼を見もしないで、そう言い放つと、オレに体を預けながら、オレの右手を両手でがっちり組んだ。

「じゃあね、この人と約束あるから。ばいばい」

追いかけてきた髪のセットに1時間くらいかけてそんな男に手を振りながら、彼女はますますオレにすり寄ってくる。

あんまり接近されると……ちよつとときどきしますけど。

愛里からは、甘い匂いと一緒に……

「……酒くせえよ！愛里！！」

「良いじゃない。良いから、行きましょ？」

腕を組んだまま、オレを駅の方へ誘導する。

「オレ来たばかりだし、あの人は……」

「待てよ、愛里！なんだよその男は！まだガキじゃねえか、どう見たって」

……不愉快な。老け顔って言われるのもそれはそれで不愉快だけど、ガキって言うのもどうかと思うぞ。何だ、この敵意むき出しの男は！！

「彼氏」

そう言いながら、彼女はオレの頬にすり寄ってきた。顔と頭が火照って、判断力が鈍る……。

「何だよ。じゃあ、オレはなんだったんだよ」

「別に？誘われたからつき合っただけ。クリスマスだもの、夜は彼と過ごすの、ね？」

甘い言葉と甘い表情。思わずその気になってしまふところだったが、彼女の脅すような目つきに、少しだけ正気を取り戻した自分。

よ……要するにだ。つき合ってこんな所に来てみたモノの、愛里はこの男が単純に気に入らなかったんだ。でも、それだけならさっきみたいにはつきりそう言えいいだけの問題な気がするけど……。

「ふざけんな！男がいるなんて、一言も言っただけじゃねえか！」

掴みかかろうとした、てかてかジャケット男の手を逃れ、愛里はさつとオレの後ろに隠れた。代わりにオレは胸ぐらを捕まれる。

「……暴力反対……」

疲れる男だな……。どうしてよりもよって、こういうダメな男を引っかけるんだよ。オヤジだけ追っかけてろっつーの。（それはそれでいやだけど）

何か、もう、どうして良いかわかんねえなあ。胃が痛くなってきた。

「このガキ！てめえの女に、オレがいくら使ったか判ってんのか？」
「うわー、最低ね。あんた、別れ際に女に慰謝料と使ったお金を請求するタイプでしょ？」

まあ、確かに最低だが、オレの後ろでそれを言っなよ。

「しかも、思い通りにならないと暴力で相手を屈服させようとするタイプ。どうしようもないわね」

お前……途中でそれに気付いて、オレを呼びつけたな？つーか、この状況で煽るな、そう言うバカな男を。

「どけ、このクソがき！その女に思い知らせてや……！！」

あ。思わず、脛にローキック食らわせちゃった。声を詰まらせて蹲っていた。

「じ……地味に卑怯なコトしやがって……」

「……別に卑怯じゃないって」

「もう、そう言うときは『オレの女に手を出すんじゃない！』とか声高に宣言するものでしょ？ホント、根が暗いわね、あんたは。行くわよ？」

「助けてもらつといて、根が暗いとか言うか、お前は！？」

オレの反論を無視して、腕を組んだまま彼女は走り出す。

途中、ヒールで走る事になった彼女を庇うように、彼女を支え、抱きかかえながら走る。少しだけ……いや、少しどころじゃなく、意識もしてるし、下心もあった。

だって、何かこう言うのって……この後、恋とか生まれるっぽくない？

なし崩し的に、うまく行かないか？オレと愛里で。

「あー、久しぶりに走ったわ。どうしようもないわね、あの男」

公園のベンチに2人で座った途端、彼女は深呼吸と共に悪態をついた。

しかも、足をぶらぶらさせながら、オレに何かを要求する。

「テツ、靴を脱がせて。痛いよ」

おいおい……それは何だかエロくて良いけど、どうなんだ。でも、言つとおりにしてしまう自分が悲しい。だってこんなもの

すごい、下から嘗めるような角度で見上げられるなんて。

「はやく」

オレは黙って頷くしかない。彼女の足下に跪いて、両手で靴を脱がせる。

ちらつと、彼女を見上げる。スカートから見える足もぎりぎりだし、けだるそうな彼女の表情が、オレの心をさらに高鳴らせる。

「ついでだから、足を揉んでよ。あの男、人をこんな所に連れだして、この格好で歩かせるんだもん。バカじゃないの？足、痛くなっちゃったじゃないの」

その男についてったのはお前だろ？何でこう、軽いつつーか、何というか。

でも、素直に揉んでしまふ。オレ、マゾっ気あるのかな？ホントに。

「ついて行かなきゃいいじゃん。バカだつて判ってんなら」

「あら、スペックは良いのよ？ああ見えても」

「……ださいし。何、あてかてかジャケット」

「そうなのよね。今日会ってみたら、あれだったのよね。この間はもうちよつとマシだったんだけど。あれでも、N大の理学部、お父さんが建築会社を経営してるの」

「それ、今は金持ってるかも知れないけど、親の後は継げねえし！てか、オヤジの大学だし！」

「鉄城の大学とか、そんなのは関係ないでしょ？まあ、確かにあの大学に行ったときに会ったんだけど」

やっぱり。

ホントに、オヤジも、愛里もウソがうまいんだ。そうやって、2人でこそそ会ったりしてるんだ。でも、ホントの所、どうなんだろう。

「どうしたの？ テツ？ 暗い顔して」

「いや……」

「そう言えば、テツって、こんな日によく迎えに来れたわよね。世の中こんな浮かれてる日はないわよ？ せっかく自由な身分なんだから、今のうちに楽しんでおかなくちゃ損よ？」

「自由な身分？」

「働いてちゃ、こんな平日の夕方に、遊びになんて行けないわよ。いくらイブだからって」

ああ、そう。それで学生の男を相手にしてたってことか？

「別に。暇だったから」

「そう。よかった。でも、もったいないわね、ホントに彼女もいないんだ。いい男に育ってきたのに」

彼女はオレの頬を撫でる。その手の冷たさに、やっぱりオレは誤解しそうになる。いや、もう、とくに誤解してるのかも知れない。どうしてオレが呼ばれたんだろう。どうしてオレは、こんな所で、彼女に跪いているのか？

彼女は、オレのこと、少しでも思ってくれてるから？

誤解するだけの条件が揃ってる。期待し過ぎちゃダメだと判つてるのに、オレはどうしても期待してしまう。自分の弱さに負けそうになる。

「あのさ、愛里」

「あ、……鉄城！」

彼女は笑顔で顔を上げ、ヒールも履かず、痛いと言っていた足で立ち上がり、公園を素足で走った。その先には、オヤジがいた。コートに身を包み、明らかに彼女を捜していたといった顔で、公園の中に入ってくる。

「何でテツが？……テツ？」

オヤジの声を最後まで聞くことなく、オレは走っていた。逃げるつもりなんか無かったのに、必要もないのに、ただ走った。

04

最低だ。オレってヤツは。何でまたしてもこんな所にいるのか。つか、彷徨っているのか！！

気付いたら、地元の地下鉄の駅前を、またしても、……またしても、うろついていた。無駄にコンビニに入って雑誌を読んだりしながら、空が暗くなつていくのを眺めていた。いいかげん、する事もなくてコンビニを出る。この間彷徨っていたころのことを思えば、制服じゃないだけマシだろう。

しかし……オレってヤツは、どうしようもないな。何かいやなことがある度に、こうやって行くあてもなく、しかも自宅の近所をふらふらと彷徨うのか？いくら家に帰りたくないとはいえ。人と話をしたくないとはいえ。

もう、寂しいんだか、苦しいんだか、よく判らなくなってきた。ただ、心が重い。

「沢田くん、1人？」

オレは、何故か、彼女が歌っていた、このクラブの前に来ていた。彼女がいると知っていたわけでもないし、来るつもりもなかったのに。

「何してるんだよ。出かけてただろうが、お前は」

「夜は用があるから帰るって言ったでしょ？ 沢田くんこそ、途中でいきなり帰ったくせに、どうしたのよ？ 御浜が心配してたよ？」

この間の夜と同じように、ステージ用の衣装に身を包み、濃い化粧をしたティアスが、クラブの入口でオレに声をかけた。用って言うのは、ここで歌うことらしい。

「だーからー！ あいつはオレの保護者かつつのー！ あいつの方が、よっぽど危ういくせに。お前、今日は1人なの？ こないだはいただろ？ 佐伯佳奈子」

新島と彼女の話は、ティアスからも電話で聞いていた。ちゃんと会って、しかも2人きりで話すのは久しぶりだけど、彼女との間に壁は感じなかった。

「うん。今日もいるけど、中で準備してる。そうだ、こんや時間ある？」

「え？ まあ、夜は」

むしろ暇ですが。帰りたくもないし。

「だったら、おいでよ。灯路もいるし」

「え、いや、まあ……」

彼女はオレの手を取り、引つ張った。乾燥した彼女の手は、思ってた以上に気持ちよかった。御浜の顔を思い出さなかったわけじゃないけれど、黙って彼女の手を握り返し、後ろについて扉をくぐった。

愛里に逆撫でられた心を、少しだけ撫でられたような、そんな感じだった。

多分、誰でもよかったのかも知れない。彼女が作った穴を埋めてくれるなら。

「終わったら、灯路と一緒に待っててね。部屋においでよ」

「うん。……て!？」

笑顔で言った彼女に、思わず笑顔で返してしまったが。何げにとんでもない発言してませんか、大胆だな。

「もちろん、部屋にはみんなで、ですよ？ちよつと期待するようなこと言ったからって、エライ態度が豹変してますな？」

後ろから、新島がわざとらしく肩を叩く。彼は一人で壁際に立っていた。

「豹変なんかしらん」

「そう？にやけちゃって、変質者っぽかったけど？満更でもないんじゃない、やっぱ」

「無いって、オレには……」

愛里が……いるって言うのは語弊があるな。大体、あの女、オレのことを振り回したあげく、足まで揉ませといて、よりにもよって、

オヤジと約束してたっつーのが……へこむ。

たまたまだよ。たまたま、オレの目の前に現れたのがティラスだった。それだけ。どうしてここに来てしまったのかは、オレにも判らないけれど。

「何だよ、にやけたり、暗くなったり、忙しいヤツだな。どこ行つてたか知らないけど、ティラスもあ言ってるから、待っててやれよ?」

「2人きりでもないくせに。大体、みんなって、誰よ」

「だから、オレと、ティラスと、彼女」

「カモフラージュ要員か、オレは!」

「ご明答。よくできました」

彼は悪びれない笑顔を見せる。要するに、新島と、その彼女である女優、佐伯佳奈子が一緒にいるのを誤魔化すための、賑やかし、というわけだ。確かに、年齢だけなら親子くらい離れてるし、彼女はいろいろめんどくさそうな芸能人だし、気を使ってるんだらうけど。

「何だよ、そのつもりかよ。自分のために人を振り回すんじゃないよ」

そんなのは、愛里だけでたくさんだ。

「それをどう捉えるかは、お前しだいなんじゃね?無理強いはいしないけど」

「結局どっちなんだよ」

「何が?」

「何がって、お前が」

ティアスが、オレに気があるようなことを言ったくせに。

「どうだろ。言ったのはオレだけど、ティアスはお前に何も言っていないし。気にしてるんなら確かめてみれば？そんな人生に疲れた顔してないで」

「疲れてないつつの」

「途中でさっさと帰ったお前を気にしてたのは確かだよ？着信履歴残ってない？」

そう言われて、オレは港を出て以来初めて、携帯を手を取った。鳴ってるのは知ってたけど、見たくもなかった。

新島の言ったとおり、ティアスから着信があった。18時3分。このくらいの時間だと、もう御浜達とは別れて、この店で準備を始めているころだろう。携帯に残る彼女の名前をただけで、心が随分軽くなっているのを感じた。

「意外と判りやすいのな、沢田つて。顔赤いし」

「うるせえな。赤くねえって！」

「いいけど」

彼は特に気を悪くしたような顔もせず、笑顔を浮かべていた。真と違って、新島は普段、常に笑顔を浮かべてるようなタイプじゃないから、ホントに機嫌がいいのか、この程度のことは気にならない程度に寛大なのか。

あとは、御浜から1件、オヤジから2件。多分、オレが港から地下鉄に乗るくらいの時間だった。

御浜は判る。ああいうとき、彼は心配している。その態度を見せるときと見せないとき、きちんと使い分けるのが、彼の優しさであり気遣いだ。十分承知してる。でも、こうしてティアスの傍にいないことになった今は、ちょっとだけ後ろめたい。

オヤジは……。

「沢田、始まるぞ？今日はこの1曲だけだから」

「……ああ」

オレは相当暗い顔をしていたのだろう。新島はあえてそれを避けるように、ぎこちない笑顔でステージを指差した。その動きとともに、ホール全体の照明が落ちた。

ステージには、ピンスポを浴びるティアス。その後ろにはスポットを避けるようにピアノを弾く佐伯佳奈子。この間のようなバンド形式ではなかったせいか、佐伯佳奈子は余計に目立っていた。しかも、間の悪いことに、このクラブという場に似合わないスローテンポのクラシック。まだ、以前のようなロックなら良かったかもしれない。

ティアスが、佐伯佳奈子が、どちらの意図かはわからないけれど、勝負したかったのかもしれないけれど、選曲も相まって、ホールではティアスの後ろで弾く「女優」の話題で持ちきりだった。

聞こえてくる、心無い声を新島がどんな思いで聴いていたかは判らなかったけれど、彼が不愉快そうな顔をしているのが暗闇の中でも確認できた。でもオレは、逆に安心して、ティアスの歌を聴くことが出来た。

彼女の歌は十分すぎるほど、オレを惹きつけていた。それを、はつきりと自覚する。一瞬だけど、愛里のことを忘れられる程度には力を持っていた。だけど、この状況で歌うのは、彼女が可哀想にも思えた。

オレだけが、彼女を見て、彼女の歌を聴いてるような錯覚すら覚えただけから。

「ありがとうございました」

ざわめきのなか、二人は袖に引っ込んだ。

「沢田、出ようか。外で待ち合わせてるからさ」

「そうだな」

不愉快そうな顔で、彼はそういうと、オレの顔を見ることなく、外へ向かった。

「カナさんはティアスを推して行きたいんだよ。少しずつバックを減らして、彼女が目立つように、彼女が好きなように出来るように」

オレに話しかけたのか、それとも独り言なのか。判断に困るほど小さな声で、彼は呟いた。オレは妙に安心して歌を聞いてしまったけれど、彼女だけを見てしまったけれど、それは、彼や彼の大事な女の意図とは、ずいぶん離れたところにあつたようだ。

「カナさんが……」

普段の新島からは想像できないような、そんな真剣な面持ちで、彼は呟く。少しだけ、その様が切なかった。

オレはこんな風に、誰かのために思えるんだろうか。悲しめるんだろうか。

例えば、愛里のために。

05

「おいでよ」と彼女が言うので、卑怯だと思いながら黙ったまま、

彼女の後についていった。そこで、オレは初めて佐伯佳奈子と話をした。

雑誌やテレビでしか知らない人間と話をするのは、何だかすぐったい気分だった。御浜ぐらいにはこのことを話してやろうと思っただけど、ティアスのことを話すのが面倒で、やめようなんて考えながら、彼女の話聞いていた。

帰りのタクシーの運転手に、オレ達のことを「教え子達なの」なんて、当たり前障りのない話をしている彼女を、新島が複雑な表情で黙って見ているのを目の当たりにしてしまった。

『理由考えるより、これからどうしようかなって考える方が楽しくない?』

『……新島って、そうやって彼女とつき合ったんだ』

『そうやって、つき合ってるんだよ』

この状況で、こんな扱われ方で、どうしようかな?なんて考えられるんだろうか。

重いな……。

重く、しかし当たり前障りのない会話をしながら、10分ほどでタクシーは止まった。オレが思っていたより、ずっと彼女たちの家は近かった。駅から近いのに喧噪からは離れている、N市内でもいくつかある、高級住宅街に分類される場所だった。すぐ傍にある女子大も有名なお嬢様学校だ。(どんな女が通ってるかなんて知らないけど)

「……誰のうちに、金があるって?」

オートロックキーを開け、ホテルのロビーと見まごうばかりのエントランスを抜けたとき、思わずそう、新島に文句を付けてしまっ

た。

「だって、ここはカナさんの買ったマンションだし。でも、さすがにグランドピアノは置いてないぞ？」

だって、このやたら広い共有スペースは一体なんだ？部屋はどんなに広いんだよ。

「それは、別宅だからだろうが」

ヒトのことをお坊ちゃんだの何だの言ったくせに。オレんちなんか、大したこと無いじゃないか。

普段、ティアスはこのな所に1人でいるってこと？彼女は、オレんちに来てどう思ったんだろう。思わず、佐伯さんと2人で先に歩いていくティアスを、オレは睨み付けるように見つめていた。

「ティアスんちは、フツーだよ。どっちかつうと。親いないから遺産と義兄ちゃんの稼ぎだけで食ってるし。あそこんちの義兄ちゃんは、生活に困らない以上に何とかしようとするヒトじゃないし」

「……いや、別に……」

「顔に書いてあるぞ？別に、自分で稼いでるわけじゃないんだから、そんなこと気にしてどうするんだよ。お前んち、充分だって」

「だから、気にしてねえって」

小声で言い訳して、彼女たちを追いかける。彼女には聞かれなかった。やたら広いエレベーターで4人、沈黙が流れる。

そう言えば、愛里の家もマンションだけど、でかいんだよな。まあ、でもそれは、母さんの実家だから、気にはしてなかったんだけど。オヤジと一緒に挨拶に行くと、やたら『困ってない？』なんて聞かれるんだよな。

子供のころのことは覚えてないけど、もしかしたら、昔の方が酷かったのかも知れない。オヤジがこんなに出世する前の話なわけだから。伯母さんにしたら、単純に甥や姪が心配なだけなんだろうけど。

愛里の言葉が、彼女の考え方が、オレの中に染み付いて、オレを振り回しているのを自覚させられる。自覚してるのに、判ってるのに、振り回され続ける自分が滑稽で笑ってしまう。それでもやめられないんだから、オレは相当重症だ。

「あ、そういえば、何も買ってなかった」

カードキーを差し込みながらティアスが思い出したように佐伯さんに声をかける。

「何もって？」

「お茶すら出せないけど」

「先々週末の時も、そんなこと言ってなかった？ちゃんと暮らしてる??」

「……一応。ご飯は食べてます」

どうやって食べてんだか。生活力皆無だな。珈琲一杯満足にいれられなかったし。

「灯路、ティアちゃんのこと、もうちょっとかまってあげてよ」

「えー。これ以上かよ。ただでさえ、保護者かよ、って言われてんの」

そう言いながら、オレの腕を引っ張り、佐伯さんにオレのことを指し示す。隣のティアスが、少しだけ不愉快そうな顔をした。

「大体こいつ、不器用すぎるんだって」

「そこまで酷くないわよ。今日はたまたま！ちよつと買い物に行かなかったら、朝、食べるものが無かったただけだもん」

「バイトしてるわけでもないのに、行かなかったって状況があるか！」

「もう、煩いわね。そんなこと、ここで言わないでよ！いいから、なにか買ってくるから、先に入ってて」

むつとした顔でエレベーターに戻ろうとするティアスを、新島が引き止める。

「いいつて。もう遅いから、オレが行く。カナさん達と待つてろ」

「灯路！」

「ティアちゃん、いいから入りましょ。沢田くんも、つき合わせちゃって悪いわね。お家はいいの？」

何と言うか、生活感の無い人だった。笑顔が作り物みたいに綺麗で、少しだけ戸惑った。二人に言われ、部屋に入る。

「いえ、もともと、今夜はうちに帰る予定ではなかったの。大丈夫です」

「そうなの？」

あ、急に「同級生のお母さん」みたいな顔しやがったな。

「……実は、今夜は父の客が来てるので、せっかくなので気を使つて、友人宅に泊まりに行くと言って出てきたのですが、その友人と連絡が取れなくなってしまったところに、彼女たちに声をかけられたものですから」

「そう」

『ついさつき、東京出張が決まって、戻りは明日の朝だな、早くて明朝、直帰して良いか?』

そう言つてたはずのオヤジが、愛里を迎えに現れた。

『彼』は東京に行かず、地元にいる。彼女も。

『彼』と彼女が一緒にいるにしろいないにしろ、彼は家に戻ってくるだろう。

「……すぐに、連絡が取れると思いますから。うち、放任主義なんですよ。父子家庭ですし、父は今、大学が忙しいみたいで。それより、新島の家の方が大変じゃないです?」

彼女は、黙つて微笑むだけだった。

持ち主同様、まるで雑誌に載つてゐるような生活感のない、30畳くらいはありそうなリビングに通され、ソファに腰かけた。

「ティアちゃん、もう1ヶ月くらいこの部屋にいるわよね。ずいぶん綺麗にしてるじゃない」

「使つてないから」

佐伯さんに答えながら、ティアスはオレと一人分の間を空けて、同じソファに座った。

微妙な距離感に、彼女の方を向くことが出来なかった。

「どうして?」

「だって、寝室だけで十分じゃない。あと、キッチン」

「キッチンも、あんまり使つてゐる感じがしないけど」

「そこは突っ込まないでよ」

チラッと、彼女が隣に座るオレを見たのが判った。

もしかして、オレに対してかっこつけてるってこと？ 気にしてるってこと？

「お前に生活感がないのは知ってるよ」

「失礼ね。ちゃんと暮らしてるわよ」

「リビングとか使ってないの？」

「だって、広すぎて落ち着かないじゃない。ピアノを弾くくらいよ」

彼女の台詞に、思わず顔が綻ぶ。指差した先に、アップライトピアノがあった。彼女がグランドピアノの話をした理由も判った気がした。茶化してるわけではなく、うらやましかったんだ。

「飲み物も食べ物もあるじゃない。ほら。沢田くん、どう？」

佐伯さんは、これまたやたら広いアイランドキッチンに入り、業務用並にでかい冷蔵庫を開け、缶ビールを出した。指さした先には、乾きモノが並ぶ。

「あのねえ。私も沢田くんも未成年なの。大体、私は飲めないし。カナは、ここに来るたびにそんなモノばかり買ってきて」

「あ、オレはいただきます」

こんな日は、飲まなきゃやつとれん。立ち上がり、キッチンへ向かい、佐伯さんからビールを受け取る。

ティアスのこの態度に、浮かれてる自分がいるのも自覚してる。だって、最初の印象が悪かったから気付かない振りをしてたけど、やっぱり彼女は好みのタイプだし（愛里と似てる、と思う程度には）メールも電話も、苦になるところか楽しいし。

もしかしくなくても、オレはこの女のこと、けっこう好きなのかも

知れない。

でも、そう思うと、余計に辛くなる。彼女のことを、御浜が好きだし、オレはどうしても、あの酷い女を心の中から捨てることが出来ないし、ティアスをその代わりにしているような気がしてたまらない。

ティアスとのやりとりで、自尊心を守っているような。でもそれは、ティアスにも、御浜にも失礼な気がするし。

「ねえティアちゃん。沢田くんって、いつもこんな感じ？」

『え？』

佐伯さんの思わぬ言葉に、思わずティアスと返事がかぶってしまった。

「……ちがうよ」

「そうよねえ。聞いてた話と違う感じ」

缶ビール片手にオレに人の悪そうな笑顔を見せた。

しかし、かなりいい年のはずなんだが、感じさせない……。中学生の娘がいるはずなんだが、思わず誤解しそうなくらい、表情がエロイし。

「ねえ、そこにピアノがあるから、何か弾いてよ？ティアちゃんから聞いているの。弾けるんでしょ？」

「……いま？ここで？」

佐伯佳奈子の前で？！

『冗談だろ?! また、指が動かなかっただろうするんだよ!』

……とはさすがに言えない。

仮に、佐伯佳奈子だけだったら、プロ相手だし、なんか遠い人なわけだし、『悩み相談』みたいな感じで、逆に楽だったかもしれない。『こんなことってあるんですか?』みたいな感じで……。

しかし彼女はプロであって、別にカウンセラーというわけではないから、困るかもしれないけど。

いや、それ以前に、時々弾けなくなることとか、ティアスに知られたくないし。そもそも、彼女の前では弾けなかったことがないから、彼女はそのことすら知らないし。知ったとしたら……なんていうだろう。心配してくれるだろうか。いや、彼女はそれを御浜に話すかもしれないし。

絶対言えないし……。でも、弾けなかったらどうするんだよ。そもそも、オレはこんなプロの前で弾ける様な腕じゃないし!

「別に採点しようってわけじゃないの。だからそんなに難しくならなくて。ティアちゃんが、君のピアノが好きだって言うから、聴いてみたかったのよ」

「カナ!」

少しだけ照れた表情で、彼女は叫ぶ。オレのこと、そんな風に話してるんだな、って思うとなんだかとても嬉しかった。

「ホントに、何でそんなに自信なさ気なの? 話してみたときにはそんな風には見えなかったのに」

「……カナ。もう、人の話を聞いてよ!」

わりと、似たもの同士？この二人。マイペースだな。

「もう、夜中だから……やめとこ、ね？カナ？？」

「大丈夫でしょ？ちゃんと防音設備のあるところ選んでるんだから。私が何で食ってると思ってるの？商売道具よ？」

「男と会うための隠れ家の癖に……」

「いいじゃない。たまには役に立つんだから。ね？」

ね？って、オレに同意を求められても困りますが。さすが別宅、そして儲けてるだけはある。

「適当に買ってきたけど……？お前ら、何やってんの？」

ピアノを眺めながら微妙な空気の中にいたオレたちに突っ込んだのは外に出ていた新島だった。正直、助かった……のか？

「カナ、座ったら？」

「そうね。そうするわ」

エロく、人の悪い笑みを彼女は浮かべる。何か言いたそうに彼女を下から上まで舐めるように見つめた。

「なんか、そういうところ可愛いわ、ティアちゃん」

「何でカナさん、そんなにティアスのこと好きかなあ？」

リビングのローテーブルの上に、コンビニの袋を広げ、並べながら彼は彼女に突っ込む。よく見たら、佐伯さんとオレが飲んでいるビールと同じものを、彼は買ってきていた。

「だって、かわいいじゃない」
「度が過ぎるんだよ」

そして、ティアスにはミネラルウォーターを買ってきていた。恐らく、いつもこうしてるんだろ。彼らの中の、妙な連帯感のようなモノを感じて、オレは少しだけ退いてしまった。

それを判ってるのかどうか、ティアスが一步だけ、オレに近付いた。ソファに並んで座るオレ達を、新島がちらつと眺めたのが、妙に恥ずかしかった。

「ティアちゃんの後ろで、沢田くんがピアノを弾いたら、絵になると思わない？2人とも綺麗で」

ビール片手の酔っぱらいのくせに、いや、それだからこそ、佐伯さんはゆっくりと新島の後ろに歩み寄り、座り込んでいる彼の背中を、屈んで撫でた。触れるかどうかと言うくらいのさりげなさだったけど。

「沢田と？まあ、コイツ、顔だけは良いからな」

「そんなこと無いわよ。ティアちゃんが誉めるんだもの。聞いてみたら、良いかも」

もしかして、そう言っつもりで、オレにピアノを弾かせようとしてたのかな、この人。

「……誉めてたっけ？」

「誉めてません」

意地悪くティアスに聞いてみたけど、案の定、彼女は照れた表情をしてそっぽを向いてしまった。その様子が妙に可愛い。

彼女は、オレには誉め言葉を聞かせてない。ただし、否定もしないのも、いまは判ってる。彼女はあの時、まるでオレの心を見透かしたように『楽しくしてあげる』と言っただけなのだから。

「見栄えは、合格点。あの、年齢相応の汚れてない色気が良いじゃない？」

「わからん。……それって、顔が老けててエロイってこと？」

「もう、そう言うところ、子供よね。とりあえず、見栄え上、ティアちゃんと並んでたら、かなり目を惹くと思わない？って言ってるんだよ」

そう言う話は、本人の目の前でしない方がいいと思うけど。気にしてないな？

「ステージではね、ティアちゃんの綺麗さを出したいわけよ。普段はこんなに可愛いのに、がらっと変わるところが魅力よね」

隣で、ティアスが照れて俯いていた。しかし、佐伯さんって、ホントにティアスのこと好きだな。でも、ステージ上の彼女は、確かに綺麗だけど。

嫌いじゃない。

「でも、それなら白神の方が似合ってるかもね。ステージに2人で並んでたら、作り物みたいで、綺麗って言葉にはぴったりだ。沢田は……」

「言いたいことがあるなら、はっきり言え、はっきりと。でも、まあ、その意見にはおおむね賛成だけど」

「誰？友達？」

また、彼女は新島を撫でる。今度は、右の耳を左手で。そしてや

っぱり、触れるかどうかの距離で。髪を弄ぶような手つきで、彼から手を離していく。エロイな、しかし。隣にティアスが座ってることと相まって、見るこつちが、妙な気分になってくる。新島は何食わぬ顔してるけど。

それにしても、ティアスは、オレのことは佐伯さんに話してたくせに、御浜のことは話してないってこと？

「御浜のことよ。沢田くんのお隣さん。ほら、この人」

……へえ。御浜に関しては、写メとかあるんですか。へえ……。しかも、話したことがあるっばい口振りだし。余計な期待したじゃねえか。

ティアスは佐伯さんの元に移動し、自分の携帯を見せた。

「……息を飲むくらい綺麗な子ね。中身も外見も。今どきこんな子いるのね。モデルか何か？」

「いや、王子様系一般人」

「なに、その分類？」

新島の適当発言について、佐伯さんがオレに聞いた。

「いや、まあ。間違っただけだと思います。近所のおばさまがたにも見かけ込みで『息子にしたいくらい良い子』と大人気なので」

「御浜は、良い子だと思うよ？」

「そう？ティアちゃんまでそう言うなら、そうかもね。でも、確かに、お似合いって感じ。ティアちゃんもこの子も、汚れてない感じがして」

ええと。オレは汚れてるってことでしょうか。汚れてない色気は、ピュアさに完敗。ってことでしょうか？だから、何でそう言う他人

の評価を人前でののか、この人達は！！

「……でも、私は沢田くんのピアノが好きだけど」

ちらつとオレを見た後、目をそらし、俯きながら彼女はそう言った。もしかしたら、オレが不機嫌な顔をしていたのに気付いたのかも知れない。

携帯を閉じ、黙ったまま、オレの隣に戻ってきた。

期待が確信に変わっていく。

ダメだって。もう、完全に彼女のことを見ることが出来ない。

ダメだって。彼女の横にいちやいけない。逃げなくちゃ。

オレは、この女のこと好きになんてならない。好みだけど、嫌いじゃないけど。それだけだって。

でも、どこに逃げればいい？家には帰りたくないし、寄りつきたくもないから御浜の家も秀二の家もダメだ。新島は……ここにいない。

「す……すみません、ちょっと、電話が……」

上擦ってしまった声を隠すように、急いで携帯片手に席を立ち、奥に向かって廊下を進む。

広いけど、部屋数自体は少なく、寝室が一つと、ゲストルームらしき部屋があるだけだった。まあ、男と会ったためっつーか、その男は新島なわけだけど、隠れ家に使ってたんならこんなモンかとも思った。

それより、電話。携帯のメモリを出しながら、他に泊めてくれそうなのを探す。でも、こんな時間だし、難しいかも。もういつの間にか11時だ。そろそろ地下鉄もなくなる。ここ、確か終電の最

終駅だし。

「あ、相原？お前、今夜さ……」

『悪い。いま、ちよつと無理。クリスマスに女に振られ……』

聞かなかったことにしよう。そんな不幸な現場（オレも似たような目に遭ったからこそ）に居合わせた男と一晩過ごして、傷を嘗めあいたくはない。とりあえず、愚痴をこぼす相原の声を遠ざけるように携帯を耳から離しつつ、他に誰かいないか考えることにした。したけど……オレ、友達少ねえなあ……。真の家とか無理だし。

「沢田くん。何してるの？携帯かけてるんじゃないの？」

つけっぱなしの携帯を腕を伸ばして自分から離す姿は、確かに奇妙だったかも。不思議そうな顔を見せるティアスの気持ちもわからないでもない。

『え？沢田、もしかして女といえるの！！酷！！裏切り者！！』

相原が電話の向こうで何か叫んでいたが、思わず電話を切ってしまった。

「いや、まあ……その。何だよ？」

「もしかして、今日、帰りたくないんじゃないの？沢田先生のお客さんだなんて言っつて。沢田先生、そんなこと一言も言っつてなかったよ？」

そう言えば動物園を出てから、オヤジの伝言を思い出して、ティアスに親父へ連絡するようにメール入れといたんだっけ。連絡したんだな……。

「泊まるって、探してた？こないだ、灯路の家に泊まった話も聞いたけど？」

「別に、なんでもいいだろうが。……新島の家泊めてもらおうかな？」

「灯路は、カナを送りに出てったよ？」

「は？なんで？」

「さっき、急に仕事の電話が入って、タクシーで事務所に戻って」

「送るって……どこまで？ここの外？」

「うん。ついていった」

首を横に振り、あっさりそう言った。

「だから、帰りたくないならここに泊まっておけば？以前、泊めてもらった借りもあるし」

ダメだって。お前からも逃げたいのに。

「嫌いじゃない」、それだけだったはずなのに。愛里がいるから、御浜がいるから、好きになったら面倒くさいから……。必死で押さえていたのに、隠してたのに。電話もメールも、彼女と過ごす時間も、それ以上のことを考えないようにしていたのに。

判っていたから、見ないフリをしていたのに。

期待が確信に変わって、確信がオレ自身の心を刺激して、押さえつけていたモノを、全て壊す。

「……ホントに、良いのか？」

「？うん。別に、良いけど」

ダメだって言うことはよく判ってる。だけど、もうどうしようも

なかった。

御浜に申し訳ないと思いながら、彼に嫉妬していた自分が、何を言っても仕方がなかった。

第3話 (the heads) 後編

07

12時半。地下鉄の終電が無くなったところだ。市内でもはずれの方には深夜バスなんかないし、今日はタクシーでここに来てるから他に交通手段はない。歩いて帰れない距離じゃないけど、こんな寒い日に、外に出すような女じゃない……はず。

そんな理由を付けなくても、彼女は自分からオレに「ここに泊まればいい」と言ってくれた。それだけで、充分すぎるくらいオレに期待を持たせた。

持たせたのに、もう1時間以上、さっきと同じようにソファに並んで座り、微妙な距離を保ったまま、たわいのない話を続けていた。オレだけが、過ぎ去っていく時間と、この微妙な距離を必死で気にしてた。

「どうしたの？」

彼女は、妙なところで鋭い。

「何か、さっきから変だよ？」

変だよ、と言うくせに、それを聞くことを躊躇う。オレのことを上目遣いで見つめ、一瞬目をそらした後、申し訳なさそうな顔で再びオレを見上げ

「……帰りたくないみたいだし。今日、お昼も何だかおかしかったし。何かあった？」

「何で？何もないし？」

「そう？ちゃんと会って話すの、久しぶりだからかな？電話ではよく話してるけど」

久しぶりってほど、久しぶりでもないと思うけど。彼女の感覚では、久しぶりってことか？それくらいオレに会いたかったってコトかな？ここまで言ったらやっぱり、自惚れか？

「そういや、オヤジと連絡とったんだ？言われたとおり伝えたただけだ、音無さんになんか用があったのか？」

「うん」

うん。と言ったきり彼女は何も言わない。それ以上突っ込むなっ
てことか？

余計なこと聞いたかな。会話がとぎれてしまった。違う話を振る
のもおかしいし……。

「寝るとき、奥の寝室使って。私、ソファで寝るから」

「え？いいって。オレがこっちで寝るから。さすがにそこまでは……」

沈黙に耐えられなかったのは、彼女も一緒だったようだ。急にそ
わそわした様子で立ち上がり、説明を始め、寝室に向かった。

「何だよ？」

「布団、持ってくるから、待ってて」

「いいって。それくらい、オレがするって。泊めてもらうのに」

何だろう。彼女も「泊まればいい」と言ったくせに、妙に意識し
てないか？それとも、今はオレが意識してるから？

逃げるように寝室に向かって廊下を歩く彼女を、焦る心を隠しな

がら追いかける。

「……そもそも、客用の布団なんかあるのか？隠れ家のくせに」

「予備の毛布があるから、私がそれをソファで使っわよ」

「暖房つけてても、寒いだろうが」

「一晩くらい、大丈夫よ」

「別に良いじゃん、ベッドで一緒に寝れば」

軽いジャブのつもりだったんだけど、予想以上の反応だった。寝室の扉の前で急に彼女は立ち止まり、振り返ると、睨み付けるような、でも誘うような、そんな目つきでオレを見つめる。びっくりするくらい顔を真っ赤にして。

「すげえね。顔、真っ赤。むっちゃ熱いし」

彼女の頬に触れたオレの手を、彼女は真っ赤な顔のまま、振り払った。ちよつと、シヨックだろ、それは。

「……冗談だろ？」

「そう言っの、冗談って言わないの！」

「言っって」

「今までそんなこと言わなかったし！」

あれ？ホントに怒った？オレのこと、好きなんじゃないのかな。

「ホント、ただの冗談だって！」

逃げるように寝室に入るティースを追いかける。自分でもかっこ悪いって判るくらい、必死で彼女を追いかけていた。だけど、寝室に入れてもらえず、無情にも中から扉を閉められた。

しばらく待っていたら、むっとした顔で（でも赤いままで）、毛布を抱えて寝室から出てきた。

「怒ってる？」

「怒ってないよ、別に。……冗談だって判ってるから、むかついただけ」

何だそれ、どういう意味だよ。本気だったら良かったってこと？

「持つって」

彼女から毛布を奪い、抱えてリビングに向かう。膨らみすぎた期待を、必死にうち消すように。

あんまり良いことじゃないのは判ってるはずなのに。もう、どうしようもないのはオレだけで、状況は何も変わってないのに。

変わってないけど、彼女の行動が、言葉が、オレの期待をますます膨らませる。ダメだと判っていても、受け入れられたい欲求の方がずっと大きい。

「まあ、一緒に寝るのは冗談にしても。寝るまでは同じ部屋にいても良いんじゃない？」

愛里に軽口を叩くように。愛里にばれないように、自身の心を誤魔化すように。彼女への好意を示す言葉、それが本音だと判らないように。

「……簡単にそう言うこと出来ちゃうんだね。彼女いるくせに」

「彼女？」

「佐藤さん」

その名前に、一瞬身震いをした。その様子を彼女はおそらく冷静に見ていたのだろう。冷やかな眼差しで一瞥した後、オレから毛布を奪い、1人でリビングに向かった。オレは気を取り直し、急いで追いかける。

「愛里は、ピアノを教えてくれてるだけだつて。言わなかったっけ？従姉妹だからさ……」

「でも、好きでしょ？彼女のこと。知ってるよ。彼女の名前が出ると、顔色変わるし、電話で喋っても止まっちゃうの。佐藤さんの話を出すと、絶対に誤魔化すし」

……やっぱオレって、そんなに判りやすいのかな？ティラスまで、そんなこと言うか？

オレがむっとしたまま黙っているのを知ってか知らずか、黙って背を向けたまま、ソファに毛布をおいていた。

その微妙に重い空気を、彼女の携帯の着信音が壊した。

「出れば、電話。誰？」

「……御浜」

あからさまにむっとした声で電話に出るよう促したオレに、彼女もまたむっとした顔で電話の主の名を明かした。またしても、オレの反応が判りやすかったからか、彼女はオレから少しだけ距離をとった。

だって、この状況はまずいだろう！御浜はティラスのことが好きで……。つか、もしかして毎日電話してる？あいつ。オレも似たようなもんだから、何も言えないけど。

「いま？ごめんね。友達きてるから。うん。そうなんだ。うん、連

絡あつたら知らせるよ。またね」

友達だつて。誤魔化したよ、この女。いや、オレに気を使つてくれたのか？判らないけど、でも、助かった。

それにしても結局、誰に気を使つたんだ？御浜？オレ？それとも、自分の保身のため？

「沢田くんと連絡とれないって、心配してた。昼も、様子がおかしいから気になるけどね、なんて言つてたけど。おうちに連絡した？柚乃も同じこと言つてたみたいだし」

「そついや、してない。つーか、あいつはオレの保護者かつーの」

溜息をついて見せたら、彼女はやつと笑顔を見せた。でも、オレは別のことが気になつてた。

「そつやつてしよつちゅう、連絡とつてるんだな。会つてすぐのときから、かなりメールしてたみたいだし」

さすがに、会つてすぐ次の日に、情報交換もして、名前で呼び捨て合つてたのにはびっくりしたけど。

「うん。御浜は良い子だし。仲良くなれてると思うよ。沢田くんみたいに意地悪じゃないし」

『意外と、距離あるね、テツちゃんとティアちゃん。あの子、テツちゃんの顔みないし、沢田くん、なんて呼んで、よそよそしい感じ』

あれ？やつぱり、オレの自惚れなのか？ずっと、こんな距離感だったのに、そう言われると気になってくる。御浜も、真ですら、いつの間にかこの女と仲良くなつてたのに、オレは1人、近づき過ぎ

ちやいけないって勝手に思いこみながら、彼女から一番遠くないか？
今のオレと彼女の物理的な距離はこんなに近いのに。精神的にも
近い気がしていたけど、もしかしたら、こんなコトは彼女にとって
当たり前なのかも知れない。

そんなこと、今さら言われても困る。

決して、彼女だけを見ているわけではないにしても、オレは、強
く彼女に惹かれてる。まずいつて判ってるのに、（もしかしたら判
ってるからこそ）自覚したが最後、歯止めが利かない。

「……座れば？まだ、眠くないだろ？」

「そんな不機嫌な顔で言われても」

むつとしてるのが、照れてるのが、わからないな。それでも彼女
は、オレの様子を伺いながら、ソファに座ったオレの隣に並んで座
る。

「あと、御浜とか真みたいに、オレのこと名前でも呼んでみれば？」

「え？」

また、真っ赤になってオレを見つめていた。何だよ、何でそんな
可愛い態度なんだよ。もしかして恥ずかしくて、そう言っよそよそ
しい呼び方ってことか？

「なんか、ティアスにそうやって呼ばれるの、不自然だし」

悔しいし。

「……テツ？」

おそろおそろオレの名を呼んだ彼女との間は、さつきと同じように1人分空いていた。その距離を詰めることなく、オレは彼女の頬に手を伸ばし、顔を引き寄せ軽いキスをする。
少しだけじゃ足りない。ここまで来たら、オレはもっと、彼女との距離を縮めたい。そう思っていただけなのに。
彼女はオレの頬を思いっきりひっぱたいた。

08

「いてえな……ちょっとキスしただけだろ？」

「ちよつとお？！何よそれ。ちよつとでそんな真似できるわけ？」

立ち上がり、オレのことを真正面から睨み付け、頭ごなしに怒鳴りつけた。

「なに怒ってんだよ……」

理由なんて、一つか。彼女は単純に嫌だったんだ。そう、あつさと認められるほど、オレは冷静だった。座ったまま、彼女を眺める。

違うな。冷静っていうか……体が震えて、鼓動が治まらなくて、立ち上がれなかった。追い込まれすぎて、腹をくくった。そんな精神状態だ。

「沢田くんなんか、佐藤さんのことばっかのくせに！何よ！」

「だから、名前で呼べって」

きょとんとした顔で、彼女はオレを見つめる。一瞬、照れたように顔を伏せる彼女に、オレは必死で冷静なフリをして畳み掛ける。

「愛里のことなんか関係ないし」

「ウソばかり。ホントは、今日だって佐藤さんに会いに行ってたんでしょ？真が言ってたもの」

「それはホントだけど、端に出汁に使われたただけだ。大体、今日だってオヤジが迎えに来てたんだから。オレはその代わり。愛里はずつと、うちの親父しか見てねえよ」

そう言つと、彼女は黙ってしまった。申し訳なさそうに、オレを見ながら。

「大体、お前なんかに覚悟もなしで手を出したら、いろいろ面倒じやねえか。仮に、オレが愛里と何かあったとしても面倒だし、何もないけど、やっぱ面倒だと思ってるし。オヤジとか、賢木先生とか、新島とか」

そうやってあげてはみたけれど、一番「面倒なもの」の名前を口にすることは出来なかった。

面倒だし、未だに、どうしようか考えてる自分がいるけど、どうしようもないのも知ってる。

「だから、お前が嫌がつてんのは判ったけど。そんな風に怒られるいわれはない」

「でも……」

「だから、その辺は察しろつて。あと、喧嘩腰になるなつつの。嫌ならもうしない。オレの勘違いだし」

勘違いだったんだって判っても、もう遅い。なんか、勢いに任せ
て、襲うような真似するんじゃないかった。いろんな意味で取り返し
がつかない。

彼女との間の距離も、御浜との関係も。そして何より、自分の心
が。

こんなにはつきりと、御浜と彼女が仲良さそうにしてることを嫌
な自分を、自覚するとは思わなかったぞ。

「顔、赤い。熱いし。お互い様だわ」

「お前がオレに触るのはイイのかよ」

彼女の右手が、オレの頬に触れる。オレは座ったまま、顔を伏せ
た。彼女の顔が見られなくなってた。自分の顔が熱くなってくのが
みつともなくて。

「沢田くんみたいに、下心がないから良いのよ」

「だから、名前で呼べって」

オレの頬に触れたまま、屈んでオレを見つめるティアスを、意を
決して真正面から捉えた。伏せていたオレと目が合ったのに驚いた
のか、今度は彼女がオレから目をそらした。逃げる彼女の右手を、
掴む。

「……テツヒトくん。離して」

「さっきみたいに、呼べばいいのに？」

「……テツ？」

今度は彼女の体を引き寄せ、腰を撫でながら何度もキスをする。
抵抗しないのを良いことに、そのままラグの上に、優しく彼女を押
し倒す。

「別に、嫌だったわけじゃなくて……。でも、これは……」

嫌だったわけじゃない。彼女がそう言ったのを聞いて、少しだけオレは安心する。今さら勘違いって言われても、やっぱり困る。

「まだってこと？」

「何でそんなに偉そうなの？ テツって」

真っ赤な顔してるくせに、憎まれ口はたたけるんだな、この女。必死な感じが、今は可愛く見えてしまうけど。

「この状況でそんなこと言える、お前もね」

もう一度キスをして、彼女の首筋に顔を埋める。オレの行為に、彼女は抵抗しなかった。

この先に行くかどうか迷っていたとき、玄関が開く音が聞こえた。

「ティース？ まだ起きてるのか？」

新島の声！ 佐伯さん送ってたんじゃねえのか！ てか、送ったついでに外でヤッてんじゃねえのか！

オレが彼女からどうと動くより先に、彼女は急いでオレの腕から逃げ、起きあがった。

「なんだよ沢田。まだいたのかよ。何してんだ。もしかして、取り込み中だった？」

リビングに入ってきた新島は、微妙な距離を保ちながら、床に座るオレ達2人を見て、当然のようにそう突っ込んだ。彼の見解とし

ては、そう言う展開になってしかるべき、と思ってるかも知れないけど。

「そう言う冗談、やめてよ」

「今夜、泊まるところがないからソファと毛布を借りたんだよ」

「そうそう。それより、灯路はカナを送りに行ったんじゃないの？」

さすがに、二人して必死に否定してんのは怪しかったかな……。

ソファがあるのに二人して床に座ってるんじゃない、何かあったようにしか見えないだろう。もちろん新島は、不審そうにオレ達を見ていた。

「忙しいのに、最後までついてってどうすんだよ。途中、タクシーで追い返された。泊まるって言って家を出てきてるから、帰るわけにも行かなくて戻ってきたんだよ。ここに泊まってこうと思って」「泊まってく？！何だそれ。いつもそんなコトしてるのか？」

だって、普段はここにティアスしかいねえのに。しかも、今日だって、ティアスだけしかないつもりで帰ってきたんだろ、コイツは。危険、危険！！

「……そんな食いつかれても。ティアスとなんか、何もないし。大体コイツ、オレとカナさんが2人にいる時は気を使って2人きりになろうとするくせに、オレ1人だと女王様なみに偉そうなんだもん」「だって、あんまり会えなくて寂しそうだし」「寂しそうとか言うな！」

照れてるし。

しかし、オレにあれだけのことを言った新島とその彼女の様子を見てたけど、意外と普通だったな。もっとドラマチックなのを期

待してたのに。

「それより、沢田がここで寝るなら、オレはどこで寝たら良いんだ。つーか、放浪癖でもあんのか？お前」

照れ隠しのように、オレに悪態をつく。オレの目が見られないほど照れてるくせに、なんてヤツだ。

「放浪癖とか言っな！」

「何で帰らねえの？」

「たまには家に帰りたくない日もあるだろうが」

「わりと頻繁な気もするけど」

そう小声で言う、新島の意図は判らないでもなかったけど。オレが逃げていることを、その相手を彼が明確に理解していなくても、その行為自体を、彼はよしとしていない。

「ま、いいや。なんかオレ、タイミングの悪いときに戻ってきたみたいだし。邪魔しないで引っ込んでるわ。おやすみ」

「え？ちよっと、灯路！？」

彼はオレ達の顔を見ずに、ティアスの叫びも無視して寝室に向かった。しかし、彼女もまた、それを強く引き留めはしなかった。

いや、2人でこんなとに残されましても。すぐそこに新島がいるって判った状態で、これ以上、何も出来ないだろうよ……。

「なんか……ものすつごく誤解してない？灯路ってば……」

「……当たらずとも、遠からず」

彼が寝室に入って、扉を閉める音が聞こえたと同時に、彼女を抱

き寄せ、キスをする。何度もキスしながら、抱き寄せる手に力を込める。彼女は赤くなつて下を向いていたけれど、今度は頑なに押し倒されることに抵抗していた。

「この状況で、なに考えてんのよ」

「いや、まあ、そうだけど。ここに一緒にいるなら、してもしなくても、同じように思われる気がする……」

彼女は床に転がるクッションでオレを思いっきり殴った。何だろ
う、ものすごく、へこむ……。

「ケータイ、鳴ってる」

「何だよ……」

突然、彼女がきよろきよろとしだす。オレと距離をとるためか、
急いで立ち上がり、辺りをうろつく。

「これ、テツの？」

「あ。あれ？いつの間に落とした？」

ポケットを探りながら、彼女に近付く。彼女は真っ直ぐに手を伸ばし、出来る限りオレと距離をとるようにして、携帯を手渡してくれた。へこむだろうが、その態度……。

「あ……」

はつきりと、着信者の名前が出ていた。御浜だった。彼女も確実に見てるはずだ。

「出ないの？」

どうしよう。どうしたら……

「テツ、最近よくふらふらしてるから、御浜が様子がおかしいって、心配してたよ。出れば？」

心配してたとか、してないとか、なに話してんだお前は。オレの知らない話を、どっちの口から聞くのもホントはいやなんだってば、オレは！そんなこと、自覚させんな。考えないようにしてたのに！

「睨まないでよ……怖いなあ」

ぎりぎり手を伸ばせば届く所に立っていた彼女の腕を掴み、力任せに引っ張り、引き寄せた。

「……痛いって！」

ケータイは、まだ鳴り続けていた。

「ぎゃあぎゃあ騒ぐな！五月蠅い！新島が出てくるだろ！」

「痛いって言っただけじゃない！さっさと出なさいよ、電話！」

「五月蠅い、五月蠅い！お前だって、御浜とこそ話してるくせに！」

「何それ、今は関係ないじゃない！何でそこで御浜が出てくるのよ！電話かかってきたのはテツでしょ！」

「お前の所にもさつきかかってきただろうが！」

自分でも、何でこんなこと言ってるのか。冷めてる自分と、頭に血が上ってどうしようもない自分が、心の中で同居してるようで気持ち悪かった。吐き気すら催しかねないくらい。だけど、とめられない。一体オレはどうしたいんだ？

「なんで……」

真っ赤な顔して、上目遣いでオレを睨み付ける。

「もう、意味判んない。ああいうこと出来るくせに。何で怒られなくちゃいけないの？」

「……やべ、コイツ、泣きそうだ。ど……どうしたら！？っか、何で？ティアスだって、オレに怒鳴りつけてきたくせに！」

彼女は顔を伏せ、オレから目を逸らし、体を震わせていた。この状態で、沈黙が続くのは、正直きつい。彼女はオレの顔すら見ないのに。オレも、彼女の表情を見せてもらえないのに。

09

息が詰まるような沈黙に耐えられるはずもなかった。身を震わせる彼女を気に掛けないわけもなかった。

握っていた携帯の音もやみ、ますます沈黙は重くなる。

マナーモードにしてガラスのテーブルの上に置いた。その音に、彼女が一瞬反応したが、やはりこちらは見ずに顔を伏せていた。

「……もしかして、泣いてる？」

彼女の肩を掴み、揺さぶるが、頑なに顔を見せようとしなない。声も出さず、ただ首を横に振る。

「ティアス？」

「……てない」

「泣いてるし。何でだよ」

「怒るから。……こんな、ケンカみたいなこととかしたくないのに」

「オレもだ」

「テツはいつも喧嘩腰のくせに」

失礼な。誰が喧嘩腰だ。真っ赤になって俯いてるから、可愛いところあるかと思えば、言いたい放題言いやがって。

両肩を掴んだまま、無理矢理下から覗き込むようにしてキスをする。

泣いていたからか、あきらめたからか、彼女はその行為にも、その後の行為にも抵抗しなかった。

彼女をソファに座らせ、抱きしめたままセーターをめくりあげ、背中に直に触れた。

「……ケータイ」

再び、携帯が鳴り響く。とは言っても今度は振動でガラスがカタカタと鳴っていたのだが。思った以上に五月蠅かったが、相手を確認するのも、止めに行くのもやめた。

御浜のこと、忘れたわけでも気にしてないわけでもないけれど。でも、目の前の彼女に手が届くのに、我慢できなかった。

必死でうち消そうとして、考えないようにしていたこともあった。御浜のことを口に出すことで、否定していた。

愛里のこと、頭から離れないけれど、目の前の女のこととはやっぱり別だ。

自分でも、ずるくて臆病で、どうしようもないと思う。そのくせ、こうやって、美味しいところだけ掠め取るような真似をするんだ。

オレはいつもそうだ。

判ってるけど、ずるいとは思うけど、申し訳ないとは思うけど。一度認めてしまったら自分でも驚くほど、何者もオレを押さえら

れなかった。

彼女以外は。

「テツ！」

また殴った！この女！何でもこう暴力的なんだ！しかもひねってるよ！パンチいてえって！

「嫌なら口で言え！ぽんぽん殴るな！」

「嫌とか、嫌じゃないとか、そうじゃないでしょうが！なんでそう、順序を守らないのよ！」

「順序なんか知るか！！嫌なのか、嫌じゃないのか！？」

何でそこで黙るんだ。

そう思っけどやっぱり、涙を浮かべたまま、真正面からオレを睨み付ける彼女の目を、オレは見る事が出来ない。

「……テツこそ、どういっつもりで」

判りきったことを聞くか？この女は！この状況で、このめんどくさい女相手に、いいかげんなこと出来るか？っの！リスクが大きすぎるって！何度言わせんだ！

って、言えてないけど。言えってか？！オレの口から？オレから！もう、彼女とこうして怒鳴り合いを始めてから何度目だろう。再び、携帯の振動がテーブルをがたがたと揺らす。でも、ここ出るのは、いくら何でも無いだろう。

これ以上、彼女を怒らせるのも、泣かせるのもオレは嫌だ。どうしていいか判らないけど、言葉は出てこないけど。

黙ったまま、オレは彼女に手を伸ばした。彼女はやっぱり逆らわなかった。簡単にオレの手の中に収まり、オレはこの手に力を込め

る。

しばらくの間……どれくらいかは判らなかったけれど、抱き合っ
たままその場に二人で立っていた。彼女から手を離し、再び彼女の
肩を抱き寄せ、ソファに座った。一度だけキスをして、身を寄せ合
ったまま、毛布にくるまって目を閉じた。

多分、オレは逃げた。彼女に、自分のことを口にするところから。
だからこれ以上何もしない。その代わり、口にしない。

もう戻れないのは判ってたつもりだったけど、まだ何とかなるん
じゃないかって思ってた。淡い期待ってヤツだ。

ずるいかも知れないけど、彼女だって何も言わなくせに、暗が
りの中、こうしてオレの隣で目を閉じてる。お互い様だと思いたい。

彼女はどうか知らないけれど、オレは結局一睡も出来ないまま、
朝を迎えた。オレが毛布を抜け出し、顔を洗いに立ち上がると、彼
女も毛布から出て、台所に向かった。お互いにずっと黙っていたか
ら判らないけれど、彼女も寝ていなかったのかも知れない。

「朝ご飯、シリアルしかないけど」

台所に戻ると、彼女は棚を漁りながら、やっと口を開いた。色気
のあるような無いような、微妙な台詞だ。

「お前がまともな食生活を送ってないのはよく判ってる。期待はし
てない」

「何それ。よくそう言うことが言えるわね」

怒るかと思ってたけど、顔が笑ってた。昨夜のことなど無かった
かのように彼女は振る舞う。だから、オレはどうしていいか判らな
い。これ以上手を伸ばしていいのか悪いのか。

『嫌とか、嫌じゃないとか、そうじゃないでしょうが！なんでそう、順序を守らないのよ！』

順序を守ればいいって風に聞こえるな。拡大解釈すると。難しいところだ。

欲張りなのか？オレは。あんなことを言っただけに、オレの隣で、オレの手の中でおとなしくしてるくせに、こうやって彼女が何もなかった振りをしていることが、オレにさらなる期待をさせる。

もしかして、彼女に手を伸ばしても、何もなくなくていいんじゃないかって。何もかもうまく行くんじゃないかって。御浜のこと、愛里のことも、彼女やオレに絡む全てのこと。

強くいれば、強い振りをしていれば、強く居続けられる。

「ティース」

「何？」

食器棚らしき場所から（そもそも食器自体、コップ以外ほとんど無かったのだが）シリアルボウルを探していた彼女は振り返り、驚いた顔をオレの目の前で見せた。

「……びつくりした」

後ろに立っていたオレに向かって、彼女はそう呟くけれど、微笑んでいた。オレは黙って彼女にキスをする。

「びつくりした」

今度は照れくさそうに笑っていた。

「何だよ、早くない？お前ら」

新島の声に、思わず彼女と離れるが、もしかしたらすっかり見られていたかも知れない。コイツなら、何食わぬ顔していそうで怖い。

「いつも通りよ」

「ウソつけ。何で見栄を張るかな？」

彼は苦笑いしながらキッチンを伺うが、何故か一向に廊下からこちらに入って来ようとしらない。

「……何だよ？」

「まあまあ、沢田」

オレを小さく手招きする。思わずティマスと顔を見合わせてしまうが、とりあえず彼の元へ向かうと、寝室に誘導される。

入った途端、黙って寝室の扉を閉められた。何だ、この展開は。気持ちが悪い。

「だから、何だよ？」

もしかして、昨夜何があったかとか聞こうとしてる？どんな過保護だ。

「あのさ、ティマスとのことなら、別に……」

「悪い！オレの勘違い！それ！」

いきなり、目の前で手を合わせ、謝られてしまった。

「……は？いや、勘違いっつか、だから、別に何も無かったとい

うか、その……」

無かったと言ったら、ウソになるけど。

「いや、無いなら、良かった。いや、オレ昨夜、お前に電話したけど出なかったからさ。てつきり行くところまで行っちゃってんのかとティアスもうっかり流されたりしてんのかと思って」

「……流される？あの女が？」

あれは、場の雰囲気流されてただけってこと？

「まあ、そう言うところもあるだろ。誰にだって。あいつ、気は強いけど、そう言うところは確かにある」

「ああ、そう」

としか言えないだろうが、そんなこと言われても。

「何が勘違いなのか、話が見えないんですけど？」

「いや、だから、ホント悪い。何か、ティアスの彼氏がこつち来てるらしいって、連絡あつてさ。面倒なことになる前に教えておこうと思っただけで」

「ちよつと待て、聞いてない！」

思わず、新島の胸ぐらを掴み怒鳴ってしまった。けれど、思い直して彼から手を離し、謝った。

10

彼氏？この女に。あの態度で。いくらなんだってずるくないか？

「何で、ちょっと怖い顔なのよ」

オレの考えてることが伝わったのか、不満そうな顔で文句を付けてきた。ティアスの隣で珈琲を飲む新島は、苦笑いをするばかりだ。コイツこそ、どういふつもりであんなことを告げたのか。タイミン
グが悪すぎる。

まあ、今さらって気もしないでもないけど。

「元々こういう顔だよ。うるせえな」

腹立たしいことこの上ないが、ここで罵るような仲じゃ無いつつ
ーのが一番痛いな。

ちくしょう。男がいるくせに、あの態度か。期待したじゃねえか。
どんな男だ。彼女がこっちに來たから追っかけてきたのか？逃げら
れてんじゃねえのか、その男は。

「そっぴやさ、ティアス。昨夜、孝多から連絡あつただけだ。お
前、連絡先教えてないの？携帯渡してから随分経つてるだろうが。
何かいろいろ困つてゐたのだぞ」

そいつか？コウタってヤツが男か？

睨み付けてしまったオレの視線に気付いたのか、ティアスも新島
も、ちよつと引いた表情を見せた。いいからお前らは反省しろ。オ
レを振り回しやがって。

「いやよ。孝多に連絡したら、兄さんにも伝わるじゃない。意味が
ないわよ。あの人、真面目すぎて間抜けなところがあるから、絶対何
かしでかすと思うのよね」

「その件に関しては、全く否定しないけどよ。大体、時差も考えず

に真夜中に電話してきて、それを突っ込んだら平謝りするような男だからな」

「うわ……孝多っばい」

目の前で知らない、しかもティアスの彼氏っぽい男の話をされるのは相当不愉快なんですけど。新島のヤツ、謝ったから良いと思ってるな。もう遅い、とっくにフラグ立ってるんだよ。

それを、新島に言うのはいやだけど。でも言わなくても、とっくにバレてるモンだと思ってたけど。

「……あ、ごめん。孝多ってね、灯路の昔からの友達でね……」

ティアスがオレの不愉快な表情に気付いたというか、どうすればいいか気付いたらしく、説明を始めた。それに乗つかるといいうか、フォローするように新島が続けて説明を始める。

「オレの幼馴染みってヤツ。お前と白神みたいな感じでお隣さんだったんだけど、親が転勤族で中学上がる前に引っ越しちゃったんだ。で、たまたま転勤先がコイツのいたベルギーの学校の側で……みたいな、なあ？」

「ご丁寧な説明ありがとよ」

「……ティアスじゃなくても怖いぞ、お前」

誰のせいだ。

あれ？しかし、話のつじつまが合わないな。新島と共通の知り合いなら、しかも出会いのきっかけがコイツなら、つき合ってたことを知らないわけがないだろうよ。別れたと思ってて、あんな思わせぶりなことをいろいろ言ってたのか？

「孝多のヤツは、相変わらず何を言ってるんだか、いまいちよく判らなかつたんだが」

「頭はいいんだけど、バカよね」

「身も蓋もないな。で、その何を言ってるか判らん孝多の言葉を拾い上げた情報によるとだな、なにやら重要な話があるからティースに連絡とってくれって」

「ふうん」

何でもない顔をしとるな、この女は。もしかして、こういう話をするつもりだったから、新島は先にオレに情報を教えてくれたのか？男が来て重要な話つつたら。

「重要？」

「うん。だから一回こっちに來るって。いつかは知らんけど。何かのついでだからとか言ってたな」

「灯路の理解力がないんじゃないの？何、その適当な話の拾い方」

全くだな。とりあえず、しばらく黙って様子を伺っていよう。珈琲でも飲みながら。

新島がちらつと、オレに視線をくれる。それって、どんな氣遣い？

「で、なんだったかな。蓮野……何つつたかな」

多分、そのハスやってヤツなんだ。新島が言っていたのは。ティースの表情が、「コウタ」って奴の話の時とはまるで違っていた。新島も、ちらちらとオレの方ばかり見ているし。

「蓮野遼平でしょ？」

「そうそう。そいつ。そいつのことでどうとか」

「死んだんじゃない？だから孝多のヤツ、知らせに來たのよ」

「……は？」

言葉が出なかった。新島も知らなかったんだろう。固まった表情のまま、オレと彼女を交互に見つめた。

何だ、状況が判らん。

おそらく察するに、新島の言う「ティアスの彼氏」って言うのは、その「ハスヤリヨウヘイ」って男なんだろう。それは彼女のあからさまな態度の変化でも明らかだ。だけど、「彼氏」という割には、彼の死を告げに来たであろう男が来るのにあつさりしているし、そもそもそんな状況の男がいながら、置いてきたってことだろうか。

「ティアス……お前、案外冷たいな」

オレも思ったことを、新島は簡単に口にした。そう言いたかったけれど、オレの立場でそれを彼女に言うのは憚られたし、何より、言いたくなかった。

「え？」

「だって、孝多の話じゃ、その蓮野って男と……」

「雨に唄えば」の着信音が鳴り響く。ティアスが無言で新島のポケットを指さし、彼は渋々携帯をとった。

「もしもし？孝多かよ。時差考えろっつーの！って、朝だからいいけど」

「『彼氏』って聞いた」

「うわ、待て沢田……いやいや、こつちのこと」

あつさり、オレがそう口にしたことで慌てたのは他でもない電話

中の新島だった。オレは無視して、真正面から彼女を見つめた。

よく考えたら、別に他意のない話じゃないか。彼女を責める資格はないけど、聞くくらいならいいんじゃない？と思っただけだ。

「彼氏じゃないよ？別に」

「わざわざ死んだことを知らせるために来るような相手なの？」

「端から見たら、そう見えてたのかも知れないけど」

そう言うの、つき合ってるって言うと思うけど。ああでも、言いたくないそんなこと。

彼女は少しだけ怒ってるような顔を見せた。その様子が、余計にオレを苛立たせているとも知らずに。

「何で、『死んだ』って判るの？」

「あの人、病気だったの。まだ29で若かったんだけど、ずっと療養してたのよ。長くないって言われてたから」

「何でそんなにあっさり言えるんだ？そう言うこと」

「だって、そう約束したの、リヨウと」

なんじゃそりゃ！約束したからってこと？いろんな意味にとれるぞ？それ！

ホントはすごく悲しいけど、彼と約束したからそう振る舞ってるのか。

口約束程度で簡単に彼の死を突き放せるほど、どうでも良いってことなのか。

どっちでもいいやだ。

「……わかった。ティアス、喧嘩腰の所、悪いけど」

「喧嘩腰じゃないわよ。テツが、私のこと責めるんだもん」

「別に責めてないだろうが。ちょっと冷たくないか？って思っただけだ」

違う。冷たいとか冷たくないとか、本当は多分どうでもいいんだ。少しだけシヨックではあったけど。そんなことより、その「リヨウ」なんて呼ぶ仲の男と、今でも続いているのかどうかって話だ。死んだのかも知れないけど。それはそれで、彼女の心にいるのかどうかって方が大事なんだ。

そう考えるオレは、どうしようもなく冷たかった。彼女を冷たいとか冷たくないとか、言う資格なんてホントはなかった。同じように、彼女を挟めば嫉妬の対象として見てしまう御浜には、そんなことは絶対思わないはずなのに、自分と関わっていない人間に対しては何でこんなに残酷な気持ちでいられるのか。

御浜との関係も、ティースとの関係も、どっちも手に入れたいと願うくせに。どっちともうまくやっていきたいと願うくせに。そのために、ずるく天秤のバランスをとろうと、昨夜決めてしまったくせに。見ず知らずの蓮野って男には、彼女の心から消え去って欲しいと願っている。

「待て待て。お前ら、普通に痴話喧嘩してるじゃねえか。なんなんだ一体」

「痴話喧嘩って！そんなんじゃないわよ」

オレに同意を求めるな、へこむわ！

思わず彼女から目を逸らしたら、彼女は怪訝そうな顔をしていた。

「それより、孝多がもうセントレアついてるって。あと1時間くらいでこっちに着くってよ」

「何それ、昨日の電話って……」

「トランジットで降りた空港からしてたって」

いやだ。昨夜の葛藤は何だったんだ。愛里のことも、御浜のことも、彼女との関係も、何も解決しないまま、何も決められないまま、余計な荷物ばかりが増えていく。

ティアスのことを好きだと思っ気持ちと、愛里に執着し続ける思い。

彼女を自分のものにしたいという欲望と、御浜に対する遠慮と彼との関係の維持を望む心。

未だにそれは拭い切れていないけれど、どちらをとるかなんて選べないけれど、それでも、彼女に一步踏み出そうとしていたところなのに。

『びつくりした』

彼女も、オレのことを受け入れてくれそうだったのに。なんだこの展開。彼氏じゃないって言われたって、それ以上に面倒だろうが。

「テツ、どこに行くの？」

立ち上がり、玄関に向かうオレを彼女が追いかけてきた。何故か、新島は一緒じゃなかったけど。

「……帰る」

別に帰りたくはないんだけど。むしろ、オヤジとは顔もあわせたくないし。御浜にも会わせる顔がないし。

「待つて、一緒に来て」

「なんで?!」

「ホントにリヨウが死んだんなら……」

初めて、彼女は少しだけ悲しい顔をして見せた。それが、オレには辛い。

「死んだんじゃない? って言ったのはお前だろうが」

「でも、もしかしたら違う話かも。だけど、ホントにそうだったら」

俯く彼女の思いが、さすがに伝わった。

「テツに、……いて欲しいよ」

「新島でいいだろうが?」

俯いたまま、彼女は首を横に振った。

またオレは、彼女に期待してしまう。新島が玄関の方に来ないことを確認して、彼女の頬に自分の頬をすり寄せた。赤くなっていたのか、彼女の頬が熱くて、思わず笑ってしまった。

「もう一回、はっきりと言えたら、一緒にいてやるよ」

「テツ!」

まさに鬼の形相で、オレを怒鳴りつけた彼女に、軽くキスをする、と、驚くほどあっさりおとなしくなった。その様子が、オレの心を簡単に解きほぐす。ずるいな、とは思っただけ。

「ずるいよ。何でそう言うことできるの?」

「お前もな。そんな男がいて、何で昨夜の態度かな? だけど」

彼女は再び黙ってしまった。オレ達は多分、いろんな意味でお互い様なんだろう。

「1人で聞けないって言うなら、仕方ないから一緒にいてやるよ」

お互い様だと思っているのはオレだけで、冷たいのもずるいのも、本当はオレだけでも知れない。

不安を抱く彼女につけこんで、触れられる部分を全て合わせるように、力一杯抱きしめた。

第3話 (the heads) エピローグ

11

ティアスの願いで、新島はオレと彼女を部屋に置いて芹孝多という男を迎えに駅に向かった。オレ達は昨夜と同様、リビングのソファに横に並び身を寄せ合った。

こうしてるとつき合ってるような気もするんだが、言えないし、言える状況じゃない自分かもどかしかった。

彼女の腰に手をまわし、もう一方の手で頭を撫でる。

「孝多の話がリヨウのことだったら、沢田先生や賢木先生にも伝えて欲しいの」

「オヤジに？」

いま、あんまり会いたくないんですけど。つか、何か外に出るといろいろめんどくさそうだから、ティアスの隣にだけいたいんですけど。

さすがに、そう言うわけには行かないけれど。

「うん。沢田先生達と随分仲が良かったって言ってたんだけど、病気のことが判ってから、わざと距離をとってたみたいだね。音無だけは時々会いに来てたみたいだけど」

音無さんは呼び捨てか。結局、コイツは何しに来たんだろうな、こっちに。オヤジの話しぶりからすると、音無さんに関係してるっぽいけど。連絡があつた、なんて伝えるくらいだし。

今はそんな話を聞ける状況ではないけれど。

「ふうん。その仲のよい友人とも距離をとるような男と、お前は近かったわけだ」

「だから、何でそう言うこと……」

「どんな男なの、そいつは」

「いいじゃない、別に」

ふてくされてみせるくせに、彼女はオレに体を預けたままだった。何か、関係がはっきりしてないけど、これはこれで良いような気もしている。それじゃ納得いかないような、責任が無くて楽なような逃げ道が用意されてるその感覚が、気楽でもあり、不安でもあった。

「聞きたい」

「……御浜……」

聞きたくなかったかも。何でそこで、その名前が出てくるかな。

「御浜みたいな男ってこと？ご近所の王子様か。30近いくせに」

「まあ、病院内ではそんな感じだったかしら。優しく、綺麗で、穏やかで、真っ直ぐで」

「表向き、御浜っばいな」

気にしてない口振りをして見せたけど、思わず彼女の腰に回した手に力が入る。

「でも、ちょっと内に籠もるといふか……暗い部分もあって」

「ああ、そう。そこが嫌いじゃなかったと」

彼女は黙ってしまった。せめて何か言ってくれ。肯定のサイン以外の何モノでもないじゃないか。

「要は、元彼ってこと?。」

「だから、つき合ってもないって。そう言うのじゃなくて。」

そう言うのじゃないと言うくせに、どうしてそんな含んだ言い方なのか。

「違うよ。テツが気にするようなことじゃない」

「ああ、そう」

「だって、ホントは何も見たくないんでしょ?。」

「そうだな」

見透かされてる。少しだけ、ぞつとする感覚を覚えた。オレがいろんなモノから逃げてることを、確かに少しずつ伝えはしたけれど、そう言う言い方をされると少しだけ怖い。

「私も、見たくないものはもう見ずにいたいんだ」

「え?。」

呼び鈴の音が鳴り響いたので、急いでオレ達は距離をとる。彼女は立ち上がり、玄関に向かった。

彼女の言葉の意味を、どうとっていいか迷っていたから、無粋だとは思ったけれど、少しだけ安心もした。

「沢田。紹介するよ。コイツがさっき言ってた芹孝多。2個上であつちの大学に通ってる」

……年上なんだ。

ソファから立ち上がり、紹介された、どう見ても自分と同じかそれより下にしか見えない男に会釈をした。穏やかそうな、悪く言えばちょっとぼんやりしてそうな、天然ボケっぽい男だった。よく言

えば無邪気な笑顔が印象的だった。ただ、新島と並んでいても、明らかに新島の方が年上に見えてしまう。

「芹です。よろしく。さつき少し、灯路から話を聞いたので。沢田先生の息子さんだつて。こんな大きな息子さんがいるなんて驚いたけど、沢田先生の話は蓮野さんからよく聞いてたので」

オヤジの話に、オレはどうしても、うまく笑顔が作れなかった。そんな、オレの知らないこと言われても、正直困る。

彼らの後ろから戻ってきたティアスは、再びオレの隣に立った。何故かその行為に、オレは妙な緊張感が緩んだような感覚を覚えていた。

「テツは、あんまりそう言う話は聞いてないと思うよ？ 沢田先生つて、そう言う話はしなさそうだったもの。元々、リヨウのお兄さんと仲良かったんでしょ？ 賢木先生とか」

ちらつと、オレの様子を伺いながら、彼女は説明をしてくれた。その話の方が、納得できる。オヤジより賢木先生や音無さんの方が年上だけど、大学の友達と言われたら何とか関わっていてもおかしくない年齢だ。だけど、ハスヤリヨウヘイという男は、ティアスと何かあったってことが生々しすぎるくらい、簡単に想像できる程度に若い。

「……灯路」

「何だよ。何でそんなちよつとおどおどした顔なんだよ。気持ち悪い」

この芹って人は、ホントに新島と仲が良いんだろうな。新島は元々、丁寧な男ではないけれど、ここまで他人に対して突っ込んでい

くような男でもないから。距離感を適切にとれる男が、久しぶりの男にここまで近付いているのは、何だかほえましかった。

「沢田さんとティアスって、つき合ってる？もしかして」

「……そこ、突っ込んだじゃダメなことだから、多分。黙ってる。つか、口にするな、思ったとしても」

本当だよ。そこで全否定することも肯定することも出来ねえぞ、いまのオレには。ティアスに全否定されても、いやだけど。

「孝多は黙っててよ」

「でも、蓮野さんは……」

「関係ないでしょうが。もう、孝多はリヨウの肩を持ち過ぎよ！一体何しに来たのよ！」

否定も肯定もしなかったが、彼女が芹さんから余計な言葉を出させないようにしていることは手に取るように判った。彼女が、わざと彼を怒鳴ったことで。

「まあまあ……孝多のことだし、許してやれば？落ち着けて、座れよ。立ってるからヒステリックになるんだ。孝多も、何か喋る前にオレに言え」

芹さんもティアスも、新島にかかったら酷い扱いだな。ホントに年上か？と言うか、この3人の中で、新島が一番年下だって言うのが信じられん。

「沢田くん、苦笑いしてるよ」

「するしかねえだろ、そりゃ！オレだってするわ！」

頭痛いなあ、もう……。うつかり笑うことも出来ん。

まるでオレがするように、隣に立つ彼女がオレの背中に触れる。その行動に促され、彼女と一緒にソファに座った。芹さんは、半ば強制的に新島に命じられるようにして床のクッションに座る。その様子を確認してから、新島が革張りのソファのアームに腰掛けた。言い出しにくそうに、ティラスを見つめる芹さんの様子に、彼女は大きく溜息をついた。

「リヨウが、死んだんでしょ？」

彼は黙って頷く。彼女のことを思いやって、と言うよりは、芹さん自身が彼の死に対して酷くショックを受けているように見えた。実際、さっきの彼女の話からすると、そうなのかも知れない。

『でも、蓮野さんは……』

だとすると、彼のあの台詞はどういう意味だったんだろう。オレとティラスが付き合ってたとしたら、ハスヤリヨウヘイがどうだと言った。蓮野がティラスの彼氏って言う情報が新島の所に届いたのは、確実に芹さん経由だ。だけど、ティラスはあの調子だし、蓮野はもう死んでいる。

死んだ男のことを気にする必要なんか無いはずなのに、いろんな人の思いが絡みついて、唯一確認したいはずのティラスの本音が見えにくい。

彼女の心に、彼の存在がこびりついていなければ、彼の死が彼女の心に余計な影響を与えなければ。オレの知らない男なんてどうだっていいのに。

「いつ？」

「昨日、葬儀が終わった」

終わってすぐに、こっちに来たってことか。もっと落ち着いてからでもいいだろうに。

こんな冷たいことを考えてるのはオレだけかも知れない。新島もティアスも、彼の言葉を静かに、真剣な面持ちで聞いていた。怖いくらいに。

「お兄さんは……ティアスには知らせなくていいって。蓮野さんも望んでないしって」

新島が俯いた。彼の元には、何度かティアスの兄から連絡があったはずだ。オレも聞いているし。そのことを思っているんだろう。

「それで、これ。あの、預かってて。蓮野さんから。……ごめん、オレ、どうしていいか判らなくて」

芹さんが体を浮かせ、ティアスに手紙を差し出した。彼女はそれを受け取ると、少しだけオレの方に体を近付けた。

「あとで読むよ。孝多にはちゃんと教えるから」

芹さんはゆっくりと首を横に振った。

「いいんだ。オレももらったし。オレはちゃんと看取ったから。だけど」

ちらっと、オレを見つめた。その視線が少しだけ怖かった。悪意は感じられなかったけれど、彼の何か秘めた思いのようなモノを感じて。

あの後、芹さんは随分疲れていたらしく、新島と話をしたあと眠ってしまった。仕方ないといった顔で新島が彼をベッドに運んだ。「時差もあるしな」と苦笑い混じりに言って。

オレもティアスも、黙っていた。新島のフロアにも、芹さんの無言の圧力にも。

新島はその後、キッチンで電話を掛けていた。最初はどうか母親に。2回目は話し方から察するに佐伯さんだった。

込み入った内容になってきたのか、彼は携帯を片手にキッチンから客間へと移動していった。おそらく、リビングにいるオレ達に聞かれなくなかったのだろう。

「責められるの、判ってたんだ」

新島が立ち去った後、彼女はゆっくりと口を開いた。また少しだけオレに近付き、彼女の右手とオレの左手を重ね合わせた。

「孝多は、リヨウに心酔してたの。すごく憧れていたの。だから、孝多の世界は、リヨウを中心にまわってるの」

「だから、責められる？」

彼女は黙って頷いた。明確に言葉にしてはいけないような気がしていた。

要するに蓮野がいながら、オレとつき合ってるようなティアスを、死の淵にいた蓮野からティアスを奪ったオレを、彼は責めていた。事実はそのではないにしても。いろんなことが、少しずつずれて、誤解が絡み合っているけれど、それを説明も出来なかったし、しなくなかった。はっきりさせたら、多分オレは彼女の隣にいられない自身の心と、周囲が許さない。いろんなことをずるいまま、隠しながら、だけど彼女が欲しいのだと。こうして身を寄せ合っているこの状況を逃したくない。

「心酔って、すごいな。体育会系だな。でも、まあ、御浜みたいだ

って言ってた理由、少しだけ判った」

御浜にもそう言う、何か人を惹き付けるモノがある。判らないんだけど、大きな力みたいなモノを持つてる。全ての人に伝わらなくても、数少なくても、人を心から動かす何かを。

「責められても仕方ないんだ。だって、応えられないのはどうしようもないし。私が中途半端だから」

「応えられないって言うのは……。やっぱり、そう言う話にはなってたわけね。彼女は否定したくせに。だけど、応えてはいないってことか？なのに、応えられないと言いながら、どうして芹さんはあの態度で、ティアスもこの態度なんだ？」

「テツ、ピアノ弾いて？歌うから」

肩越しに、上目遣いでオレを見つめる。

「え？……いや、その……」

人前で今弾くのは……。だって、弾けなかったら困ると言うに。指が動かないかも知れないのに。確かに、こいつの前では動いたけど。正直、自信がない。

「こないだの。子守歌」

「弾くって言ってないだろうが！」

「良いじゃない。誰も聞いてないよ。私だけ」

「は？」

「私だけのために、弾いて？」

もしかして、甘えてる？そんなに可愛い顔されても困るんですけど。

ただ、甘えてはいいたけれど、彼女が泣きそうな顔をしているのも判った。真っ直ぐ顔を見たことで。

甘える程度に、彼女は辛いつてことくらい、知ってる。気付きたくはなかったけど。

今この状況で、不謹慎かも知れないとは思ったけれど。けど、オレは彼女に軽くキスをしてから立ち上がり、彼女の手を引いて、リビングの隅に置いてあるアップライトピアノに向かった。

「ちょっと待て、指ならししてから」

横に立つ彼女にそう告げると、素直に頷いた。

多分、大丈夫。弾けるはず。

ゆっくりと練習曲を奏でる。思っていたよりすんなり指は動いた。いつも通りだった。

逆に、何で1人になると弾けなくなるんだろう。

「テツ、何か必死だね」

この女は…… またずけずけとそう言うことを。

ちくしょう、判ってるよ。凶星刺されてるから、腹が立つってこ
とくらい。

「別に？」

「あんまり、楽しそうじゃない。せつかく、綺麗なのに」

「……綺麗？」

「うん、テツのピアノ、綺麗よ。もったいない」

誉めといて、けなすか？でも、佐伯さんとの話から、コイツがオ
レのピアノを誉めてたのはホントっぽいしな。

「好きよ」

「は？」

突然、何を言うかこの女は！オレが言えないで黙ってたことを簡
単に！てか、告られてるし、これって。

思わず、指も止まるって。

「テツのピアノ」

「……ああ、そう」

うん。いや、そう言うオチ？判ってたけど。1人でおたおたして
みつともない。まあ、実際好きとか嫌いとか言われても、それはそ
れで困るけど。嬉しいって言うのとは別にして。

「だから、もったいないよ。そんなにつまらなさそうに弾くの。つ
まらなく聞こえるから」

「お前が、楽しくしてくれるんだろ？その実力、今こそ見せてもら
おうじゃないの？」

彼女はやつと笑った。オレのピアノに合わせて、歌い始める。オレは勝手に弾いているんだけど、彼女は合わせてくれていた。合わせてくれていたはずの彼女の音に、今度はオレも引き上げられる。

音の重なりが、体の芯に響く。その感覚が異常なほど気持ちよかった。

オレだけでも知れないと、ちらつと彼女を見たら、彼女は泣いていた。歌いながら。

夕方ごろ、仕方なく家に戻ったら御浜と秀二がキッチンに居座っていた。この家の人間は一体何をしてるんだと突っ込みたかったが、それに加担してるのはオレなのでやめておいた。

「オヤジと柚乃は？お前ら、いつから居座ってる？しかも秀二がいるのに、飯もねえのか」

「冷蔵庫に入ってますよ。先輩はさっきちらつと顔を出して、私に留守を任せていきました。あそこの研究室、今は相当忙しいらしいですからね。その後、御浜が来たんですよ。柚乃はさっき出かけました。友達と約束があるとかで」

家にはいなかったんだ。どうしても秀二の言葉に返事が出来ず、黙って椅子に座ると、見かねて補足してくれた。

「心配はしてましたけど、何も言ってますでしたよ？ただ、誰の家に泊まるかくらいは言った方がいいかも知れませんか」

「新島の家だよ」

「オレ、結構連絡したのにな」

責めるわけでもなく、ぼやくようにそう言う御浜。

「お前はオレの保護者か。たまたま出られなかったただだよ。オヤジよりお前が心配してどうする。別に、電話に出ないのなんかいっものことじゃねえか」

「そうだね。たまたま、ちょっと心配だっただけで」

「なんだそれ」

「何となくだよ。理由とか、よく判んないし」

どこまでオレのことを疑ってるのか、感づいているのか。どう思ってるのか、掴みきれなかった。ただ、妙な威圧感を持つてるんだ、コイツは。

ただそれ以上に、彼に対して後ろ暗い気持ちでいたくないんだけれど。

『孝多は、リヨウに心酔してたの。すごく憧れていたの。だから、孝多の世界は、リヨウを中心にまわってるの』

そこまでじゃなくても、オレの世界の中心には御浜がいるような気がしてならない。憧れてるわけでも、心酔してるわけでもないけど。ただ、芹さんがオレを見たあの目で、オレはオレ自身を見ている。御浜から彼女を奪おうとしている自分自身を。奪うわけでも、奪いたいわけでもないけれど。

「ティアスからも、連絡無かった？」

「……御浜が心配してるって言ってた」

どうやってかわして良いか判らなかったけど、何もなかったとい

うのは無理がある気がした。彼女とは、そう言う意味での御浜の話は出来なかった。

だけど、御浜とティアスって一体どこまで、どんな話をしてるんだろう。

勝手にしろって思いながら、裏切りたくないお願いながら、けど彼女が欲しいと自覚してしまった今、彼らの間の出来事が気になる理由も明確になって、肥大化して、オレを押しつぶしていた。

『刺されてはいないみたいだけど……刺したつもりだよ』

本当は、全て知ってるのかも知れない、御浜は。だとしても、自分オレは驚かない。心は重くなるだろうけど。

「お前、ハスヤリヨウヘイって、知ってる？」

怖かったけれど、いま立っている場所を、オレは確認しておきたかった。彼女と、オレと、御浜。それからこの死んだ男。距離感を秀二がいるから、御浜と二人だけじゃなかったから、少し安心してたのもある。これが真だったら、とてもじゃないけどこんな大胆な台詞は出てこない。

「？ティアスから聞いたことある」

やっぱ、そうなんだ。予想はしてたけど、辛かった。彼女がどういうつもりか、掴みきれない。もしかしたら、愛里に振り回されているときより酷いかも知れない。何でオレってこういう女ばかり選んでしまうんだろう。やっぱ真の言う通りDMなのか？

「どんな人が聞いたことある？」

秀二は黙って煙草を噴かしながら、オレと御浜を交互に眺めていた。御浜は真正面に座るオレを、ただ真っ直ぐに見ていたけど。

「うん。賢木先生と知り合ったのは、その人の仲介らしいよ？いま、日本で佐伯さんがバックアップしてくれてるように、向こうでは彼がしてくれてたって」

やっぱりな。

そう思うしかなかった。オレが彼女のことを話題に出さないから聞きたくなかったから。聞こうとしても止めてたから、御浜は言わなかっただけで。予想以上に彼は彼女からいろんな話を聞いていた。予想はしてたけど。その内容は鋭い針のようにオレを突き刺した。いや、知ってるものだとし、口にしなかったただけかも知れないけど。

彼女とオレは連絡を取っていても、オレが怖がつて踏み込んでなかった。それを思い知らされる。

「御浜のこと、ちょっと似てるって言ってた」

「この子に似てるんじゃ、相当天然ですね」

「何だよ、秀二は人のこと言えないし。でも、言われたよ？オレを見てると、ちょっと思い出すって。今は入院してるって聞いた」

オレが初めて知ったことを、彼はよく知っていた。オレには誤魔化しながら話したくせに。

「今朝、芹孝多って人が来た……らしいんだけど」

一緒にいたとは言えない。それは、言っちゃダメだ。

「うん？その人も聞いたことある。向こうにいたんじゃ？」

「蓮野って人が死んだのを、伝えに来たって」

「そうなんだ……。泣いてた？ ティアス？」

「いや」

泣いてたけど。

「きつと泣いてるよ。大事な人だったみたいだから。……そっか。大変なときに連絡しちゃったな」

申し訳なさそうな顔をする御浜は、泣いているであろう彼女を思う。

なんだかやりきれなかった。

御浜と彼女の距離も、蓮野と彼女の距離も、オレと彼女の距離なんかよりずっとずっと近くて。それを、今、御浜に思い知らされて。オレにだけ誤魔化す彼女に、怒りをぶつけてる自分が惨めだった。

第4話 (the heads) 前編

01

いろんなことがありすぎて、全然寝てないのに目がさえてしまっていた。だけど体がだるくて、リビングのピアノの前でぼんやりしていた。もう夜中になって、秀二と御浜は帰ったあとだったけれど。

秀二に確認したら、オヤジは普通に東京出張に行っていたらしい。それに安心して電話で彼にも確認をした。愛里の前に現れたのは、伯母さんに頼まれたからだということ。

愛里も意外となりふり構わずオヤジを追いかけているんだと思うと、少しおかしかった。

彼女への思いは、以前と同じように抱いているのに、おかしいなんて思える自分がいることが不思議だった。執着し続けていることは事実なのに。

「テツちゃん、まだ起きてたの？」

夜が明け始めたころ、柚乃が帰ってきた。リビングの電気がついて、いることを不審に思って覗きにきたのだろう。扉を開け、声を掛けてきた。

「……今から寝ようと思った。オヤジがいらないと思って、また朝帰りかよ」

「テツちゃんなんて、パパがいても朝帰りじゃない。パパそっくり」

「……お前ってさ」

自分の中に、何も見つけられなかった。いろんなモノ抱えすぎて、

わけが判らなかつた。答えが出なかつたし、出したくなかつた。だけど、他のヤツが何を抱えてるか、気になった。

「なんで、御浜のこと追っかけてんのに、そうやってふらふら遊びに出かけるかね？男もいるんだろ、どうせ」

「テツちゃん、下世話ー」

「たまにまじめに聞いてんだから、応えろよ」

寝てないオレの目つきが怖かつたのか、柚乃は言葉を詰まらせた。だけど、扉からリビングに入るうとはしなかつた。

「らしくないよ？そう言うこと、見ないフリする人だと思つてた」

うちの妹は、やっぱり手厳しい。そんな風に思つてたわけね。

「まあ、面倒だけど。参考までに」

「何よ、参考つて。何かあつた？」

「別に、良いから」

しつこいな、とぼやきながらも、彼女はちよつとだけ怒つたような口調で応えた。

「どうしようもないことつて、あるでしょ？御浜さんて、ティアスのこと好きだし。そうだとは言わないけど。だからつて、簡単にあきらめることも出来ないし。だけど、それだけだと私、ティアスのこと恨んじやうからさ。あの人自身は嫌いじゃないのに。どうしようもないのよ」

「だから遊ぶんだ？」

「暗くなるのがいやなだけ。何もかも、綺麗にその通り、次から次へと切り替えられたら、楽チンだと思うけど、出来ないんだもん、

仕方ないじゃない。そう言う強い人、私はむかつくな？誤魔化して何が悪いの？」

「開き直りか？」

「うん。でも、御浜さんなら許してくれる気がする」

それは、やっぱり端から聞いていても、御浜という人間に甘えている気がする。でも、彼女はそれで良いじゃないかという。

「例えば、オレが同じコトをしていたとしたら？」

「仕方ないんじゃない？」

ずるい気もするけど、納得できてしまったのは、自分に甘いからだろう。オレも、彼女も。

少しだけ眠ろうと思った。眠ったら、また彼女に連絡しよう。

愛里がいなかったのもあったかもしれない。

結局クリスマスのあの日以来、彼女はいつものようにどこかへ旅立ったらしい。オヤジが伯母さんからそう聞いていたようだ。冬休みの間、彼女とは連絡を取ることもないのだろう。現実の彼女を目にすることはなかった。

おそらく、だからなんだろう。自分でも驚くくらい、自分の中でティラスとの距離が縮まっていくのを自覚していた。ただ、あくまでもオレの中でだけなのだけれど。

オレの中でだけ済ませたくなくて、自分でも驚くくらい、必死に彼女と連絡を取った。いままでも、ほぼ毎日連絡だけはとっていたけれど、なるべく会うようにした。

お互いに言葉にはしなかった。だけど、縮んでいく距離がオレの

錯覚だとは思えなかった。彼女が隣にいることに、違和感がなかった。

ただ御浜の前で、彼女と一緒にいることだけが辛かった。辛いつて判ってるくせに、そのことに困ってるくせに、それでも彼女への連絡をやめるところか増やしていく。そんな自分のことを罵る自分があるくせに、もうどうしようもない自分がいるのも辛かった。

ティアスもまた、御浜とは距離が近い。彼の距離の取り方なら当然の結果だろう。真がさりげなく、御浜の背中を押しているのも知ってる。

だけど、誰かと誰かの関係とか、思惑とか、そんなものより、自分の中が遥かにぐちゃぐちゃだった。

新学期が始まり、休みが違ってから帰ってこないと判っているのに、いつものようにいつものスタバの喫煙席で、彼女を待ち続けている自分自身がよく判らなかった。

「テツ、何してるの？今日はレッスンなの？」

当たり前のようにオレの隣に座ったのはティアスだった。あからさまに驚いた顔を見せてしまったけど……。

「なによ、嫌そうな顔」

「いや、別にそう言うわけじゃ……」

「佐藤さんとの仲なんて、邪魔しないわよ」

なんだそれ。嫉妬か？よもや。むっとした顔で立ち去ろうとするティアスの腰を掴み、引き留め、座り直させた。

「何でそう喧嘩腰だ、お前は。早とちりだし」

「だって」

「驚いただけだろうが。お前、こんな所に来るなんて珍しいから」

体に触れたことになのか、オレの言葉になのか、彼女は照れた顔を見せながら上目遣いでオレを見つめた。

「大学はまだ休みだから、愛里はそれまで帰ってこないし。つーか、連絡すらねえ。無責任だ」

「先生なのにな」

椅子を寄せたら、ステンレスの足が床に引っかけた大きな音が立った。それが少しだけ恥ずかしかったが、テーブルを見つめながら彼女と膝をつき合わせた。彼女もその行為に微かに笑みを浮かべた。それに少しだけ満たされる。

「ここにいてのは何というか……日課っつーか……。うちにいると、大抵誰かいて集中できないから」

「ここだって、佐藤さんが来るのに」

「まあ、待たされるからな、いつも。そのつもりで来てるし」

「何してんの？ 待ってる間」

「大抵、楽譜読んでる」

照れくさそうな顔を見せるくせに、彼女はオレをじっと見つめる。そのくせ、こちらから見つめ返すと目を逸らす。

もちろん、今日もだった。見つめたくせに、それに気付いたオレが彼女を見ると、急いで目を逸らす。

「邪魔しちゃったかな？」

「別に。御浜や真や新島だって、オレが大抵ここにいてのを知ってるから、たまに来るし……」

「酷い！ 裏切り者！！ 沢田だけは違っつて信じてたのに！」

「……相原とか……意味わかんねえし」

オレ達の向かいに、いつの間にか相原が座って、叫ぶように文句を言っていた。突然責められても、本気で意味が判らん。

「傷心のオレをほつといて、いつの間にかこんなに可愛い彼女が！」

思わず、ティアスを見る。端から見たら可愛い彼女が……。相原が来たつつーのに、オレも彼女も距離をとろうともしないし、誤解されてもおかしくない。むしろ、なし崩し的にこのままつき合つて言つのも有りなのでは。

いろいろ面倒だけど。

「彼女？」

「いや、つき合つてんでしょ？君ら？」

「え？違いますよ」

あっさり否定か！この女！！

「沢田、紹介して！つき合つてないなら！」

そしてこの男も！なんだその変わり身。ティアスがオレの女じゃないと判つた途端、射程範囲に入れやがって。

わからんでもないけど。今までの相原の傾向からして、ティアスってど真ん中だしな。しかも、イブにふられたばっからしいし……。不愉快だけど、紹介しないわけにもいかねえか。簡単に否定されてるしな……。

「相原勇十です。沢田のクラスメイトで……」

紹介する必要ねえし。勝手に始めちゃってるし。アグレッシブだ

な（女子に関してのみ）。

「だったら、灯路とも一緒ってこと？」

相原が話してんのに、オレに確認をするティースに、仕方なく頷いてみせる。どういうつもりなんだ、この女は。確かに、オレに同じコトを突っ込まれても、肯定も否定も出来ないし、したくないけど。

「とーじ？ああ、なに？新島も知り合いなの？」

「新島だけじゃなく、真も知ってるし。つーか元々、新島経由で知り合ってたよ。新島の従姉妹なんだと。ちなみに、こんなナリしてるけど、オレらのイッコ上ね、コイツ」

顔も見ずに、指をさしたら、さすがに怒り出した。

「こんなって何よ！」

相原の前にも関わらず、彼女は怒鳴り、オレだけを見ている。

「見たまんまだろ？童顔っつーか。初めて見たとき、絶対年下だと思ってたし」

「自分は老けてるくせに」

「うるせえな。良いんだよ。オレは年を取ったら若く見えることが、オヤジで実証されてるから」

「判んないわよ？案外、年を取ったら、先生とは違う顔になるかも」
「沢田ー紹介してー！」

だだをこねたような顔でオレ達に訴える相原を、さすがに無視できなくて彼女を紹介する。と言っても、名前だけだけ。

「良く来るの?ここに」

行動範囲の調査か。結構突っ込んでくるな、相原は。

そっぴゃ、何でティアスはここに来たんだけ? いることを知らなかったオレに会いに来たとも思えないし。そもそも、会いに来るなら先に連絡してくるし。

「うん。今日はたまたま。下見に来ただけ。でも、これから来ようかな」

相原を見ながら微笑む彼女は、テーブルの下でこっそり、オレの膝に手を重ねた。

02

「下見って?」

相原の質問責めは続く。オレが聞かずにすんでるから、実はありがたかったりするけど。興味なさそうな顔をしながらも、聞くことはきっちり聞いとかなとな。

「今度、ここで歌うの。だから、その下見」

「それ、昼か?」

「うん。夜だけど。でも、7時くらいかな」

そりゃ良かった。こんな所で、そんなチャンスをもらってるなんて愛里が知ったら、またいちゃもんつけかねん。佐伯佳奈子がバツクにいる話や、音無悠佳とも何かありそうな話なんか絶対出来ねえ

な。

まあ、する事もないだろうけど。

「歌う？歌手？アイドルとか？」

アイドルで……。確かに、顔は相当可愛いけど。でも、それを聞きながら珈琲飲むのはちょっと勘弁かも……。

「違うよ。ジャズなの。この間、紹介してもらったジャズピアノストの人が、ミニライブをするから、一曲だけゲストで私も出るの」

ジャズか……。音無さんと佐伯さん、どっち経由かな？いや、そもそも音無さんと連絡はとってるのか？ほとんど話を聞かないけど、間を取り持ってくれるのは賢木先生なのか、それとも投げられっぱなしなのか。オレはオレで、オヤジに聞くことも出来ないけど。

そう言えば、佐伯さんはオレとティースと一緒に舞台に立つことを推してたな。正直、そんなすごいこと出来るとは思えないけど、ちよつとだけ懂れるかな。簡単に舞台に立つ彼女を見てると。

オレも、なんだかんだ言っ、コイツに嫉妬してるのかもしれない。

思わず、オレの膝に乗せられた彼女の手を強く握ってしまった。微かに彼女の顔が歪んだけれど、何食わぬ顔を続けた。

「ジャズ以外も、何度かライブやってるよな」

彼女の方を向いてそう言ったら、何故か顔を赤らめ、黙って頷いた。

「えー何だよ。沢田は見てんのかよ。誘えよな」

「新島に言えよ。オレはたまたまだったの」

「今度やるときはオレも呼んで。絶対見に行くから。ここでやるのもさ。どうせ沢田は平日はレッスンとか言ってつき合い悪いしさ。携帯、教えてよ」

軽いなあ……。早いよ、番号聞くの。ティアスも教えちゃってるし。アグレッシブと言うか何というか。

「陽向さん、依藤さんいらしてますよ」

「あ、ありがとうございます。テツ、私ちょっと行って来るね」

店長に呼ばれ、立ち上がる。一瞬、オレに手を伸ばしかけたが、やめて店内に入ってしまった。

「ヒナタ？あの子、ティアスじゃないの？」

「陽向は日本での名字だってよ。何か説明聞いたけど、よく判らん何たってたかな。パスポートを見せてもらったんだけど、『陽向ティアスるい』とか何とか書いてあった気がする。本人がティアスだっつってんだから、それで良くない？」

「ふうん。日本人っぽい顔だと思ったんだけど……」

「その辺、あんまり詳しく聞いてない。新島に聞けば？オレはよく知らん」

「そうなんだ。てっきりつき合ってたのかと」

「さっき全否定してたろうが、あの女が」

しつこいな。あんまり突っ込むなよ、面倒なこと。

「そんな風に見えなかったけど。でも、良いねあの子。オレ、ああいう子、好みだな。佐藤さん見に来たけど、楽しみが増えたかも。」

……佐藤さんは？」

「顔が良ければ何でも良いのか、お前は」

「そう言うわけでもないけど。せっかく身近に好みの顔がいるから。目の保養だよ。沢田だって、クリスマスに女といるような真似してるくせに、硬派ぶったって遅いって」

「いないって。誤解だろうが」

別にぶってるわけではないんだが……。硬派でも何でもなし。何かオレを誤解してるな、この男は。他のヤツも似たり寄ったりだけど。

いいか。この様子だと、ティアスの顔に興味はあるみたいだけど、それ以上でもないみたいだし。相原は結構判りやすいからな、そう言うところ。愛里のことも「可愛い」ばかりで、別に何をするわけでもなかったし。

「ホントに何にもない？男付きは、ちょっとな。あわよくばって言う妄想の邪魔になるし」

「妄想って……。何にもないっつーの。本人がそう言ってただろうが。大体。あの女と知り合ったのだって、12月の頭くらいだし。まだ一ヶ月しか経ってない」

そう言うって、そんなに短い時間だったことに自分でも驚いた。

「ふうん」

相原は、何だか納得のいかない、と言った顔をしていた。知らない顔して珈琲を飲んで見せたが、中身が既に空っぽだったことに気付いて、バツが悪かった。

「そっぴや、沢田はこういってで弾いたりしないのか？あの子、知り合いなら、紹介してもらったりとか……」

「……あんまり、そう言うのは……」

なんと返して良いのか。だけど、どうしても素朴な疑問をぶつけているだけの相原の顔を見ることが出来なかった。

「でも、クラシックやってるヤツって、発表会とかコンクールとか子供のころから出たりするんじゃないかねえの？」

「オレは、そんなには……。ピアノはやってるけど、別にこの道に進むと決めたわけじゃ……」

しどろもどろでしか答えられない、自分がみつともなかった。こんな大事なことなのに。

「だよなあ。受験も狭き門だって言うし。佐藤さんの行ってる大学なんて、めっちゃ人数少ないだろ？ やっぱ堅実に生きるのが一番だよなあ」

相原の言うことも、もつともだった。よく判るけど。

「よし。じゃ、オレもう行くわ。彼女によろしく」

立ち上がり、コートを羽織りながら笑顔を見せた。

「ホントに愛里の顔見にただだけか。わざわざこんな所に来ないで、さっさと新しい女でも作ればいいじゃないか」

「だから今から、畑中主宰の合コン 向かいのカラオケでやるからさ、レッスン無いなら沢田も来れば？ あの子連れて」

「いや、良い。レッスン無くて、愛里から課題出てるし」

「そうなんだ。……変なの。あ、陽向さん。オレ帰るけど、またよろしくね」

店内入口に向かう相原と入れ替わりで、ティマスが戻ってきた。

「ティマスで良いよ。またね、相原くん。ライブの時間が決まったら教えるからね」

手を振りあう二人を、オレはかなり不愉快な顔をしながら眺めていたに違いない。眉間の皺が跡になって残りそうだった。

「どうしたの？怖い顔」

「生まれつきだ」

じっと、立ったままの彼女を見つめるオレの視線が照れくさかったのか、そそくさとオレの隣に座って視界から逃れようとした。隣に座るなら、直に触れるだけだけれど。

「……お前、今日は暇？」

彼女がしたように、オレも彼女の膝に手を乗せた。

「依藤さんと打ち合わせがあるけど、この後30分くらい」

「その後は？」

オレが彼女をじっと見ていることに気付いて、真っ赤になりながら首を横に振った。

どう考えても、オレに気があるように見えるんだけどな。全否定されたけど。

「お前の部屋に行くけど、良い？」

俯いたように、黙って首を縦に振った。ストレートすぎて、オレ

が恥ずかしい。

「ピアノ……」

「ピアノ？」

俯いたままの彼女の声がよく聞こえず、顔を近付けろ。ますます顔を熱くする彼女に、オレもつられる。あくまでつられただけだと思ふ。

「ピアノを弾きに来るなら、良いよ？」

「判った」

とは言つたものの、多分オレの顔は相当強張つていただろう。

正直、クリスマス以来、彼女の前でピアノを弾いていない。もちろん、御浜の前でも。それどころか、一人だとまた弾けなくなつてしまつていた。何とか、愛里が戻ってくるまでに弾けるようになつておかないといけないのに……。

「何で、ピアノ？」

いっそ、ティアスには弾けないことを……。

「テツのピアノ、聞きたい。こないだ家に來たとき、弾いてくれたの、すごく良かったから」

言えない。こんな風に言ってくれるのに。

だったら、御浜に……。

いや、それもない。あいつは心配してくれてるし、微かだけど氣付いているからこそ、これ以上心配をかけたくない。それに、今はあまりあいつと突っ込んだ話をしたくない。ティアスのこともある

し。何か彼に責められたら、オレが何もかも悪いような気さえする。彼が責めることはないのだろうけど。

何だろう、こういうのを八方塞がりとか言うんだろうな。なるようになれとも思えない自分の弱さが情けない。

「テツ！それにティアスも。あれ？今日はレッスン無いって言ってなかったっけ？」

何というタイミング。御浜が珍しく、秀二と一緒にラテを片手にこんな場所に。

「無いよ。今日はやたら人に会う日だな。それにしても……その力ツプ、似合わないな、秀二」

御浜と目は合わせられなかった。隣に座る彼女から、少しずつ距離をとってしまっていた。

「余計なお世話ですよ。どいつもコイツも、私のこと、幾つだと思ってるんでしょうね！こんなでかい息子がいるわけもないのに！」
「……なんか、不機嫌ね、シュウジさん」

隣に座った御浜に、ティアスが目配せをした。たったそれだけのことが、酷く引かかる。

「いや……今日さ、進路相談があつて。親を呼んでこいって言うんだけど、うちの父親、いま調子悪いから、秀二に来てもらったんだ」

私立だからか、御浜の高校はそんなコトしてるんだな。うちはなくて良かった。ホントに良かった。

「もう随分年だもんな。最近、会わないけど」

親子と言うよりは、祖父と孫くらい年が離れてるからな。定年間に近づくと出来た子供だって聞いているし。そもそも30近い秀二が、御浜の甥だって言うんだから。調子が悪いって言うのは聞いてたし、外に出てくる姿をあまり見かけなくなっただけ。

「あ、でも、おじさんや覚さんや佐和さん達も来てくれるし、父さん自体は大丈夫なんだけど……。秀二がね」

「言うに事欠いて、この子の担任と来たら、私のことを父親だなんて言うんですよ！？全く、最近の若い教師ときたら、人を見る目がありませんね」

……長くなりそうだな。ティアスも御浜も苦笑いしてるし。

「どうせ大卒1年目とかだろ？そんなんから見たら、30も40も一緒だろう。大体、お前は老けて見えるし」

「あなたの発言の方がよっぽど老けています！何ですか、まだ10代だって言うのに、その人生に疲れ切ったような態度は」

「……えっと……私、打ち合わせあるから……また……」

説教が始まると知って、逃げたな。まあ、人を待たせる羽目になるから、正しい選択だけど。ずるいな。

「また？」

くどくどと文句を言い続ける秀二を後目に、御浜がオレに疑問をぶつける。その意味を、オレは計り知ろうとして、怖くなってやめた。

「また今度、ってことじゃねえの？何か、ここでライブやるって、一曲だけ。さつきまで、同じクラスのヤツも一緒だったから、営業してた。今日は下見に来たんだと」

そこまで言っつて、先手を打ちすぎたかもしれないと反省をした。だつて、どうしても彼の顔を見ることが出来ないし、何か彼女に絡んだことを言われるたびに心臓が痛い。御浜はたった一言言っただけなのに、過剰反応かもしれないけど。

説教を続ける秀二の声の方がはるかに大きいのに、オレは、御浜の息づかいまではつきりと聞こえそうなほど、彼の一拳一動に意識を向けていた。

「そうなんだ。レッスン無いって言っただから、てつきり」
「てつきり？」

弱気になっちゃいけない。嘘をつくときは、自信を持たないと。そうは思ってるけど、強気になりきれない自分がいた。必死に取り繕っていることがばれないと良いけど。

「あ、いや。昨日ティースに会ったとき、テツの話がよく出てたから、会いたかったのかな、って思っ」

揺さぶられる。彼の一言に、こんなに簡単に。

昨日、夜まで彼女と連絡が取れなかったと思ったら、会ってたんだ。

彼にどうしようもなく嫉妬してるのは判ってるけど。だけどうして良いのか、どうしたいのか、オレには判らなかった。

御浜達は「報告兼ねて、父親に顔を見せる」と言っ、30分ほどで戻っていった。それと入れ替えにティースが戻ってきたが、さっきまでのように彼女に迫ろうとは思えなかった。

御浜の態度と思いが、オレに重くのしかかる。

オレの記憶の限りでは、御浜が自分から女に対して動いたことつて無かったような気がする。それが、あんな風になるもんなんだなっと思うと、少しだけ怖かった。

彼女は何を考えているのか、オレの隣でオレの表情を、少し強張った表情で伺っていた。

「そろそろ、うちに来る？今日はなにで来てるの？バス？」

彼女の誘いにもうまく答えられずに、ただ黙って頷いた。辺りが微かに暗くなっていたことと寒くなってきたことを、彼女は気にしていた。

「行こうよ」

オレの手を引き、立ち上がらせる。その手をオレも握り返す。彼女の態度が、行動が、期待を膨らませる。あの夜から、それ以前から続く小さなやりとりの積み重ねと共に、何度と無く期待と失望を繰り返したあげく、結局甘い方へ流される。

結局、この女が何を考えてるのかなんで、オレは判っちゃいないのに。御浜のことも蓮野とか言う男のことも。大体、さっきの相原への態度だっ、何だ。

同じコトの繰り返しだ。あの夜もそうだった。彼女の態度に、彼女の過去に、オレは愛里を思いだし、愛里と比べていた。

愛里も、簡単にオレの手を取り、こうして引っ張る。

『テツ、靴を脱がせて。痛いのよ』

簡単に人に甘えるくせに、彼女はただ真っ直ぐにオヤジだけを見ている。

目の前の、オレの手を引く女だって、本当は誰を見てるかなんて判らないのに。

「テツが、来るって言ったんでしょ？それとも、一回家に戻る？」

だから、連れてくってこと？オレの誘いに乗るつもりはあるってこと？

「いや、いいよ」

「じゃ、地下鉄に乗ろっか？」

彼女が、店に面している道路の方を指さした。バス停が目の前にあるからここには良く来るけれど、目の前にある市営地下鉄に直結してる駅はあまり使わないから、その存在が未だに不思議だった。

「タクシーばかり使ってるかと思った。まともにバスとか乗れないし」

手をつないだまま、一旦店内に戻り、スタバの入っているショッピングセンター内のエスカレーターを使って二階に上がる。二階のレストラン街の奥に、駅に直結する陸橋への入口があった。ここに来て、一階の外にあるスタバにばかりいるから、こんな風になつてるのも知らなかった。

「バスは普段使わないからよ。この路線なら大学にもつながってる

し」

「そついや、賢木先生から連絡は来た？」

「全然。いいかげんよね、ホント。大学に行ったら、20日くらいまで冬休みだつて書いてあつた」

彼女は券売機の前で、行き先の駅を指さしながらばやいていた。

そう言えばオレも地下鉄で彼女の部屋まで行くのは初めてだな、なんてことと、20日まで愛里は戻つてこないんだらうなつてことを交互に考えていた。戻つてこないことに対して、少しだけ寂しくもあり、少しだけほつとしていた部分もあつた。

キップを買うときに離れた手を、今度はオレからつなぎ直してホームに入る。少し照れたように、だけど微笑む彼女の姿を見て、一瞬だけ愛里のことも、他の全ての煩わしいことも飛んでいったような気がした。

だけど、端から見たらオレ達はどんな風に見えるんだろう、なんて考えたら、再び少しだけ気が重くなった。誰かに見られたら何て言おう、とか考えてしまう。特に、相原みたいなヤツに見られたら

だけど、彼女の手を離せないオレは、やっぱりずるい。

びくびくしながら、彼女の隣に座るオレに、彼女も気付いてる。窘められながらも、誰にも見られないことを願いながら駅に着くまでの時間を、少し上の空で彼女と過ごした。窘めるけれど、責めはしなかった彼女に感謝しながら。

彼女の部屋の最寄り駅に二人で降りた。ここで、電車の中から彼女を見送ったことはあつても、一緒に降りたのは初めてだった。

東山線がこの駅から地下に入る。なので、二人で手をつないだまま階段を昇り、地上に上がる。

「ちよつとあるけど、良い？」

「ちよつとつてほどでもないだろ？オレは平気だけど。お前、もしかしていつも歩いて来てんの？」

年末にタクシーで向かった感じでは、それなりに距離があったと思っただけ。夜中に一人で歩かせるのは危ない程度には。

「自転車だよ。カナが『バイク買ってあげる』って言うてくれたんだけど、免許持ってないし。取りに行つていい？」

黙つて頷くと、彼女はオレを自転車置き場の方へ引つ張った。

それにしても佐伯さん……甘やかしすぎだろ、それは。コイツはよっぽど目をかけられてるんだな。佐伯さんのバックアップのおかげで、頻繁にライブにもゲスト出演してるみたいだし。確かに魅力的ではあるけれど、そこまで？そもそも、あんなスゴイ部屋を提供してるのもおかしい話だし（元々隠れ家だったつーのは別として）さすがに生活費に関しては、最近やっとバイトし始めて稼いでるみたいだけど。何か、甘つたれてる印象が拭えないんだよな。

そう言うヤツ、オレは嫌いなはずなのに（人のことは言えないけど）。何で疑問を持ちながらも、その事実になんて目をつぶるうとしてるのか。

「なに？」

自転車置き場の入口で、彼女はオレから手を離し、自転車を取りに走った。聞いておきながら、答えを待たずして走るか？お前は……。

「何って、何？」

「何か、また怒ってたから」

自転車を引き、こちらへ寄りながら、ちょっとおどおどした感じでそう言った。

「別に怒ってない。元々こういう顔だ。何度も言わせるな」

「ふうん」

納得いつてないといった顔で、再びオレの横に並んだ。以前ならここで噛みついてきたんだけど、おとなしいもんだ。調子が狂うけど。

「それより自転車。オレが漕いでやるから、お前は後ろに乗れ」

彼女から自転車を奪うようにしてそう指示をする。

「何でいちいち命令口調なのよ」

不愉快そうに言いながらも、彼女はそれにおとなしく従う。やっぱり、調子が狂うけど、良い傾向なのかも、とも思う。

荷台に座り、ペダルを漕ぎ始めるオレの腰に手をまわした。

「テツって、ちゃんと体を鍛えてるって聞いた。しかも自己流。体育の成績もいいんでしょ？珍しいよね？」

人の腰を撫でながら、何を言い出すかと思ったら。興味本位でやってるのかもしれないが、ちょっとやばいぞ、それ。運転できなくなったらどうする。

「別に。ふつう。だれが言ってんだそんなこと」

「えー。御浜と秀二さん。あと、真も言ってた」

あいつら、余計なことやってんな。もう、オレの知らない所で誰に会ってるとか、考えない方がいいのか？彼女がこういうことをあつさりとおれに言うってことは、気にしてないってことなのか、オレの扱いがその程度なのか……。わからんな。

「テツの行ってる所って、あんまり芸術の方には力を入れてないって聞いたよ？」

「そうだろうな。音楽も美術も、芸術学部だと年に一人か二人出れば良いとこだな。クラスのヤツで『美術はフォローできない』ってはっきり言われてたヤツもいたらしいし。大体、1年で授業自体終わるからな、音楽も美術も」

「何で、今の高校選んだの？」

「音大の受験とか、考えてなかったし」

へえ、なんて言いながらオレの背中にもたれる。判らないとか言ってる自分がバカみたいだ。

「でもピアノ弾いてるし？運動部とかは考えなかったの？部活は？」

「オレ、あの体育会系の気質が合わないの。絶対いや。先輩見るたび挨拶とか、あり得ないし。暑苦しい」

「……判る気がする。絶対先輩に噛みつくか、むっとしてそう」

「どんなイメージだ。失礼な」

運動と勉強が出来ればモテるのは、中学生までだろうが。これでも評判はいいんだけどな（女子にのみ）。……ティマスには言わないけど。

「公立で、家から通えて、行ける範囲で一番レベルが高かった。立派な理由だろ？」

「んー……そうか。何で御浜は同じ高校に行かなかったのかな？」

「いや、単純に受験戦争が……まあいいや」

同じ高校は受けたんだけど、単純に落っこちたんだよな。まあ、ティースにそうとは言えないか、御浜も真も。秀二辺りはさらっと言った上に、説教しただけだ。勉強も運動も出来なかったんだよな、御浜は。今はどうか知らないけど、中学時代は。中の下つて所か。結構、手伝ったんだけどな。

「テツは一緒の所に行こうとは思えなかったの？」

そう言う話をしてるのかな？御浜とは。いや、真とかもしれないし。二人きりじゃなければ、もう仕方ないのかもしれないけど。

「いや、でも……私立はな。金かかるし。出来れば避けたかった」

オヤジは「好きにしろ」って言ってたけど、正直、既に一人私立に行ってるしな。それで、また下手に伯母さんに何か言われてもめんどくさいし。子供心にいい気分じゃない。

でもまあ、明確ではないにしても、彼女の存在が、オレにも柚乃にも反抗期らしい反抗期を与えなかった気もするし。父子家庭で反抗期だなんて、オレの想像力じゃ、結構悲惨なことしか思いつかない。

「柚乃は私立じゃない」

「あれは、母親が行った学校に、幼稚園のころから通ってるっただけだって。むしろ伯母さんがそれを全面的に推してたし。愛里も行ってたからって」

また、へえ、なんて気のない返事をしたけれど、今度は声に妙な威圧感があって怖かった。もしかして、愛里の名前を出したからか？

「あ、テツ、そこ曲がって！近道なの」

機嫌が悪くなったのかと思ったけど、そうでもなかったらしい。道案内した声の明るさに、胸をなで下ろす。

彼女の誘導で、マンションの駐輪場に自転車をしまい、一緒に部屋に向かう。けれど、エレベーターに乗ってからは、彼女はオレの手を取るうとも、触れようとしなかった。やっぱり機嫌が悪いのか？

「ただいま」

二つついているはずの鍵を一つだけ開け、彼女は中に声をかけた。

「お帰りって……サワダ?!」

中から現れたのは、私服に着替えた新島だった。その後ろには芹さんもついてきていた。

そう言うこと？だからオレを簡単に部屋に入れたのか？つか、いくらなんでもこの生活はないだろ。仲良くて、男二人と同じ部屋……。

「テツはピアノを弾きに来ただけよ。変な顔しないで」

……んなわけないし……。先に上がってからオレに上がるよう促し、通りすがりにおっさんの顔を見せる新島の胸をこづいた。芹さんの顔は見なかったけれど。

「お前こそ、何してんだよ」

新島と、その後ろから無言でついてくる芹さんと3人で、リビングに向かう羽目になってしまった。リビングの壁には新島の制服が掛けてあった。

話を聞こうと思っていたティースは、着替えると言って、さっさと奥の部屋に入ってしまった。

「いや、今日はカナさん来るから。大体、それはこっちの台詞だろうが。彼女の部屋で彼女と会って何が悪い？」

確かに。ここはティースの部屋じゃなくて、佐伯さんの部屋だけど……。それにしても、何で芹さんまで。そして当たり前のように芹さんは床のクッションに座り、新島がソファに座る。なんだこの力関係。当たり前のように、オレにもソファを勧めてくるけど。

「孝多は……。その……。まあ、座れよ。孝多も黙ってないで、な？」

「沢田くんは、結局彼女と……」

「お前は口開けばそれしかないのか。黙ってる！」

喋れって言ったの、新島だし。

「あの……」

「未だ何か言うか？」

一瞬、身を震わせたのが判ったが、芹さんはオレを真っ直ぐ見て続けた。

「あの、沢田先生と賢木先生から連絡が来て……。あと、和喜さんから。話、繋いでもらって……」

和喜さんて、たしかオヤジと賢木先生の話の中でたまに出てくる

人だ。その人も蓮野遼平とつながってたんだ。

「みなさん忙しそうだったんですけど、一度ベルギーの方に行ってくれるって……言ってくださって。オレにまでわざわざ。ありがとうございます」

「いや。……父も気にかけてみたいですし」

自分のこと見たく、頭下げちゃって。確かに「心酔」って言葉が似合う感じだな。ちよつと疲れる。それにしてもオヤジ達、芹さんにもちゃんと連絡してたんだな。何も言わないから知らなかった。オレが蓮野のことを報告して、芹さんの連絡先とティラスから預かった諸々の連絡先を教えたときは、多少驚いた顔は見せても、そんなことは言ってなかったのに。そもそも、賢木先生なんか、未だ日本に戻ってきてないし。

「……音無さんは？賢木先生ともつながってるなら、あの人も……」

彼女が入った扉をちらつと見てから、芹さんに確認する。

「さあ。聞いてないですけど。ティラスも連絡とろうとしたら、出来なくなつたって怒ってましたし」

「知らない名前がいっぱい出てくるな。オレにも判るように説明しろよ、孝多」

「よく話してるだろ？灯路ってバカなのか賢いのか判らないよね」
「……言われたくねえ……」

芹さんのその意見には同意するけど。新島の項垂れっぷりは尋常じゃなかった。

それにしても、この様子だと結局、音無さんとは連絡とれてない

みたいだな。彼女は一体、あの人に何の用があるんだろ。

04

着替えると言っていたはずの彼女だったが、コートとセーターを脱いで、Ｔシャツで出てきただけだった。

当たり前のようにオレの右手側に当たる、ソファのアームに腰掛けた。

「灯路、カナは何時頃来るの？」

「さあ？今夜来るとは言ってたけど、あれから連絡ないし。移動中じゃねえのかな？今日は大阪だつて言ってたし」

……佐伯さんが来るのは判ったけど、芹さんは何でここにいます？いや、悪い人じゃないんだけどさ。ちょっと噛みつかれてるだけだろ？オレは。ティアスのことで、妙な疑いを持たれてるだけで。

よく考えたら、何でオレばかりそんな目で見られるんだ？他にもいるだろうが。知らないだけなのか？さつき礼を言ったその口は紡いだまま、またじつとオレを見てるし。

「あ、カナさんだ。もしもし？」

いつものように雨に唄えばのメロディを奏でる携帯をとり、新島はオレ達から距離をとるためにキッチンに向かった。できれば、芹さんをコントロールしたいんですけど。

「テツ、ピアノ弾いてよ。一曲弾いたら、出かけようか」
「出かける？」

彼女がリビングの隅にある例の小さなピアノを指さすが、オレは動く気になれなかった。

「うん。カナ、もう名駅に着いてると思う。灯路に電話してくるってことは。だから、カナが来る前に出ていこう？カナが来たときにここにいたら、止められちゃうから」

「まあ、あの人らに気を使うのは判るけど……それで良いのか？お前、佐伯さんとは」

お前のプロデューサーでもあるわけだろ？彼女は。

「良いの良いの。私に用があるときは、私にかけてくるから。カナはその辺、ちゃんと線を引いてるよ。灯路と私が一緒にいるのを知ってても、みんなで会ってても」

「ふうん。一緒にいるなら、つながりやすい方でいい気がするけどな。いつ来るのか聞くくらいなら」

「カナの、灯路への気遣いよ」

……新島のプライドを、そんなことで守ってるとでも？端から見てる分には、彼は振り回されているようにしか見えないけれど。オレはそんなのは嫌だけど。

嫌だけど、振り回されてるのか、オレも。

「何よ、怖い顔してる。睨まないでよ」

ソファから離れようとしないオレの手を引き、立ち上がらせた。お前も愛里も、オレのことを振り回すくせに。振り回されるオレが悪いのか？なんでそう言うことを簡単に出来るんだ。芹さんの前で、オレの手を取るなんて。

ちらつと芹さんを確認したけれど、睨まれてはいなかった。見つ

められてはいたけれど。

「待ってて、楽譜持ってくるから」

彼女は無理矢理オレをピアノの前に座らせておいて、奥の寝室に戻ってしまった。

「やっぱ、仲良いんですね？」

彼女がいなくなった途端、芹さんはオレに声をかけた。

「……そう見えますかね」

背中から視線を感じる……。ものすごく見てるよ。保護者か？それとも、蓮野のことを口にしながらも、実はティアスのことを狙ってるんじゃないのか？

「でも……うーん。白神くんといるときは、蓮野さんといるときみただったから。彼との方が仲良く見えたかな」

ちょっと待て、いつ御浜と会ったんだ、この人！？オレ、かなり頑張ってティアスと会ってたぞ、この2週間。この人単独で御浜と会ってコトは考えにくいし……。昨日か？

思わず、芹さんの方を向いてしまった。オレは相当嫌な顔をしていただろうに、彼は特に気にすることなく笑顔のまま答えた

「そう言えば、幼馴染みだって聞いてます。一緒にいた、背の高い

……」

「泉 真？」

「あ、そうですそうです。彼がそう言っていました」

真の策略か。気にするなと思って、気になってしまっし、気にしてしまう自分も嫌で仕方がない。何でよりによって、御浜なんだ。だけど、御浜が彼女に興味を持たなかったら、オレはそもそも彼女を見ようとしていたか？

「あれ？灯路つてば、未だ電話してる。お待たせ、テツ」

ちつとも戻ってくる気配のない新島を後目に、ティアスがオレの横に戻ってきた。そして、手書きの楽譜をオレに差し出す。

「……これ、お前が書いたの？」
「ううん？カナよ」

初見で弾けってか？知らない曲を。そんなにしつかりやってないぞ、オレは。オレの後ろに立つティアスを睨み付けたかった。ピアノ曲として書かれてはいるけれど、随分テンポも速いし、これって……。

「ロック？あれ？でも、原曲は……」
「クラシックだよ。知ってるでしょ？」

確かに、原曲は練習曲として弾いたことあるけど。指が動いたり動かなかつたりのこの状況で、初見の、こんなアレンジの曲を弾けと？この女。しかも佐伯佳奈子の手書き？！

それにしても……最近女優業の方が目立っているとは言え、本業はこつちだもん。ちよつとすごいな。

「ちよつと練習……」
「いいよ」

とりあえず、時間稼ぎも兼ねて弾く真似だけでもしよう。今までティアスの前では、指が動かなかったことはなかったし。一人だと弾けないんだよな。

仮に弾けても、練習不足が露呈しそうだな。

心配していたよりはずっと、スムーズに指が動き始めた。ただ、危惧していた通り、練習不足は否めなかった。愛里が戻ってくるまでに、何とかしないと。課題も出されてるし。

それにしても、何でティアスの前では、御浜の前では、弾けるんだ？

「すごい！楽譜見ただけで弾けるんですね！」

「テツ、あんまりピアノを弾いてないの？」

案の定、芹さんは誤魔化せても、ティアスは誤魔化せなかった。しっぽがちぎれんばかりに振ってるのが見えるかのような芹さんに比べて、彼女の態度はちよつと棘があった。

「いや、普段、あんまり弾かない感じの曲だし」

練習しろっての、自分。出来るなら、いや、しないといけないのに、何でかつつーか。

「この間、弾いてくれたとき、良かったんだけどな」

今は悪いってか？しかし、この女は齒に衣着せるつつーことを知らんのか？

「お前、オレを楽しくしてやるつつったじゃん？」

「言ったよ?」

「オレのピアノが綺麗だって言っただろ?」

「言った」

「要するに、楽しそうに見えないし、綺麗でもないってことだろ? 今のオレは。つまらなそうなまま、ってこと。それに今さら失望した、と」

彼女はさすがにオレの側から逃げるような真似はしなかったけれど、その台詞に返事をしようとはしなかった。多分、オレの声に卑屈さと、多少の怒りが混じっていたから。

きついことを平気で言うくせに、最後の最後で踏み込んで来ないんだな。

「えっと、オレ、何かよく判らないんですけど」

オレとティアスの間に流れる妙な空気に、芹さんはいつもの口調で、何のてらいもなく割り込んできた。振り向いて彼の顔を見なくても、いつものように笑顔で言うことは判った。

「ティアスは、沢田くんのピアノが好きだって言ってたから」

どうしてこの女は、オレ以外の前ではそう言うことを言うかな。照れるだろうが。オレの前で言ったときは、この程度の照れではすまなかったけれど。

「言……言っただけ」

恥ずかしそうに呟き、オレの背中を指でつついた。今さら何を照れてるのか。

「ティアスが一緒に練習すれば良いんじゃない？練習不足だって言うなら？」

何言っただ、この人！オレとティアスが仲の良いことを気にしてるくせに、その発言に至る意味が判らない！

「ちょ……孝多……テツに迷惑でしょうが。何で簡単にそう言うことと言っのよ。テツには佐藤さんて言う先生がいてね？」

「でも、沢田くんは、責任とれないのに不用意な発言をするなって、ティアスに怒ってるように聞こえたから」

「いや、芹さん！オレ、そこまで言っ……」

思わず振り向いて、噛みついてしまうところだったが、彼は平然とした顔をしていた。だから、「そこまで言っ……」と、彼の言葉を否定することも出来なかった。

何だ、この人？ただのほんわかした兄ちゃんかと思ってたのに……、妙に鋭くて調子が狂う。何だかそう言うところは、御浜みたいだとも思っただけ、御浜ならこんな場面で口は出さない。

御浜なら……。いや、今の彼なら、彼女が好きな彼なら、違うかもしれないけど。でも、距離の取り方は確実に御浜の方がうまい気がする。だって、オレもティアスも、どうして良いか判らない。

「さ……佐藤さんが帰ってくるまでの間でいいですから……」

「おう」

「一緒に、練習しませんか……？」

何でおどしてるんだ、この女。しかも、何故か敬語になっているし。

彼女の方に体を向け、座ったまま、真っ赤になって俯いていた顔を見上げた。

『テツに、……いて欲しいよ』

そう呟いた時の彼女と、同じ顔をしていた。

別に普段、頼み事もお願ひも命令も簡単にするくせに、何でこんな風に申し訳なさそうな、恥ずかしそうな顔をするんだ？

「え？ 沢田くん、ティアスと一緒に練習すると困るんですか？ こういうのって、一人でやらないと行けないんですけど。ごめん、オレ、よくわかんなくて」

「いや、何で芹さんが謝るんですか。別に、困るとかそう言うわけじゃ……」

あー、もう、この人、調子狂うな。何でこう、ストレートなんだ。

「でも、ティアスが何か、ものすごく申し訳なさそうにしてたから。何か理由があるのかと思って」

やっぱり、申し訳なさそうにしてるように見えるんだ。何でだ？ 理由なんか、オレが知りたいっつーの。

「だって、テツには佐藤さんがいるし」

『沢田くんなんか、佐藤さんのことばっかのくせに！ 何よ！』

愛里のこと、気にしてる？ もしかして嫉妬してるってことか？

『佐藤さんが帰ってくるまでの間でいいですから』

違う。愛里のことを気にしすぎて、オレに気遣ってるだけだ。

どんなにティアスにキスをしても、抱きしめても、オレはやっぱ
り愛里を見ている。彼女はそれを知ってるだけだ。
気にしなくて良い、って。愛里のことなんか関係ない、って。何
度言っても、彼女は信用しない。
オレが心からそうは言っていないことを、彼女は知ってるから。
オレのせいだ。

05

芹さんがいなかったら、オレは多分、彼女を抱き寄せてただろう。
あれ以来、言葉に困るとそうしてきたから。それで伝わると思っ
た。甘えでもあった。

だけど今は、俯く彼女からも、真っ直ぐきらきらした目で見つめ
てくる芹さんからも、逃げられない。

「一人だと……」

弾けないから。指が動かないから。言い訳に思われても、ティア
スにはそう言おうと思った。

愛里のことを気にしすぎてるのも本当だし、ここまで近付いた彼
女に対してウソがないのも本当だ。それを判って欲しいとは言えな
いし、何を言ってもウソになる気がした。

だからせめて、それ以外のことで、きちんと答えようと思った。
楽になれるかもしれないって言う期待がなかったわけではないけれ
ど。

「あの、テツ、良いの。ごめんね。言わないで」

オレの言葉を遮り、頭を下げたのは彼女だった。まるで、オレの台詞を判っていたかのように。

「なんで？一緒に練習しよう。ここなら、夜遅くても大丈夫なんだろう？あと、英語も教えてくれるって言うてたくせに。責任とらせるって言うたろうが」

手くらい握っても良いよな……。芹さんは、さすがに怒り出したりはしないだろうから。

震える彼女の手にそつと触れ、軽く握った。

それにしても、冗談だっと思われてるって判つてるときは、愛里にも齒の浮くようなことを簡単に言えるのに。どうしてこんな子供をあやすような台詞にさえ、オレはこんなに必死なんだ？

「うん」

小さく頷いて、手を握り返してきた。その部分だけ、妙に血の巡りが早いような、そのおかしい感覚に、目の前がくらくらする。

この女はずるい。オレは、ただ一人と言い切れないくせに、完全にはまっていた。

彼女も、オレを見てる。このまま抱きしめたかった。芹さんがいなければ。

……勝手に二人の世界に入ってたけど、この人、もしかして怒ってる？恥ずかしいって言うより、怖いぞ。

「仲直りした。良かった」

子供みたいに喜んでいた。なに考えてんだ？蓮野のことを口にしつつも、ティース狙いか？とも思ったけど、何か、違う。つか判らん！！

「仲直りっつーか……この恥ずかしい絵ヅラを見て、お前は何も感じないのか」

ティアスに気を取られていて、見てなかったけれど、いつの間にか新島が戻ってきていて、芹さんの後ろに立っていた。さすがに新島に見られるのはメチャクチャ恥ずかしいんですけど。恥ずかしい絵ヅラとか言うな。

「え？なんで？ティアスも喜んでるみたいだし」

「……よ……喜んでるって言うか……」

彼女はオレから手を離すと、あり得ないくらい顔を真っ赤にして、そっぽを向いてしまった。オレもそうしたい気持ちだったが、コイツがやるのは可愛いけど、オレがするのはどうだ。

「お前、ハスヤリヨウヘイがどうか言っつて、沢田に噛みついてたろうが」

「でも、ティアスが喜んだら、蓮野さんも喜んでたし」

「つき合っつてんのかどうか、突っ込んだくせに？」

「だって、いいかげんだっつたら、あんなにティアスのことを大事にしてきた蓮野さんがかわいそうだと思っつて」

「判らん。その考えの軸が判らん！」

新島、もつと言え。

「大体、沢田もティアスもはつきりしないっつーか。あからさまなくせに。めんどくせえな」

……それ以上喋んな。にらむぞ。

「そんなことより灯路、カナは？」

「あ、そうだ。人のことに構ってる場合じゃなかった。カナさん、もう名駅に着いたって言うてたから。こっちで店を予約してあるらしいし」

そう言っで、携帯で時間を確認をした。リビングの片隅においてあったコートハンガーに向かい、掛けてあった黒いダッフルコートを羽織った。

「いつもの所？」

「そうそう」

自分のことでいっぱいだな。あっさり話変えたし。まあ、あんまり会えないみたいだしな。妙に浮かれてる新島が、不愉快でもあり、ほほえましくもあった。

「だったら、二人でここに帰ってくるよね？」

「ああ。今日は泊まれるって。じゃ、オレもう出るから。続きは勝手にやっといってくれ」

言いたい放題言っで、それか。

しかし、めんどくせえ、か……。当の本人は、充分判ってんだけどさ。

新島を見送った後、ティアスがまた申し訳なさそうにこっちを見ていた。

「……ピアノ、また今度にしようか？一緒に練習するんでしょ？」
「ああ」

頷いてから、彼らに気を使って出ていこうと言った、彼女の台詞を思い出した。

「コートを持ってくるから、待ってて」

やっと普通に笑顔を見せてくれた。彼女の言葉に再び頷いて、オレも掛けてあつたコートを羽織る。芹さんも同じように、ジャケットを着た。

さつき着替えてくると言つたときより、随分早かつたわりに、彼女はしっかり着替えていた。初めて見るミニスカート姿だった。

オレとティアスが並んで歩き、その後ろを芹さんがついてきた。ここに来るときと同じように、彼女を自転車の後ろに乗せ、動き出そうとしても、彼は未だついてきた。

「……えつと……芹さん、どこに今いるか知らないですけど、戻らなくて良いんですか？」

いつまでもついてきそうな雰囲気の芹さんに、たまらず突っ込んでしまった。かなり迷つたけれど、二人でいるのが当然、と思われなかったらどうしようかと思つて。

いや、当然ではないのだけれど。

「だつて、オレ、今あの部屋に寝かせてもらってますから。行くところないし。灯路がないときに、灯路のうちに世話になれないですしね」

「は？あの部屋って……」

ティアスと一緒に暮らしてるってこと？！

「……たまに、灯路の家に行ってるのよね、孝多は。それに、カナ

が結構いきなり来ることもあるから、灯路もしょっちゅういるし……」

荷台に座ろうとしていたティアスが、オレから目をそらしつつ、妙なフォローを入れた。

そんなフォローはいらん!!

「どしたの、ティアス？」

「……あんたの天然ボケは、罪深いと思うわ」

しかも芹さんは天然か、やっぱり!

「オレのこと、怒ってる？」

「そう見えるなら、そうかもね」

ティアスの溜息と共に、オレの怒りも空回りした。なんとというか、調子の狂う人だな。いや、オレが怒る理由なんて、無いはずだけど。別にオレは、ティアスとつき合ってるわけでもないし、この女がどこの誰と一緒に暮らそうが、関係ないわけだし。

関係ないこと無いのは、オレだけで。それが、最悪なくらい不愉快だ。

「あの、テツ? 誤解しないで欲しいんだけど。怒らないで」

「誤解? オレが何を? 別に怒ってないし」

「思いつきり怒った顔してるくせに、何でそうなの? 良いからもう、行きましょ?」

「行きましょ? って、お前な!」

これって、オレが怒ってる理由を、ティアスは理解してるってこ

とだろ？そのくせ、「良いから」って、一体何がよいと言うんだ！
お前は良いかもしれないけど、オレはよくない！

「……何よ」

って、言つてやりたいけど、言えない。みつともないのが判つて。完全に怒りにまかせて怒鳴ることが出来たら、楽な気がするけど。こんな時、妙に冷静な自分が嫌いになる。

こういう女だつて、判つてゐるのに。大体、新島だつて普段、コイツとあの部屋に二人きりで泊まつてくことがあるのも知つてゐるし。でも、やっぱり、新島がするのと、芹さんがするのとは違う！
せめてここに芹さんがいなかったら、外じゃなかったら、あの夜のように、言いたいことを言えるんだろうか。

「とりあえず、ここに突つ立つてると、他の住人に迷惑では？」

誰のせいだ。他人事みたいに言う芹さんを、オレ達は睨み付けるが、彼は気付いてゐるのかどうかといった態度だった。

「行こう、テツ？」

「あのな……」

「孝多。私ね、テツと一緒にいきたい所あるから。二人にして欲しいの」

この女も、言つに事欠いて、二人にして欲しいって！？つか、コイツ、その台詞が何を意味してるか……。

「あ、じゃあ。オレは適当に時間潰してるから」

え？しかも、そんなあつさり引くの？なんなんだこの人？

「部屋にも、カナと灯路がくるんだから。判ってる？」

彼女の言葉に黙って頷いて、彼は手を振りながら立ち去っていった。その、あまりにさっぱりしすぎた態度に、呆氣にとられてしまった。

てか、これはこれで、どうよ？ ティアスの台詞は嬉しいような恥ずかしいような、妙な感じだけど。芹さんのこのティアスに対する服従っぷりは？！どんな関係だよ？

「なんでそんな変な顔してんの？」

驚いてんだよ。あきれてんだよ。おかしいと思え、この状況を！自分の言った台詞の重さと衝撃を！

そうとは言えないけど。

「変な顔って言うな。つーか、あの人は犬か？お前がこうしたいつつたら、あっさり聞くのか？おかしくない？」

「私の言うことを聞いてるわけじゃないよ。それより、行こう？」

オレの服の裾をつまんで、引つ張り、自転車に乗るよう促した。

彼女たちの妙な関係を、これ以上、「怒りながら」突っ込んでいても仕方ないと思い、言うとおりにした。

夜は長い。彼女の意志が、オレと同じなら、この後ゆっくり聞けばいい。出来ることなら、オレが彼女との関係を握りたい。何かはつきりさせたくないことがあるのは、お互い様だ。

「ホントに行きたい所なんかあるわけ？」

「無いよ？」

「そう。なら良かった」

オレの台詞をどう受け取ってくれたのか、彼女は黙ったまま、オレの腰に回していた手に力を入れ、抱きついた。

彼女を連れて、オレの家とは反対方向の列車に乗って、栄で降りた。結局また二人で、あの観覧車に乗っていた。

だけど、それから何もかもシナリオ通りに進みすぎて怖いくらいだった。

観覧車で隣に座る彼女と当たり前のようにキスをする。二人で、以前ここに来たときのことを話しながら。

『邪魔されるのは、いやかな。いやじゃない?』

彼女の台詞を思い出しながら、あの時と同じように携帯の電源を手探りで落とした。

『そう、良かった。一緒だね、私と』

あの時の「満たされる」様な感覚の根本が、今ならはつきりと判る。

「雪、降ってきたよ?」

オレが思ったように、彼女もまた『あの時と一緒に』だなんて言うのだ。それが、オレの期待を膨らませる。

膨らむと言うより……太くなるとも言うべきか。破裂しそうだ。

「めずらし。この辺、年に1回でも降ればいい方なのに。雪に慣れてないから、ちょっと降ると、すぐに交通網が麻痺しちまう。電車止まったりして」

「そうなんだ。そう言えば、こっちに來てから、あの日くらいかな、雪が降ったのって。あっちにいたときは、雪なんかしょっちゅう降ってたから」

そうか、とだけ返事をして、彼女の手を取って観覧車を降りた。
「あっち」の話は聞きたいと思う反面、聞くのは怖かった。だから、どうしても逃げてしまう。

家にも戻りたくない、彼女の過去も知りたいけど、積極的には知りたくない。気になるけど、知らないままでいたい。

オレは何も動きたくないけれど、このままどうにかなってしまいたい。そんな都合のいいシナリオって、あるんだろうか？

手を引いたまま、観覧車を後目に再び町に出た。

「お前、今夜どうするんだよ？また戻らないつもりだろ？」

雪がどんどん酷くなってくる。町は酔っぱらいと夜の商売の人でいっぱいなのに、妙に静かで不気味だった。

行くところがないなら、家に来れば？そう言つつもりだった。

だけど、オレは家に帰るつもりはなかったけど。

「沢田先生って、今日はいらっしゃるの？」

「え？いや……和喜さんと出かけるって」

以前なら、オヤジがいない方が、遠慮しなくて良いと言ってたけど。今はどうだろう？あの時と今とでは、オレとティアスの距離が違う。

「柚乃は？」

「……どうだろ。オヤジが家にいないときは、大抵、家にいないけど。こないだみたいに」

「じゃあ、お邪魔しても良い？」

それは一体どういいうつもりで言ってる？今の状況なら、そう言うつもりで来るとられてもおかしくないぞ？

何もない、なんて、今のオレには言えない。

「良いよ。……そろそろ終電無くなるから、戻るか？」

オレは正直、戻りたくないけど。だって、オヤジがいなくても、秀二は勝手に出入りするし、何より御浜がいる。離れたくてここまで来たのに。

「うん」

彼女は、何故か真っ赤になって顔を伏せた。これは行ける気がする！完全にOKのサインだろうが、これは。

だけど家に来たら、御浜がいるってこと、判ってるんだろうか。もしかしたら、彼が来ることが判ってて、オレンちに来るのか？

しかし戻ると言ってしまった以上、必死で余裕の顔を見せながら、地下鉄の駅に向かう。

「……終電、星ヶ丘までだって」

恵みの雪だった。流される自分の幸運に感謝したくなるくらい。本当に幸運なのかは謎だけど。

案の定、地下鉄の地上部分がストップしてしまっていた。

「バス、走ってるかもよ？」

とりあえず地下鉄に乗ろうと、オレを引っ張る彼女を止める。

「吹雪いてるのに？」

地下鉄もその内、復旧するだろう。多分バスもなんだかんと言つてこれくらいなら走ってるだろう。雪はどんどん積もるし、風も強くなってくるけれど、この地方に降る雪なんて、そんな大したものじゃない。

わかつてるけど。帰りたくない。オレが、家に来る？つてきいたけど。矛盾してる行動かもしれないけど。何とかならないものか、なんて他力本願なことを考えてた。

「どうしよう？」

上目遣いでそう聞く彼女がずるいのか、何も言わないオレがずるいのか、判らなかった。

黙って彼女の手を引いて、駅を出た。彼女は逆らわないし、何も言わない。雪を避けて地下街を歩く。駅から離れたところで地上に出て、繁華街へと向かう。

コートの下の学ランを悟られないよう、ホテルの部屋に入ったところで、オレに引っ張られるままついてきた彼女が、扉の前でやつと口を開いた。

「帰れないから、だよな？」

その言葉に、返事が出来なかった。代わりに、彼女の背中を押して部屋に押し込めた。

「制服着てるから。見られないように、だよな？」

まるで、オレの代わりに彼女が言い訳をしているようだった。それが妙に申し訳なかった。

こんな時に、誘いの文句すら言えないのか、オレは。普段のように、軽く誘えばいいのに。現実味が帯びてきただけで、どうしてこんなに怖じ気づいてんだ。

手を伸ばした後にあるものが、怖くて仕方がない。手に入れる覚悟がない。だって、オレも何も言わないけど、彼女も何も言わない。何も言わない代わりに、彼女がオレの言い訳を口にする。

この状況になって、このまま黙ったまま押し倒すのか？さすがにそれは無理だろう？

何も言いたくない。オレからは動きたくない。だけど彼女と共犯のまま、オレは彼女と寝ようとしてるのか？

お互い様だと、オレは自身に言い聞かせるくせに、彼女がその態度を続けることが、こんなにも不安で不満だ。

オレは動きたくないけれど、彼女には動いて欲しいなんて。虫の良い話だ。

彼女がオレを好きだから、仕方がなかったんだ。そんな言い訳、通じるわけがないと判ってるのに。

「黙ってないで、何か言つてよ」

部屋の隅に陣取る、やたらでかい真っ赤な布貼りのソファに腰掛けながら、オレを責めた。スカートの中、見えそうですけど。誘われてるって思うのは、ただの自惚れだろうか。

黙ったまま隣に座ったら、入れ替わりに彼女は立ち上がり、風呂場へ向かった。

「逃げた？今」

「なんで今出てくる台詞がそれなのよ」

怒ったのかと思った。だけど、彼女は何故かちょっと暗い口調のまま、風呂場の扉の前で立ち止まって、こちらを見ていた。

「……そういえばテツには、昔、彼女いたって聞いたことある。こういうところ、来たことあるの？」

ホントに、どう言ってもりなんかな、この女は。今まで何度も聞くタイミングはあったはずなのに、初めて突っ込んできた。

「……一応」

まあ、ウソについても仕方ないしな。なんか責める口調だったから、気にしてるみたいない方だったから、ウソついた方がいいような気もしたけど。今さら初めてですつつつても、白々しいし。

人のことは言えないけど、コイツも一体何を気にしてるんだか。

「でもまあ、真達の言ってたことで、大体当たってるけど」

「そうなんだ。佐藤さん、いるもんね」

愛里愛里って五月蠅いよ。

「お前は？お前こそ、蓮野……」

「今まで彼氏とかって、いたことないし。こういう所来るのも初めてだし」

逃げるように風呂場へ入っていった。自分が初めてだから、オレ

を賣めてたつてことか？よく判らんし。

それにしても、蓮野とはホントに何もなかったのかな。逆にあんなだけ否定されると、疑わしい。何もなかったのに、芹さんがわざわざベルギーから来るだろうか。芹さんが極端なのかもしれないけど。

蓮野のことも気になるけど、御浜のことも気にならないでもない。彼と二人でいるかどうかオレは結局知らされない。後から「一緒にいた」って聞いて、どうして良いか判らなくなることはあるけれど。

蓮野のことは、少なくとも過去のことかもしれないけれど、御浜のことは現在進行形だ。彼に対して彼女が悪い印象を持っていないのも知ってるし、仲が良いのも知ってる。何より、御浜はティアスに執着してる。驚くほど。

ずっと御浜の横にいたから、オレが誰よりそれを感じとってる。

だけど、オレはもう、引き下がれない。引き下がる気もないけど。ただ、覚悟が決めきれないだけで。

彼女は、良いってことなのか？多分、その風呂場の扉に鍵はないと思うぞ？ガラスで中が丸見えじゃないだけ、ましな方だ。

風呂場の扉のノブに手を掛け、押し開けようとしたら、鍵はかかってないけれど、重くて動かない。中でバリケードでも作ってるのか？妙な悪あがきをしゃがって。

仕方なく扉の前で座り込んで彼女を待つ。待っていたら、ソファのある辺りから携帯の着信音が鳴り響いた。ティアスの携帯だった。そう言えば、カバンを置いていったような気がする。よく知ってる着信音だ。これ以上聞きたくなかったから、必死に聞かないように、見ないようにしていた。

「……何してるのよ」

髪をまとめたまま、Ｔシャツにミニスカートで風呂場から出てきた。中に着るものとかあったろうが。ホントに往生際の悪い。

「いや、待ちきれなくて？」

その台詞に怒るかと思ったら、妙にしおらしくなって、顔を赤く染めた。立ち上がった彼女の手を取り、抱きしめた。

「……何も言ってくれないんだね」

彼女は不満そうにそう言ったけれど、いつものように、オレを抱きしめ返した。

オレも、あのクリスマスの日から、なるべく会うようにし、なるべく触れるようにしてきた。だけど、彼女が受け入れなかったら、それも出来なかったはずだ。

キスをしてから、風呂場の扉の横にあったソファに彼女を押し倒した。彼女は抵抗しなかった。

なのに、御浜からの着信に、彼女は手を伸ばす。

「とるな」

自分でも驚くほど強い言葉で、彼女の手を押さえた。

「……とらないから」

オレに体をすりよせ、腰に手をまわして抱きついた。

「テツも、もし佐藤さんから電話があっても、とらないですよ？」

やっぱりオレは、彼女の問いに答えることは出来なかった。

携帯の電源を切っておいた自分の聡明さを、心から褒め称えたかった。彼女の携帯は鳴り響いても、オレの携帯は鳴らない。

彼女の携帯が鳴れば、二人の（オレだけの可能性はあるけれど）罪悪感を刺激するけれど、オレの携帯が鳴れば、オレの申し訳なさだけが増すばかりだ。

正直、御浜のからの着信音が、オレの彼女への執着をさらに刺激していたのは確かだ。自分でも矛盾してるとは思っけれど、どうしようもない。

全てが終わってから、とりあえず後悔するのも、どうしようもない……だろう。

そして、とりあえず後悔したくせに、離れがたくなってる自分もいる。吐き気がするほど矛盾だらけだな、オレは。

裸のままシートにくるまり眠っている彼女に、起きる気配がないことを確かめ、携帯を持って脱衣場へ向かう。電源を入れるとたまっていたメールや留守電がどんどん入ってきた。とりあえず無視して、新島に電話を掛ける。

時間は7時5分。さすがに起きてるだろう。もしかしたら、まだ電源を切ってる可能性もあるけど。

『なんだよ。デートだったつたろうが。戻ってきたら、お前も孝多もティースもいなくなってたから、気を使ってくれたんだらうとは思ってたけど』

「……取引しないか？」

『何を？……そっいゃ、お前らあの後どうしたんだ？二人で家に来たくせに……』

電話の向こうで、状況を判断している新島の姿が見えるようだった。

「お前、どこに出かけてるって言うてるんだ？お前んちの親、普通に五月蠅いだろ？家にいたことにしとけばいいから」

『お前んちはどうなんだ？』

「オヤジは学生時代の友達と出かけてるし、オヤジがいなけりゃ、妹もいない」

『適当だな。幼馴染の方がよっぽど保護者だな。泉と白神にそう言っとけばいいわけか。良いけどさ』

察しのいい男で助かる。我ながら、おかしなことを頼んでいるとは思っけど。

『……で、結局お前らは、つき合うことにしたのか？』

「別にティースと一緒にいるとは一言も言っていないが……」

『いや、そこ否定されても。嘘臭いだけだし』

頭から決めつけてんなよ、この野郎……。間違っていないけど。察しがよすぎて困るじゃねえか、この男は。

「テツ？何してるの？」

『ほら見る』

シャツだけを着て脱衣場に入ってきたティースの声に、勝ち誇った様に言った新島が不愉快で、確認をとる前に電話を切ってしまった。

「アリバイ工作中だよ。制服を着てくるんじゃないかな。このま

ま学校サバろうかと思ってたのに」

あと1日遅ければ良かったのにな。週末だったら大手を振って休めたのに。

「サボらなくても、学校は休みじゃないかな？」

何故か、彼女は満面の笑みを見せ、オレの手を引いて立ち上がった。ヘッドレスト側にある窓は、そこが限界なのか、かろうじて外が覗ける程度の隙間が空いていた。外には雪が積もっていた。

ここ何年か見たことがないくらい、外は真っ白なように見えたけど……。

「大雪警報が出てるって。天気予報で言ってたよ？高校は休みじゃない？」

オレが電話をしてる間に、彼女がテレビをつけたらしい。朝の二コース番組が気象情報に囲まれて、小さな画面に収まっていた。高速道路も、JRも、私鉄もほとんど止まっているらしい。普段は天気にほとんど左右されない地下鉄も、地上に出ている部分が止まっているようだった。

とりあえず、柚乃には連絡しとくかな。親父が帰ってきてたら、どこに行ってるんだって話になるし。

「行きたい所あるんだけど、つき合ってくれる？」

案外、簡単なもんなんだ、って言うのが正直な感想だ。オレのずるさか、彼女のずるさか知らないけれど、なんの縛りもお互いからは与えないまま、寝ることは出来た。次はどうか知らないけれど、オレはもう、そのつもりでしか彼女に近付けないし。彼女に「どう

言うつもり？」とか聞けない自分の後ろめたさが辛い。

だけど、彼女は どうして、最後まで嘘をついたんだろう。女つて、やっぱり嘘つきなもんなのかな。愛里みたいに。あの女も、肝心なところで嘘ついてたから。

「良いけど」

オレの返事と同時に、彼女の携帯が鳴り響く。心臓に悪いから、オレみたいに電源を切っておいてくれればいいのに。手に持ったままの自分の携帯の電源を落しながら、心の中で舌打ちをした。

着信音が、いつもかかってくる御浜のものとは違っていたことだけが救いだっただけ。いくらなんでも、こんな朝からかけてこないか学校が休みになったと判ったら、どうするかは判らないけど。

御浜のことを思うと気が重い。重いけど、もうどうしようもないいや、そうでもないか？昨夜のことを無かったことにしたら……。

そんなこと、オレ自身が出来るわけがないのに。本当にオレ自身が一番判らない。ティアスが目の前にいるのに、いつまでも愛里に執着してるし、何度も思い出すし、簡単にティアスに手を出しておきながら、御浜のことを気にしてるし。

だけど、一つだけはっきりしたことは、それでもティアスにはオレを見て欲しいんだ。今でも。

「……誰？携帯」

「え？カナだけど……」

オレの手前（もしかしてオレが嫌そうな顔をしていたからかもしれないけれど）、彼女は携帯に出るのを躊躇っていた。申し訳なさそうな顔をしたまま、鳴り響く携帯を開く。その画面を、ちらっと確認したら、彼女の言う通りだったことにオレは胸をなで下ろした。

「出ればいいのに」

彼女から離れ、再び風呂場に向かった。手に持っていた携帯の電源を入れ、柚乃にメールを打ちながら。ティアスの行為に、少しだけ心が躍る。彼女の反応に、彼女の行動に、オレのことは見ている実感に、オレ自身が激しく揺さぶられているのを感じていた。最初に彼女と二人で観覧車に乗ったあの日より、もっと激しく。

ティアスだけを真っ直ぐ見ていたら、どんなに楽しいだろうか。

そう考えながら、真や相原達がオレのことを枯れたのなんのと言ったことを思い出して、余計にへこんだ。意外と、当たってるかも……。楽しいだろうか、じゃねえっつの。

風呂場を出て、彼女が電話を終えるのを遠目に確認しながら、再び携帯の電源を落とした。

「佐伯さん、新島と一緒にいるんじゃないのか？」

「元々、今日は灯路を学校に行かせてから会う予定だったから」「そっか。いいのか？」

行きたいところがあるって言ってたのに。

「ん。どうせ夜の話だし。カナだって、美衣がいるからこっちに来るときくらいしか自分だけの時間がないんだし」

「……そっか」

ミイ？　そっかや中学生くらいの娘がいるんだよな。つーか、娘とそう年の変わらん男と恋愛してんなよ。不倫じゃないだけマシかもしれないけど。新島とのかを知って以来、雑誌読んでも、ちょっと生々しい感じがするんだよな。

「そっぴゃ、佐伯さんって、旦那とかいないのか？」

「え？結婚して、美衣が生まれて2年で離婚したって言うてたよ？
彼氏はいっぱいいたいけど」

「ふうん」

「興味ある？」

なんだそりゃ。妬いてんのか？……なんて答えて良いやら。

「別に。それより、さっさと出て、何か食べに行こう」

あからさまに話を変えたけれど、彼女は黙って頷き、着替えを持って洗面所へ向かった。妙に聞き分けが良くて、ちよっとおかしい感じだけだ。

どうも、釈然としない。

釈然としてないのは、ティアスも一緒か。何だろな、この微妙な距離感。もつと近付いても良いと思っっているのはオレだけなのか。多くを求めることの出来る立場ではないと判ってはいるけれど。

いや、立場は良いだろう。オレはフリーなわけだし、ティアスも別に誰とつき合ってるわけでもないんだし。別に何がどうなるかと、つかなくてらんだし、良いだろう。そもそも、誰かに彼女と一緒にいるところを見られて困るのは、オレだけなわけだし。いろんな意味で。オレが見られて困るって言うのが、おかしいのかもしれないけど。

軽く朝食を食べたあと、彼女の誘導で地下鉄の駅に向かう。案の定、地上部分は復旧作業中だったけど、地下部分は動いていた。名駅の近くに出来た複合施設内の地下にあるジャズクラブに行きたいというので、満足に移動できない彼女のために、オレがそこまで連

れて行くはめになる。

良いんだけど。この、彼女は使えるものを使っていて、自分はそれに使われている感覚って言うのは、あんまりいい気分ではないな……。彼女が心配にはなるけれど。だけど、それとは少しだけ違う気もする。

ティアスのこと、好きだとは思っけれど。何かが引っかかってる。それがオレの持つ、彼女への距離感なんだろう。

「来たこと無いの？名駅」

地下鉄の駅を降りて、きよろきよろと辺りを見渡す彼女がおかしくて、思わずそう突っ込んでしまった。

「ん……最近、こっちに来たときに乗り越して来ちゃったことはあるよ。後で灯路に聞いたたら、ここで乗り換えても良いって言われたけど。昔、こっちに来たときと、随分変わってるんだもの」

「昔？どれくらい？お前、あちこち転々としすぎてて、どこにどれくらいいたかわかんねえし」

「この辺にいたこともあるよ？その時は、義兄さんと一緒に、灯路の家にお世話になってた。テツはずっとこの辺なの？」

「ああ……いや、母親が死んですぐくらいに、ヨーロッパの方に少しだけ住んでたって言ってた気がするけど、あんまり覚えてない。

その話がホントなら、オレ未だ4歳くらいだしな」

「そうなんだ。そのころ私もイタリアにいたよ？父さん達が未だ生きてたところで、義兄さんがちょうど寮に入ったところだったから、よく覚えてる」

そういや、コイツの兄貴の話を聞くことって無かったな。最初のころはブラコンだの何だのと新島に言われてたけど。

「お前の兄貴って、何やってんの？」

「……えっと……とれーだー？」

「何でそんな不安そうに言うんだ。よく判ってないのか？お前んちの収入源だろうが。何の勉強してんだ。寮に入ってたってことは、どっかの学校に行ってたってことだろうが」

「何でいつもそう喧嘩腰なのよ。そのころは未だ5歳とかだし、判んないわよ。兄さんはいろいろ教えてくれたけど、自分のことはあまり言わない人だし。……えっと、たしか地政学だった気がする」

よくわからん。聞くんじやなかった。知識の無さを露呈したって、ろくなことにならないし。まあ、ティアスも判らなくて、オレも判らないならそれでいい気もするけど。

彼女の手を取り、地下街を歩いて、地上に向かう階段を登る。電車は止まっているはずなのに、思ったより人がいた。

「あそこ、何があるの？見にいこ？」

駅前のロータリーの先に、ツインタワーの広場があるのを見つけ指さしていた。

「イルミネーションがあるだけだって。こんな朝っぱらから行っても仕方ないだろうが」

彼女に引つ張られるままエスカレーターを昇り、広場を廻る。暗くなったらもう一度来ようと約束をしたら、嬉しそうに笑った。彼女と一緒にいる1日が決まったことが、オレも嬉しかった。それで充分な気もしていた。

入ってきたエスカレーターとは別の出口から出て、ビル内に入る。タワーの高層階にあるホテルに直結してるエレベーターが並んでいた。雪なのに人が多いと思ったら、ホテルの客だったようだ。

夜中に止まった交通機関が少しずつ復旧しているところだからか、それとも端にチェックアウトの時間だからか、エレベーターから出てくる客が多かった。

「……愛里？」

エレベーターから出てくる客の中に、一際目立つ派手なスーツケースを転がしながら歩く愛里の姿があった。一人みただけど……。向こうもオレに気付いたらしく、笑顔で近付いてくる。

オレの隣に、ティマスはいなかった。

第4話 (the heads) 後編

「どうしたのよ、こんな所で、きよろきよろしちゃって。学校は？」

愛里は、ついさっきまでオレの隣にいたティアスには気付かなかったようだ。オレの行動を不審がりながら、簡単にオレの腕に触れる。

辺りにティアスはいなくなっていた。と言うより、人が多すぎて、どこを見て良いか判らなかった。

「大雪警報で……」

「ああ、そうよね。おかげでこんな所で足止め食らっちゃったんだ。テツは一人？」

戸惑っていたのは、おそらく5秒くらいだったと思うけれど。だけどその時間が、オレには酷く、重く長く感じられた。

「いや……ツレとはぐれたんだけど」

「そうなの。あんまりテツキに心配かけさせないようにね。最近、あんたが出歩くことが多いって、ばやいてたから」

愛里の口からオヤジの話を聞くことが、どんなにオレを苦しめるか。彼女は気づきもしない。一番見せたくない顔を、彼女に見せてしまいそうになる。

「どうしたの？」

何でティアスはオレの隣にいない？

愛里の訝しげな表情が、オレを追い込む。この手持ちぶさたで

不安定な左手を、今、ティアスに握っていて欲しいのに。

愛里の存在が、オレを追い込み、突き落とす。胸が苦しくなるその感覚を、思い出すことすら嫌なはずなのに、時々そのせいで、うめき声すら上げている。それを愛里が知ることはないと思うと、その事実がさらにオレを追いつめる。

「何でもない」

ティアスが横にいたら、彼女の手を握っていたら。

そうしたら、この傷みは少しでも楽になるのだろうか。楽になるような気がしているのは、期待のしすぎだろうか。

「オヤジ、いつばやいてたんだよ、そんなこと。オレ、そんなに出歩いてないぞ?」

「そう? あんまり練習もしてないみたいだつて。進路の話もしてないでしょ? 来週の月曜から、またレッスン始めるからね」

そういえば、課題曲はほとんど弾けていない。だって、一人だと指が動かないから仕方ないし。

それにしても、愛里もオヤジもここそ連絡とりやがって。愛里はオレのこと、ホントにどう思ってるんだろう。

「じゃ、あんまりふらふらしてるんじゃないわよ? テッキが心配するから」

ハンドバッグから携帯を取り出しながら、彼女はそそくさとオレの前から立ち去る。申し訳ないといった素振りなど一つも見せないまま。いや、オレの存在がその程度だったことくらい、判ってるんだけど。

悔しいけど、それでもオレは、あの女の心に引っかかりたい。

彼女にオレを見てもらいたい。どんなに振り回されても、どんなに余所を向かれていても、それでも。

「あっち、人がいないよ?」

ティアスはオレの左手を握り、親指の腹でオレの手の甲を滑るように撫でた。その指は、オレの涙腺も一緒に触ってしまったらしい。彼女はオレの顔を見ないように、ぎゅっと左手を握ったまま引っ張って、人混みの中を歩き出した。

一番見られてはいけないヤツに、泣き顔を見られてしまった気がする。しかも、愛里のことなんで。

「……人、いるし」

もう、涙は止まっていたけれど。こんな赤い目でうろろろしたくないし。

「さっきの所よりは少ないでしょ?」

彼女が連れてきたのは、先ほどまでいたテラスの南端だった。所狭しと置かれた点灯前のイルミネーションが壁になって、確かにさっきの場所よりは人が少ないけれども。日陰には未だ溶けていない雪が固まって凍っていて、滑ってしまいそうだ。

「大体、お前はなんでいなくなったんだ?」

「邪魔かと思っで。それに私、あの人に嫌われてるみたいだし」

「だからって、お前がいなくなる理由になるか?」

左手に力を込めた。彼女が痛がったから少しだけ力を緩めたけれど、離すつもりはなかった。

「だって……テツは、佐藤さんのこと」

そう言うくせに。オレも彼女も、どうしてこんなに矛盾だらけだ？
関係ないと言えないオレも。何も言わないオレと寝た彼女も。

「そんなこと……」

「何度も言っただでしょ？知ってるって。否定しなくて良いよ」

「だけど、関係ない」

手は離さない。オレが愛里を好きなことは確かだけど。オレ自身、
バカだとは思うけど。あの女のことをどうしても、心の中から振り
きれないけど。

だけど、ティアスのこととは関係ない。

気が多いだけかもしれない。だけど、この手を離したくない程度
には、ティアスのことを好きだと思う。

多分、昨夜より、今朝より、こうして手を引いてくれた今の方が、
ずっと彼女を愛しく思える。

「イルミネーションが点くまで、どこかで時間潰そうか？私の用事
はもっと夜遅いし」

彼女の提案に、オレは黙って頷いた。彼女が愛里のことを、あれ
以上何も言わなかったことに、自分が甘えているのもよく判ってる。
だけど、さっきまでのように、一緒にいられる時間が決まったこと
を純粋に喜べはしなかった。

彼女と一緒に時間は楽しいし、ちゃんとオレの心は浮き立つけ
れど。だけど何かが引がかかったままだ。その何かは、多分一つじ
やないんだろう。それはオレのせいでもあるし、彼女のせいでもあ
る。

少しだけ変わったような、何も変わらないような、妙な距離感を保ったまま、オレは彼女と時間を過ごす。つないだ手を離す気もなかったし、違和感はあるても、突き放す気はなかった。

そうしながら、彼女の用事というヤツを聞いた。今夜、あの音無悠佳がライブをするらしい。そこに佐伯さんと一緒に行く約束をしていたのだという。

そんなところにオレが着いていって良いのか？と聞いたら、彼女は一緒に来て欲しいと返した。それがオレの心を少しだけ軽くする。不安定だけど、彼女にとって必要だと判る言葉が、オレの存在を明確にする。

ライブの話から、やっと自然に音無悠佳の話を聞くことが出来た。彼女は、彼を追いかけてこつちへ来たらしい。それくらい彼女にとって、音楽をする上で、彼の存在は大きいようだ。佐伯さんも、賢木先生も、その支援のために力を貸してくれているのだという。もちろん、その礼というのはおかしいが、賢木先生にも、佐伯さんにも、それなりのことをしているとは言っていたけれど。

音無さんは、活動の拠点を急に日本に戻し、しかもこの名古屋近辺ばかりに出没するようになったらしい。オヤジも賢木先生も、神出鬼没だとは言っていたけれど、出没するなんて言われ方もどうなのか。

連絡を取っているのにちつとも会えない、だから会いに行くのだと彼女は言っていた。元々、佐伯さんも音無さんとは知り合いらしいけど、それでもなかなかつなげないらしい。オヤジとは普通に連絡を取っていたみたいだから、妙な話もあるモンだと思った。

佐伯さんの話が出たときに、オレに何か言いたそうにしているのが少しだけ気になった。未だ何か、言い出せないこともあるんだろうか。オレにまた、少しだけ距離を感じさせていると、彼女は判

っているのだろうか。

オレの悪い癖だとは思うけれど、いやなことをイメージしてしまう。家に帰ったらまた御浜と秀二がいて、それは普通のことなんだけど、うっかりティアスの話になんかなりして、御浜の口からまたオレの知らない情報やら、オレが知ったばかりのことが出てきたりするんだ。それが、思った以上に辛い。

オレの持つ違和感の正体は、こんなにも明確だ。思っていた以上に簡単に彼女の体は手に入ったのに、彼女との距離が縮まった気はしない。むしろオレだけが、どんどん深みにはまっていく。間拔けな話だ。

素直に、彼女もオレのことを好きなんじゃないかと、オレはどうして思えないんだろう。それならば二人で、全てから隠し通せばいいんじゃないか？そうできたら、オレにとって一番良いんじゃないのか？

あちこち歩き回って疲れたのと、小腹が空いたからと、百貨店の2階にあるカフェに入る。賑わっている店内だったが、窓際の席に案内された。雲の隙間から夕陽が差し込んでいるのが、窓から見えた。また雪が降ってきてそうな、不穏な空模様だ。けれど、平日と言うこともあるし、昼間は比較的穏やかな天気だったせいかな、人通りは結構多い。

明らかに、カップルにしか見えないだろうな、オレ達は。窓際の席はペアシートになっていて、二人で横並びに座ることになった。普段もそうしてるけど、改めてそう見えているのだと思うと、少しだけ戸惑う。彼女がオレの左側にいることは、なんの違和感もないのに、不思議な感じがした。

「……実はね」

彼女は真剣な眼差しでメニューを見つめながら、重い口調で呟く。

「何だよ……その……」

「私、あんまり甘いものって好きじゃないのよね。女子なのに」

「……心臓に悪い。お前、出されたもんは食うけど、相当偏食だよな。あと、味覚がおっさん」

「何よ、テツだって偏食じゃない。味覚がおっさんなのはお互い様だし。でも、たまにはこういう可愛い店も入ってみたいのよ。テツ達みたい」

その「達」にはオレと愛里が含まれるわけ？

そういやティラスとは大抵、外でそのまま会つか、夜遅いからファミレスとか、クラブとかだったからな。昨日は愛里がいなかったから、二人でスタバにいることになったけど。

「別に、一緒に行けばいいだろうが。レッスン無くても、オレはあの場所にいるし」

彼女は黙って微笑む。彼女の膝の上で手を握ると、握り返してくる。何もなかったように、オレは再びメニューを見るよう彼女に促す。

「ティラス。オレ達、これから……」

答えが欲しい。確証が欲しい。

この握っている手の、この温もりに、何も考えずただ甘えたい。彼女がオレと同じ思いなら、オレ達うまく行くんじゃないのか？

「これから……？」

彼女がオレを握る手に、力を込める。

一瞬目を伏せ、照れたようにも見えたけれど。彼女は上目遣いでオレを見つめた。

「これから……」

こんな台詞、自分で吐いたことなんて無いから、なんて言っただけで判らないけど。

どうしても、彼女の手を強く握ってしまうけど。

「ティアちゃん、ここにいた。背中向けてるんだもの、わかんなかった」

彼女の肩を、佐伯さんが軽く叩く。オレと二人でいることを当たり前のように扱う彼女の態度に、オレも彼女も手を離さなかったけれど、オレの台詞は完全に止まってしまった。

むしろ彼女の登場にほっとしてしまったオレは、やっぱりただずるいのかもしれない。

オレはどうかしている。冷静に考えて見る。何一つ、オレの心を蝕むモノは、無くなっていないのに。

蓮野の件も、彼女自身の心の件も、愛里の件も、何より御浜の件も。にも関わらずうまく行くわけがないのに。

「邪魔しちゃったみたいね。もうちょっと後で来ればよかったかな」
「少しだけね。でも、もう時間でしょ？早く行きたい」

どっちだ、それは。ホントに一緒にいたかったのか、オレへのたんなる気遣いか。

「そんなに楽しみ？ライブ」

「ええ。あいつに挑戦状をたたきつけてやれるかと思うとね」

「……おいおい。何しに行く気だ」

何か、「憧れて」とか「好きで」と言うのとは、ちょっと違う気がするな。何だ、挑戦状って。

サエキさんに誘導されて連れられたライブハウスは、思ったより小さなハコだった。入口の前で新島が待っていたのが妙に照れくさかった。彼を連れ立って4人で中に入ると、思った以上に人がいた。何とか壁際を陣取り、そこで落ち着く。

「沢田くんは、音無さんのライブって見たことある？お父さんのお友達だって聞いているけど」

「面識はありますけど……彼が歌っているのも弾いているのも聞いたことがないです。CDでなら。会ったのも、子供のころですし。父は連絡を取ってるようですけど」

「気まぐれなんでしょ？あの人」

「みたいです」

「日本に拠点を置いたくらいから、気まぐれ度が上がってるのよねえ。いいかげん、いい年なんだから、落ち着いたかと思ったのに。彼のマネージャーも嘆いてたのよね」

気まぐれ度で……。まあ、人間関係が適当な印象は拭えないよな。そのわりには、蓮野の件ではすぐに動いていたみたいだし、オヤジが電話して、会えないにしても捕まらないことはないし。

「落ち着いたんじゃない？一カ所に留まるなんてこと、今まで無かったし。しかも、自分から出ていった日本によ？」

音無さんに会えるからか、ティアスは少しだけ興奮気味に吠えていた。……オレと寝た後だって、そんな風にはしなかったじゃねえか。むかつくな。

「そうね。そうかもね」

「何か、腑に落ちないって顔よね」

ティアスの言うとおり、彼女は納得がいかないようだった。

「元々、勝手な人だったけど。だけど最近、酷い気がするのよね」

彼女を見つめるティアスの顔を、思わず見てしまった。

「何？どうかした？」

「いや。お前はそうは思わないんだと思って」

「カナみたいに、音無のことを知ってるわけではないもの。あのね、テツ……その……」

ティアスがオレに手を伸ばし、触れた。その様子を見て、新島が意図不明な笑みを見せたのを確認したとき、照明が落ちた。ステージがライトアップされ、音無さんが現れた。

オレは、ステージを見ることが出来なかった。ステージからの強い光が、ティアスを時折照らす。その瞬間を、オレは食い入るように見つめる。音無さんのピアノは、まるでオレの鼓動のようにリズムを紡ぎだし、ステージを揺らす。彼女を押さえるように、オレに触れたままの彼女の手を取り、握りしめる。

挑戦状だなんて、ただの彼女の照れ隠しでしかない。彼女はこんなにも、彼に、彼のピアノに焦がれている。オレと一緒に歌ったあの姿は、なんて冷静で、なんて他のものに振り回されていたのか。悔しいけれど。だけど、オレもまた、彼の音楽に振り回される。だけど純粹に感動なんて出来なかった。オレにない、何かを動かす力を彼は持っている。比べることすら烏滸がましいのかもしれないけれど。

「すげえな。ピアノだけなのに。何か、オレはこういうのよく判らないけど……」

曲の合間に言葉を探す新島に、佐伯さんは笑顔で応えていた。それに新島もほっとした顔を彼女に見せる。二人が見つめ合っている隙に、オレは黙ってティアスの手を離す。再び、曲が始まり、彼らの意識がステージに向かうと同時に彼女の手を取った。

彼女の手が熱を運び、汗ばんでくるのが伝わる。オレはその部分だけ、妙に冷静な気がしていた。理由は判ってる。『悔しい』だなんて、ホントは思いたくもない。世界が違いすぎるのに。

プログラム通りに6曲を終え、彼は引っ込んだ。アンコールの声に応える気はなかったようだ。客もそれを判っているのか、声が拳がったのはひとときで、今はやんでいたが、熱気は収まらなかった。

「バックヤード行こうか？アポとってあるのよ。ティアちゃんのことも、聞いてるって言ってたから」

佐伯さんの誘導で、彼女と一緒に彼を訪ねることになってしまった。良いのか？こんな簡単に。

オレの不安などお構いなしに、彼女たちはオレを引っ張る。新島に助けを求めたが、彼は彼で自分のことではいっぱいだった。

「音無さん。この間、話してた子連れてきたけど……」

順に入った、狭いハコの狭い楽屋には音無さんと一緒に、オヤジと和喜さんがいた。オレは和喜さんに会うのは久しぶりだったけれど、オヤジとはよく連絡を取り合っているみたいだし、音無さんとも共通の友人みたいだから、一緒にいるのは判るけど……。

「オヤジ、何でここに?!」

「それはこっちの台詞だ。こんな日に、何でこんな所をうるついでる?」

「大雪警報で休みだし……」

と、新島と佐伯さんに助けを求めてみたが、オレが制服を着てる理由にはならなかった。

「ごめんなさいね。こんな雪の日に息子さんを連れまわしてしまつて」

「あなたは……?」

不審そうに佐伯さんを見るオヤジに、後ろから音無さんが耳打ちをした。どうやら彼女の説明をしたようだ。でかい声で言えばいいのに。

「どこかで見たことがあると思ったら。プロデューサーをされてるんですね。音無が、今日あなたとアポがあったと」

「ええ。こんな所で鉄人くんのお父様と会えるなんて、奇遇ですね。でも、ホントによく似てらっしゃる」

さりげなく、自分のせいにくれた佐伯さんには、もう頭が上がりないかも。ホントはティマスと泊まりだったとは、いくら家が

それなりにオープンな家庭とはいえ、言えないぞ。

「……鉄城の子供、こんなにでかかったっけ？嫌だな、年感じるなあ……。なあ、悠佳？」

和喜さんの問いに、音無さんは不思議そうな顔でオレを見るだけだった。音無さんはともかく、和喜さんとは少なくとも高校入ってから会ってるはずだが。

「コイツ、最近物忘れが激しいんだ。音無、オレの息子の鉄人だ。今年１７になる。……何でこのメンツで来たかは知らないが……」
「彼女、デビュー前に、音無さんともう一度話がしたいって。何度か私からも、彼女からも連絡していたと思うけど」

……でびゅー？デビューで、何？聞いてないし。どういうこと？

「オレからも、賢木からも連絡したな、そう言えば」

オヤジがちらつと音無さんを見るが、彼は黙ったまま。この人、何か不思議な人だな。

「なんで？なんで何も言わないのよ。ベルギーにいたときは、もうライブはしないって言ったのに、日本で始めてるし。リヨウにもそう言ったくせに、嘘ばかりじゃない」
「覚えてないって言ってるぞ」

あくまで、オヤジにしか聞こえないくらいの小声で喋る彼に、彼女は苛立ちを隠せないようだった。オレが、彼女の口から出てきた男の名に、同じように思っているとも知らずに。

「覚えてないって?!」

「まあまあ、ティアちゃん。そんな喧嘩腰に話してたら、相手がびっくりしちゃうでしょ?」

「喧嘩腰じゃないよ」

喧嘩腰だよ。だから一体何があったんだ。

「お前、ホントに物忘れ酷いのな。オレは覚えてるけど。こんな可愛いのに」

苦笑いしながら彼女のフォローをする和喜さんに対しても、彼は黙って首を振るばかりだった。何か子供みたいな人だと思うのはおかしいだろうか。オヤジよりも年上なのに。

「お前、この子のプロデューサーをするように、随分前に言われたろ? 途中まで乗り気で、蓮野弟ともこの子とも連絡とって、偉そうにピアノ弾いたり歌って見せたりしてたろうが」

「私も随分、連絡させてもらいましたけどね。日本でのコーディネーターも引き受けるって、マネージャーさんとは話が付いてましたし……」

オレが思ってる以上に、でかい話になってないか? それに、蓮野遼平の名前も出てきてるな。ずっと元カレだと思ってたけど、さっき言ってた「デビュー」がらみの存在ってことか? いやいや、それはきっかけでしかなくて、そのままつき合ってたなんて話はいくらでもあるし。

「そっぴや、遼平もコーディネーターみたいな仕事をしてると聞いてたけど。それで賢木が、この子を大学で教えようとしてたってことか。間に合わなかったみたいだけど。……お前、何でここにいる

んだ？」

オヤジのしつこい疑問はごもつとも。

「……成り行き？」

オレにもよく判らないけど。

「違うもん！見てなさいよ？私は、別にあなたの助けなんかいらないんだから。テツと一緒に舞台上立って、歌うもの！」

オレの腕を引っ張り、高らかに宣言をする。

「聞いてないぞ、オレは……」

この場で怒鳴らなかったオレは、ホントに大人だと思った。

「悠佳、車の用意、出来たから。さっさと準備して」

小声で良いから、冷静に釘を差しておかなければと思って、彼女を睨み付けたとき、楽屋に一人の女性が入ってきた。確かオヤジの友達の「久方みず木」さんだ。もしかして音無さんのマネージャーって、この人？

「佐伯さん、申し訳ないんですが……」

久方さんに声をかけられた佐伯さんは、ちらっとオレと彼女を見てから

「ええ。ごめんなさい、また日を改めますわ。私に直接でも、マネージャーを通してもらっても結構ですから、是非また。しばらくこの辺りを廻るんですよ？」

「ええ。でも、明日は関西方面へ。思ったより外に人が多いので、騒ぎにならないうちに出たいので。本当に申し訳ありません」

深々と頭を下げる久方さんは、やっとオレに気付いたらしく、目を丸くしながらオレに近付き、まじまじと顔を見つめてきた。

「……鉄城の子？大きくなったわね？何で？連れてきたの？」

「違う違う。佐伯さんについてきたんだ。一昨年、会わせなかったか？」

「だって、こんなに大きくなかったよ。かわいそうに、鉄城なんかに似ちゃって。鉄人くんだけ？鉄城はこの子と一緒に帰るの？車用意してあるけど」

「いや、そっちについてくよ。珍しく全員揃うしな。それより……ティアス、蓮野の兄が遺品を持って日本に戻ってきてるけど、来るか？」

そう言えば、蓮野の兄とオヤジ達は仲が良いんだっけな。おそらく、彼も海外にいたのだろう。オレは面識がない。弟に似てるんだろうか。

「……いい。ありがとう。私より、孝多に連絡してもらっても良いですか？」

「ああ、遼平のことを伝えてくれた子か。それは構わないが。しかし、火葬にしてもらって、お骨も持って帰ってきてるそうだが、良いのか？」

彼女は黙って首を振った。

その姿に、何故だか燻っていた怒りの火が、強くなったような気がしていた。さっきの、オレと一緒に舞台に立つて言う発言も問いたださないといけないし。その怒りも相まって、オレはどうしても冷静な顔が出来なかった。

慌ただしく出発の準備をしている音無さん達を後目に、新島がオヤジに蓮野のお骨の話を聞いていた。おそらく、芹さんに先に連絡をするためだろう。

蓮野の兄、太平さんは、弟と一緒に暮らしていたベルギーに彼を埋葬しようと考えていたそうだ。しかし名古屋に、離婚して両親と一緒に暮らしていた母親のために、火葬してお骨を持って帰ってきたらしい。母親をあちらに呼ぼうと思っていたらしいが、弟の件もあり、彼女のたつての願いで、転職してこちらに戻ってくるそうだ。オヤジは彼の墓の場所も教え、芹さんとティアスに墓参りに来るように言っていた。

わざわざ日本に来た芹さんの思いや、オヤジの言葉から受取れる蓮野への思いや、ティアスの彼らへの思いは判らないでもない。理解できないわけではない。そう思う。けれどやっぱりオレは蚊帳の外で、その状況に追いやっている彼らの行動が不愉快だったし、何より蓮野遼平という男が不愉快だった。もう、死んでしまった男だというのに。

目の前のティアスも、オヤジも、彼の回りの人間全てが。勝負したわけでもないのに「勝ち逃げ」されたような気分だ。

「おい、久方。あの子は結局どうなんだ。賢木に聞いても、埒が明かないし……」

恐らくさつきティアスが言った、オレと「一緒に舞台に立つ」と言う発言の件だろう。オヤジがオレの様子を伺いながら久方さんに聞いているのが判ったので、オレも彼らは視界に入っていたけれど

見ないようにしていた。

オヤジは、オレが「舞台に立つ」なんて望んでいないこと、よく知っているから。望んでいたら、オレはもっとまじめにピアノに取り組んでいたはずだから。

「悠佳があの子の調子なのは知ってるでしょう？あの子のプロデュースをするって言う話があったんだけど……」

「うちの子は？」

「あっちに聞いてよ」

「みず木！」

いつの間にか部屋から出ていた音無さんが、外から彼女を呼ぶ。その声に、久方さんは「やれやれ」といった顔を見せ、オヤジを引っ張って外へ出た。

あわただしく出て行った大人たちに、オレの隣で新島がため息をついていた。

「ちょっと遅いけど、みんなどこかでご飯でも食べて戻りましょうか？」

「……でも、音無が」

「ティアちゃん」

「だって、リヨウが……」

「ティアちゃん。他にも色々方法はあるから。私は、何もなかったような顔、しないから。行きましょう？灯路くん、ティアちゃん連れてってくれる？私、店をとっておくから」

その不思議な台詞に、新島は当たり前のように頷き、彼女を連れ、オレと佐伯さんを残して楽屋を出た。

佐伯さんがオレに話があるのは判ったけれど、それを簡単に受け入れ、彼女のために動ける新島のことを、少しだけ尊敬した。

「オレに何か？」

「あら、早くて助かる」

からかうような口調に、ちよつとだけ腹が立った。

「ティアちゃんに、どこまで話を聞いてる？」

「……多分、何も」

「そう。それは、不愉快にもなるわね。でも、聞いてる話と随分違うのね。私は、あなたの態度はとても落ち着いてるし、大人だと思つたわよ？」

「聞いてる話って何ですか。この間も少し聞きましたが、僕はろくなことを言われてないようですけど？」

彼女が煙草に火をつけたと同時に、ライブハウスの関係者らしき人が現れ、出るように声をかけてきた。それに従い、廊下に出る。

煙草を噴かしながら、彼女は廊下の壁にもたれ、オレを見つめる。新島がこの人ときき合ってる理由が、それだけでもよく判る。この女は、ずるい女だ。

「ティアちゃんに言わせると、すぐ怒るし、すぐむつとするし、常に喧嘩腰だつて。だけど、あなたは充分大人の態度が出来るし、怒りを隠すことも出来る。１７歳の男の子が、あんなに年の近い父親の前で、あの態度はなかなかしないわよ。お父さんの方が遠慮しちゃってるじゃない？まあ、片親だからって言うのもあるでしょうけど」

「そうですか？父は、いつもあんな感じですけど。誰に対しても」
「そう？私も娘にはちよつとだけあんな感じかな。うちの子は君ほど大人じゃないけどね。子供過ぎて、ホントはどうしてほしいのか、わからないもの。その点あなたは、大人の付き合いができてるよう

に見えるけど」

言いたいことが言えないだけなんですけどね、端に。別にオヤジだって、オレの言いたいことがすべて判ってる訳じゃないし、すべて判ったら困るっつーの。

「話が前後しちゃって混乱させちゃったわね。ティアちゃんのせいだけじゃないのよ。私からもきちんと説明が出来ればよかった」

「でも」

「あの子、ちょっと感情的になっちゃうところがあるからね。特に遼平くん絡みのことでは」

いや、その一言余計だし！！何で蓮野絡みのことであの女が感情的になるのか、はつきりしろ、そこそこ！

オレの心の声でも聞こえたのか、佐伯さんは苦笑いを見せてから、ちらつと廊下の先を見た。

「……そろそろ行きましょうか。待たせすぎても悪いから。何が食べたい？」

オレの背中を押す彼女の言葉に、応えられなかった。

ならどうして彼女はオレと寝たんだろう。もしかしたら、オレをコントロールするためにか？

オレに目を付けてて、オレと一緒に舞台に立ちたかったけど、オレがそれを嫌がるのが目に見えていたから？だから？

「私は、良いと思うよ？君とティアちゃん。二人とも舞台映えするし。何より、ティアちゃんがやっと気に入ったピアニストなんだから」

オレの何が良いのかも判らないのに、「気に入ったピアニスト」なんて言われても、納得いくわけがなかった。

彼女の口から、彼女の思いを聞きたい。オレの納得のいく答えを。

しかし外で待っていた彼女は、そんなことは既に忘れてしまったかのようにオレ達に笑顔を向けた。全くもって意味が判らん。何でそう言う態度が出来る？

何でオレばかり？ 何も判らず、こんな風に悩んで、悔しくて、重たいし、いろんなもの捨てたいのに。結局何一つ捨てられず、オレの中にだけ、わだかまりのようなものを残したままなのか。

新島がタクシーを捕まえてる間、ティアスは佐伯さんと何かを話していたようだ。オレが少し離れて、彼女達を遠巻きに見ていたら、ティアスが近付いてきた。

「……テツ、ごめん。怒ってる？」

佐伯さんに何か入れ知恵されたろう、お前は！

……と言つてやりたかったが、それも大人気ない。つか、バレバレだよ。しかも、バレバレなのに、思わずくらっと来ちまったじやねえか。

オレはホントにバカだな。判つてて、どうしてこういう振り回すタイプの女にばかり惚れるのか。可愛くて、スタイルよくて、気が強くて、我が強くて、自己中で、だけどちょっと抜けてて。こんなまんま、愛里だし。オレは一生、あの女の呪縛から逃れられないのか？

だから今朝だって、あんなに簡単に泣いたりしちまうんだ。最低だな。

『テツ、ごめんね！。怒ってる？』

愛里も、こんな風にオレが本気で怒っていると、機嫌を伺いに来たんだよな。ちょっとだけ怖々と。オレはその彼女の「本気」が怖くてどうしても、「怒ってる」って言えなかった。彼女が本気で怖がっていればいるほど。

だって怖いじゃないか。その後の反応が。「もういい」なんて言われたら、オレは多分、地味に立ち直れない。

「何で、怒ってると思う？」

だから、正直怖かったけれど。以前より、今の方がずっと怖いけど。

彼女との距離が近づくほど。オレの彼女への思いが強くなるほど。でも、ティマスと愛里は違う。違うと思いたい。しかし、「一回寝たぐらいで」とか言われたら、身も蓋もない。

「あ……やっぱ、ホントに怒ってた？」

「やっぱってなんだ、やっぱって。お前は、とりあえず謝ればいいと思ってただろう？ 佐伯さんに言われて」

よし、言ってやった。てか、意外とあっさりした反応じゃないか。ホントに怒っても逃げられないのか？ つか、オレはなんでこんなにびくびくしてんだ。コイツが悪いし、腹が立ってるのはホントなのに、恐怖の方が大きくなってる。

「でも、テツが怒ってるのは判ったから。カナが、私のせいだって言うから」

ああ、そう。だから謝りに来たのか。バカなんだか可愛いんだか。

「何で怒ってるの？」

「……ホントに心当たりの一つもないとでも？」

あるけど、言いくいって顔してるぞ。何つー判りやすい。

「……判んない」

「判んないのにその顔かよ」

バカで可愛いけど、女はずるい。オレの心はメチャクチャになる。振り回されて、疲弊しきってる。愛里もティラスも、オレのことをなんだと思ってるんだ。

こついうの、怒ってるって言うのか？頭の中が熱くて、もう何も考えたくない。

「判んないなら、いい。オレはお前と舞台に立つ気なんて、さらさら無いからな」

このときオレは、舞台がどうとかなんて、ホントはどうでも良かったけど。後で冷静に考えたとき、色々面倒なことが多すぎて、そう言っておいて良かったって、心底ほっとした。

結局あの後、舞台に立つたの云々の話は、オレのご機嫌を伺っていたのか知らないけれど、彼女たちの口から出ることはなく、普通に食事をして再びタクシーに乗った。オレの家まで送ってくれたのだが、そんなに遅い時間でもないのに、家に電気はついていなかった。

また後日。別れ際、そう言ったのは佐伯さんだった。ちゃんとピアノを聞かせて、と付け加えて。

もちろん、練習しに来るよね。オレの返事を聞く気のないティアスの捨て台詞を残し、タクシーは走り去った。

愛里がオレを振り回すように、ティアスもオレを振り回す。同じようにオレの心がきちんと息苦しくなっているのが、余計に腹立たしかった。

溜息をつきながら顔を上げると、向かいの玄関に秀二と御浜が立っているのが見えた。みんなで一緒に帰ってきて、助かったような面倒なような。

「……どういうことですか、あれ。佐伯佳奈子じゃないですか」
「言わなかったっけ？ティアスの話」

御浜は、ホントにどこまで知ってるんだろうな、ティアスのこと。

「テツ。柚乃は今日は帰りが遅いそうですから。何か食べますか？」
家の管理人か、お前は。

「いや、いい。佐伯さんに奢ってもらったから。牡蛎食ってきた」
ポケットを探り、家の鍵を弄びながら玄関に向かう。その後ろを二人がついてくる。

「どういうことですか」
「佐伯さんはティアスのプロデューサーだよ。オレに、彼女の後ろでピアノ弾かないか、ってさ」
「テツみたいに、ろくに練習もしてないヤツにですか？妙な話ですね」

五月蠅いな。してないんじゃないかって、出来ないの。……とは言え

ないけど。

玄関に上がり、コートを脱いで、リビングに向かうため廊下を進む。

「その話、受けたの？」

後ろからついてくる御浜の声は、少しだけ不安気だった。その理由は、今のオレには判らない。

「そんな気はありません。お前、もしかして、ティアスから聞いた？」

「うん。でも、テツはコンクールも苦手で出ないくらいだから、難しいんじゃないかなとは言っておいたけど」

やっぱり。御浜は御浜だけど。

御浜の彼女への対応は間違ってるし、事実を言ってるし、あらかじめ断っておいてくれたのはありがたいはずなんだけど。はずだけど。何でティアスも御浜も、そう言うことを言わないかな。ティアスとはともかく、御浜に限って。

いや、原因は分かっている。ティアスのことだからだ。オレが彼女との間にあったことを、どんな小さなことでも細心の注意を払って伝えるように、彼も、そこまでではなくても、そう思ってる部分があるはずだ。はつきりと、彼がそう言ったわけではないし、どこまで疑ってるか判らないけど、オレに釘を差す程度には、オレのことを彼女がらみの件に関しては警戒してるはずだ。オレがそうするよ
うに。

でも、オレが彼を警戒するのは、何も彼から彼女を奪おうとしてるわけではなくて……。いや、もう、何をどう言っても言い訳になるな。言わなきゃ良いんだ。もう近付かなきゃ良い。1度や2度のこと、黙っとけば無かったことになる

「その話をしてたんだ？」

オレがピアノの椅子に座ると同時に、彼らはソファに座った。御浜の視線を真正面から受けるのは、ちょっと今は辛い。

「いや。音無悠佳のライブがあるから、見に行こうって言われただけ。でも、音無さんは、うちのオヤジ達と一緒に、蓮野のお兄さんに会いに行つたみたいけど」

「そうなんだ。お兄さん、こっちに戻ってきてるんだ」

「何か、遺灰を持ってきて、実家に戻るとか何とか。新島が聞いた話を少し聞いてただけだから、何とも」

多分オレが知ってることなんて、彼は全て知ってるのだろう。こんなに簡単に話を通じることが、こんなに不愉快に思ふ日が来るとは思わなかった。

「なら、ティアスもそっちへ？」

「いや、親父が声をかけてたけど、断つてた。代わりに芹さんに連絡するって」

「やつぱりそうなんだ」

「やつぱり？」

オレには納得がいかなかったことを、彼は簡単に納得する。目の前の御浜が悪いわけじゃない。あの女が悪いって判ってる。判ってるのに。

「うん。ティアスさ、蓮野さんと約束したって言ってたから。彼に、彼のことを忘れるように言われたって。長くないことを彼自身が知っていたことを、彼女は知っていたし、知っていたからこそ彼の側

にいてあげたかったけど、彼がそれを拒んだ。そう言ってた」

「『いてあげたかった』って、デキてたってこと？」

「そうとは言わなかったけど、そうだろうね。その話を聞いたとき、さすがにオレも何も言えなくてさ……」

まあ、元カレの話をさらつと言われたわけだから、普通に考えてショックだろうよ。もう少し気を使えよ、あの女は。御浜がティースに気があるのなんか、バレバレなのに。

そもそも気を使ってるなら、オレとホテルには行かないか。オレとの行為のことを話している素振りは無いけれど……どうしよう。

「音無さんの名前は聞いたことがありますよ、先輩から。奥さんと結婚する前から仲の良い友人の一人だって。賢木さんも確か共通の友人ですよ。先輩に紹介してもらったんですか、あなたが？」

オレと御浜の微妙な会話をどういっつもりで聞いていたのか、秀二は最初の話に無理矢理引き戻してきた。

「んなわけない。親父達がいたのは、たまたまだって。元々、音無さんにプロデュースしてもらった話だったらしい。周りの人たちもみんなそれ知ってたし。その話が、音無さんの心変わりで無しになつて、佐伯さんがティースのバックにいる今の状況なんだと」

「なら、あなたに舞台に立つように言っただのは、佐伯佳奈子なんですか？」

「どうだろ……」

「ティースだよ。佐伯さんは、ティースを待っていてくれてるって言うたから」

言葉にならなかった。

ティースがオレを選んだということを彼に言っただけという事実と、

オレに言わず彼にだけ言っていたという事実。物事は側面次第で、
こんなにも違うのか。

彼女がオレを求めていたことの嬉しさと、彼女のずるさへの怒りと、
彼と彼女の仲に対する嫉妬。オレはもう、処理しきれない。

「チャンスって気がしますけどね。やれるときにやれることをやって
おかないと、年をとったときに後悔したりしますよ」

「お前が言っと、重みがあるな」

「余計なお世話ですよ。私は、そんなに世渡りもうまくなければ、
チャンスもなかった。地味に努力して、今の場所にいますから。そ
う思うと、若くて、チャンスにも恵まれているあなたが、一時の感
情でそれをフイにするのはもったいない気がしますね。あなたはこ
のままピアノを続けて、どうしたいんです？」

ちょうど2年前、秀二は高校受験を目の前にしたオレに同じコト
を言った。もしかしたら、親父に何か言われていたのかも知れない
し、ただの老婆心からかも知れない。真剣にピアノをやりたいなら
コンクールにももつと出るべきだし、進路も考えた方がいい。それ
は、愛里にも言われていたから充分判っていた。だけどオレは、そ
れを先延ばしにすることを選んだ。

ただ愛里の側で、ピアノを弾ければ良かった。コンクールは苦手
だったし、その苦手を乗り越えてまで何かを手に入れようと言う欲
求は、その時のオレにはなかった。

「チャンスかもしれんけど、そうじゃないかも知れない。あいつら
がどうしたのかも判らず、オレの何を気に入っただのかも判らず、た
だティラスのおまけとして扱われることが、オレにはチャンスとは思
えない。ティラスの音無さんへの対抗心を満たすためのだけの道具
かも知れない」

「随分、言っじゃないですか」

「……なんかあった？」

心配そうにオレを見る御浜の視線を、今のオレは素直に受け止められなかった。オレは何か、まずいことを言っただろうか。

彼女に対して怒りを感じているのに、一度動いた恋心のようなものがどうしても消えない。それどころかオレを支配し、余計に苦しめる。彼女を切り捨てられない。

そして彼女と同様に、御浜も。

「別に。ただ、秀二がチャンスとか言うほど、具体的な話じゃないってことだ」

「具体的じゃないなら、余計に動いた方がいい気がしますけどね」

彼の老婆心が、オレには重すぎた。

「テツが嫌がることを彼女は知ってたから、提案しづらかったみたいだけど。今まで、いろんなピアニストと組んでみたけど、うまく行かなかったから、どうせなら荒削りで多少技術的に未熟でも、自分が気に入った人と組みたいって言ってたからね」

「お前、何げに酷いこと言ってるぞ」

未熟で悪かったな。発展途上と言ってくれ。

「でも、テツが気にしてるのはそこだろ？何で『オレなのか』ってのは、そう言うことだろ？」

「……まあ」

複雑だ。複雑すぎる。彼女の思いを、御浜から聞かされてる。素直に、彼女の思いは嬉しい気もするけど、彼がその相談に乗っていったことをこんな風に聞かされるのは正直、きつい。嫌味の一つも言

いたいところだけど、怒りにまかせて暴言でも吐いてしまいたいけど、それもオレには出来ない。

彼に内緒で、彼女に触れ続けたことを、激しく後悔している。いやになる。

「いや、でも、オレには向かないし。いいよ。ピアノも、好きで弾いてるだけだし。未熟なのは誰より自分が判ってるし。受験もあるし、練習時間もそろそろ減らすつもりで、あまり弾いてなかっただけだし」

我ながら、うまいこと言うもんだと思った。自分にも御浜にも秀二にも、そして愛里達にも言い訳が立つ。これで良いじゃないか。ティマスにだけは言い訳できないけど、だけど、もうやめないとこんなに彼と彼女は近いのに。体だけのオレに勝ち目はない気がするし、仮に勝ったとして、勝利と引き替えに御浜がいなくなるだけだ。

「もったいないですね」

「秀二がもったいない、と言う意味がよく判らないけど。オレとしては、テツとティマスと一緒に舞台に立ったら面白いかなって思ってただけで。何より、彼女が望んでたし。テツもね」

「オレ？」

「そう。彼女が歌っている姿を、羨ましそうに見てたから」

どうしても反論の言葉が出ず、黙って首を振った。

「賢木先生のピアノを思い出してたろ？」

オレは、彼らの前で譜面を読んだだけなのに。

「彼女がライブの話をする度に、少しだけ悔しそうにしてたの、自覚してる？」

判らない。だけど、息苦しくなるような、締め付ける思いはあった。それが、彼女が他の男と一緒にいることに対してなのか、その行為に対してなのか、彼女の横にいる同じくスポットを浴びる存在に対してなのかは、オレには判らなかった。

恋愛感情なのか、コンプレックスなのか。何れにしろ、彼女がオレの何か欠けた存在であることだけは確かだだけど。

「そんなことは……ないんじゃないか？」

「かもね。オレの見てる範囲だからね」

かもね、とか言いながら、自信たつぷりじゃねえか。ホントに何なんだろう、コイツのこの妙な存在感と説得力。

「テツってさ、考え過ぎなんだよね。しないならしない、するならするで、どっちでも良いし？時期を待つなら待てばいいと思うし」

「何だよ、そこまで言つといて、その突き放した意見は」

「だってそうだろ。そこにただ留まる以外はどうしたって良いんじゃない？だって、自分の責任だし」

「留まるって？」

「何もしない、ってこと。それを自分で選んだのならともかくね」

動くのが怖いから、何もしない、じゃダメだろうか。ダメだろうな。

「あと、嘘はダメかな。練習量を減らしてるって言うのとか。減らしてる人は、10時ぎりぎりまでピアノの前に座ってたりしないしね」

やっぱりばれてる。弾けないのを知ってるとは思ってたけど。

秀二と言い、御浜と言い、何で、オレの行動が手に取るように判るんだ。

「せめて、もつと夜遅くまで弾けると良いのに。未だ何か言われる？」

「言われなくても、近所迷惑ですよ。家までまる聞こえですからね」

ティアスが、家に練習しに来ればいいって、そう言ってたんだ。思わずそんなこと、口が滑りそうになった。

言ったほうが楽かもしれない、とも思ったけれど。だけど、多分、オレはまだ何かを期待していたのだろう。

かすかにだけど、御浜はオレの心を言い当て、その先を（どつちかという）と退路を絶たれた感じが（指し示した。にもかかわらず、オレはこの男を裏切っていいのか？

まあ、答えはNOなんだけど。それはあくまで理屈の問題なんだよな。頭では判ってるんだ。だからオレがこんなに、考えすぎといわれながら、悩んでる。

だからオレは、いつもここに留まることを望んでいるのか。

「御浜。ティアスがどうとか、面白そうとかなしでさ。オレはどうしたらいいと思う？」

「知らない。好きにすれば？」

なんか、答えは判ってたけど……突き放すなーこいつは。

「オレが見てるテツなんて、ほんとのテツの気持ちじゃないと思うし。テツが自分で何とかしたいと思わないなら、何したって意味が

ないし」

「相変わらず、厳しいですね。案外、自分よりも他人のほうが、客観的に自分の事を見てくれるから、正確かもしれませんよ？」

「でも、決めるのは自分だよ」

修二はその御浜の台詞に苦笑いを見せたけど、きつい言葉とは思ったけれど、その通りだとも思った。

「……そういえば、今日はどこに行ってたんですか？先輩に聞かれると困るんですけど」

思い出したように確認をする修二。多分、話を変えたかったんだろう。御浜は多分、答えも出さないし、その態度を変えることもないだろうから。オレを哀れに思ったか。

「音無さんのライブで一緒になったときに、聞けなかったんですか？その後、電話とかは？」

「……そういえば、電源切ってた」

脱いだコートのポケットに入れっぱなしだった携帯を探し当て、電源を入れる。ほぼ同時にメールやら留守電やら入ってきた。最近、こんなのばかりだな。

「どうして、また」

時々、そうやって保護者みたいな顔をするのはずいぞ、修二。隣で御浜が聞いているじゃねえか。アリバイ工作しといてよかったよ。

「ライブだったから。あと、新島んちに泊めてもらってたから。……悪い、ちょっと電話でいい？」

「誰ですか、こんな遅くに」

「佐伯佳奈子」

一応、余計な話にならないように、携帯をもってリビングを出た。

佐伯さんからの電話は呼び出しで、例の、ティアスが住んでるマンションのエントランスに来いというものだった。

オレはティアスに会う意思がないことを伝えたら、会わせるつもりもないと言っていた。いいから来いという彼女に押され、仕方なく、深夜だけ家を出た。なんと言うか、有無を言わせない女性だと思った。親父がいたらどうする気だよ。相手が修二だからよかったものの。

御浜には佐伯さんのマンションに行くとだけ告げた。（ティアスが住んでいる場所のことを知っているかどうかは判らないけれど、怖くて話を出せなかった）

原付で向かったら、15分くらいでついてしまったので、約束の時間を遅めに告げたことを後悔しながら、普段ティアスと会うときには使うことのなかった側のエントランスで待っていた。

深夜だからか、エントランスの奥にある管理室前の受付に若い男性が立っていて、声をかけられてしまった。なんて答えていいかわからないところに、佐伯さんが上から降りてきた。

「なんか、ホテルの受付みたいになってるんですけど」

「普段も常駐してるんだけどね。こっちから入ったことなかったんだっけ？奥にラウンジもあるのよ。ごめんね、そっちで待っていて

くれたらいいかと思ってたんだけど」

ますます、どこかのホテルみたいだぞ？いや、結構すごいマンションだとは思ってたけど、予想以上にすごくないか、ここ。

「そっちの、駐輪場側からしか入ったことなかったですから」

「ああ、通用口のほうね。ティアちゃん、表玄関から入ると、管理の人が立ってて緊張するって言うてたから」

彼女に誘導されるままに、エントランス奥のラウンジに案内される。マンションの住人しか入れないという、スペイン風の簡単なバーがあった。その存在に、なんだか頭が痛くなってきた。

「あんまり、外に出ないようにしてるの。こんなところに呼び出しちゃってごめんね」

「いえ……」

やばい、完全に飲まれてる。つい、何でカウンターで、しかも隣に座らせるんだよ。ずるくない？

「何から聞きたい？ティアちゃんのこと」

ストレートすぎて、何も言えなくなってしまった。

「オレのこと、からかってませんか？」

「少しだけよ、少しだけ」

嘘でも良いから否定しろよ。完全に子供扱いだな……つい、子供か。オレなんか、この人から見たら。

新島は男扱いっつーのが腑に落ちんけど。

「別に、ティアスのことなんか、どうでも良いです」

「そんなこと言うと、ティアちゃんが泣いちゃうわよ」

「オレが突き放したくらいで泣きますかね？あの気の強い女が」

蓮野のために泣く彼女を思い出し、佐伯さんのせいじゃないって判ってるのに、余計に腹が立ってきた。

「そう？あの子、よく泣くのよ？甘えるの下手なくせに。遼平くんにもそうしてれば良かったのに。不器用だから」

オレがこの「場」に戸惑ってるのを彼女は悟っているのだろう。簡単にオレに了承をとって、勝手に飲み物を注文していた。

もしかしたら、わざと蓮野の話も振ってるのかも知れない。

「そんなに警戒しなくても」

「別に、してませんよ？」

「それがしてるっていうのよ」

彼女は苦笑いを浮かべながら、出されたグラスの一つをオレに勧め、乾杯の素振りだけを見せた。

「……別に、ティアスのことなんかどうでも良いですって言ったじゃないですか？オレがあなたに聞きたいのだとしたら、ティアスが言っていた『舞台に立つ』話ぐらいです」

「どうしてそんなに喧嘩腰なの？まだ良い話とも、悪い話とも聞いてないのに。少なくとも、悪い話じゃないわよ？」

「悪い話かどうかはオレが判断します」

気を悪くするかと思ったが、彼女は人の悪い笑みを見せたただけだ

った。

「だったら、悪い話だと思ってるからその態度？ティアちゃんがずつと気にしてたからね、君のこと」

「気にしてた？」

オレの質問に、わざと間をおいて答えた彼女の対応に、してやられたとしか言いようがない。また、オレは彼女のペースに持っていかれた。

「白神くんだっけ？沢田くんの幼馴染みが、君のコンサート嫌いの話をしてくれたって。小学生くらいのころは、従姉妹のお姉さんと一緒に何度か出てみたいけど、中学生くらいからほとんど出たことが無くって、学校行事くらいしか人前に立たないって。どうして？」

彼女は明らかにオレに気を使っていた。それはよくわかる。ひどく言葉を選んでいるということが、痛いほど伝わってくる。

そりゃそうだ。この年で、受験どうする？なんてレベルまで音楽やってるくせに、コンサートやコンクールが苦手なんていう奴の理由なんて、たかが知れてる。ましてや、思春期真っ盛り、腫れ物を触るように扱われたっておかしくない。

……なんて、冷めたこと考えてるって知ったら、オレも新島みたいに男扱いしてもらえるんだろうか。正直、愛里や親父がオレのことをそんな扱いしてくるから、もう慣れっこだ。思春期も反抗期もそれらしいものは残念ながらやってこなかった。

辛かったり、恥ずかしかったり、悔しかったり。わけのわからないものに振り回されたのは一瞬だった。オレを振り回すのは、あの女に対する執着だけだ。ほかはどうでもいい。

「あまり、好きじゃないですから」

「緊張なら、誰だっけるものよ？」

やっぱり、そう思われてるよな。そうだよな。

「……意味がないですし。いや、オレの感情より、オレに場数が少ないことは、その話を聞いたら判りきったことでは？」

愛里と一緒にだからオレはピアノを弾いていたし、愛里に習うことが出来るからオレはピアノを続けている。元々、子供のころに習っていた先生とは合わなかったから（エキセントリックな先生で、愛里は優秀だから気に入られていたけど、オレは出来が悪かったからよく怒られてた）、愛里が受験のために先生を変えたタイミングでやめても良かったけど、彼女が教えてくれると言うから続けていただけ。ピアノを弾くことは好きだったし。

コンサートは元々苦手だったけど、先生につかずに、愛里に教えて貰うようになってからは、逆にその手の柵が無くなって楽になったと思ってたくらいだ。

……とか、絶対この人の前では言えないし。

我ながら、恥ずかしいくらい愛里に依存し、振り回されまくってる人生！

「何で、オレなんですか？ ティアスは他にも色々違うピアニストをバックにつけて歌ってるでしょう、今でも」

「ティアちゃんが気に入ったからよ？ 簡単な理由。ほかに必要？」

「その意味がわからないんですよ」

彼女が言う「簡単な理由」という奴が、オレの心の奥深いところ

で、なあんか引つかかる。

嬉しい気もする、怖い気もする、納得いかない気もする、悔しい気もする。

「考える時間がほしい？」

「え？」

「そんな顔してたから。なんか難しく考えすぎてない？とりあえずやってみればいいのに」

「……そんな」

難しい顔してたか、オレは。

「ティアちゃんみたいに、とりあえず」

……

思わずグラスを落とすところだったじゃねえか！なんつう……いや、他意はないと思う、多分。いや、新島のあの台詞から、この人も確実にオレとティアスがやったと思ってんな。いや、事実ですけど。

てか、とりあえず。そうですか、とりあえず。そんな軽がると。

まあ、そもそもあの女、オレに嘘ついてんだよな。彼氏いたことないって。なら、蓮野は何なんだよ。大体、初めてじゃないくせに。

いや。そんなこと、どうでもいいはずなんだが。引かかる、引かかる。気持ちが悪い。どうしたらいいんだ、オレは。

「……もしかして、今まで彼女とかいたことないの？そんなに動揺しちゃって。ちよつとからかっただけなのに」

ちっ、悪意だらけかよ、ちくしょう。この女……。

「いましたよ。失礼じゃないです？別に、動揺とかしてませんし？」

いや、親父より年上の女だからさ、わからないでもないけど。せめてもう少し反応して見せろよ。悲しすぎる、完全に馬鹿にされてる。

「冗談よ。でもわかった。ティアちゃんが君に興味を持った理由が」
「……理由？」

「とりあえず、悪いようにはしないから」

そういつて、彼女はオレに、名刺とスタジオのチラシを押し付けた。

「何ですか、これ」

「文句はやってから言いなさい。いろいろ気に入らない理由はあるみたいけど、やらない理由らしいもの、彼女に言える？」

だって、舞台上に立ったときに指が動かなかったらどうするんだよ。とは言えないけれど。いっそ、言ってしまうえば良いのか、何度も迷ってたんだから。

いや、それはそれで、なんだか逃げのようにも聞こえるし、言いたくない。第一、オレだって、それが引つかかってるわけじゃない。

「それは……大体、あの女が最初に言わないのが」

そう、彼女に食って掛かったが、御浜の顔が浮かんでしまったので、それ以上言えなくなってしまった。

御浜は知ってる。言わないだけで。オレのことを何もかも。だからオレの妹がそうするように、彼も愛里にいい感情を持っていない。

それだけオレは、あの女に振り回されてる。オレを大事に思ってくれる人たちが、彼女をよく思っていないのなんか、知ってる。

だけど御浜は、ティマスには言わなかっただろうし、これから也多分言わない。彼の氣遣いが、彼女からオレに話が伝わらなかった遠因だと言うことを知ったら、それは誰のせいにもしたくない。

御浜は、彼女からオレの話を聞いたとき、どう思ったのだろう。蓮野の話を聞いたときのような動揺をしたんだろうか。
だとしたら……。

「やってみたら、案外いいかもよ？」

「音無さんに対抗するための道具つてのは、氣に入らない」

「利用し返してやるうつていう程度の野心くらい、持てばいいのに」

それはそれで、そういわれると悔しいぞ。野心がまったくないって言うのも、男としてなんだか、恥ずかしい。

「プロデューサーですから、一緒にやるならきちんと話くらい聞きましょう。本格的に彼女が動くなら、私もつきつきりになるし」

「ずいぶんティマスに期待してるんですね」

それは、公私ともども、彼女に援助をしている佐伯さんの態度で知ってはいたが。言葉にされるとなお重い氣がする。

それも、オレが引いてしまう理由のひとつではある。

彼女への期待の大きさを、オレの指が壊してしまうんじゃないかって。

野心がないといわれて腹が立つのに、期待がでかいと引いてしまふオレは、氣が小さいってことか？

指が動かないことすら、そのせいだと思われたら、いや過ぎる。

「それもあるけど、遼平くんの遺言だからね」

なんだかやりきれないこの思いを叫んでみたいような気もしたけど、たくさん理由がありすぎて、何から言っればいいかわからないけど。でも、ひとつだけ、何者にもはばかられず、だけど人知れず叫びたいことは、この男だ。

話したことも、会ったこともない、今は存在すらしていない。そのくせに、オレの前に立ちはだかる。

これはたぶん嫉妬だ。御浜や愛里のことを考えたとき、こんな風にティアスを思い出すことはないのに、蓮野の話になったとたん、はつきりとオレの中に彼に対する妬みと、彼女に対する思いが噴き出してくる。

ずいぶんオレはずるいものだと、思わず冷笑してしまう。だけでも、どうしようもない。

認めたくないけれど、全てオレの中にある。
オレは、どうしたらいい？どうしたら……。

「テツ」

ティアスが、オレの後ろに立っていた。横で「会わせるつもりはない」と言っていた佐伯さんが苦笑いをしていた。

「私の隣で、ピアノを弾いて」

「何で……」

「私が、楽しくするって言った。責任とれって言ったのはあなた」

彼女は手を伸ばし、オレに触れる。たったそれだけのことなのに、触れられた部分は以前よりも酷く痺れる。彼女の上に乗ったことを思い出すと、その出来事があったにもかかわらず、余計に。

オレの手をとり、立ち上がらせる。彼女に逆らえない。

だめだ。このまま流されたら、だめだ。

「……だけど、隣で、人前では、無理だ。オレ……」

「テツ、私といるときは弾いてたじゃない。弾けるでしょ？」

彼女はオレの手をとったまま、バーの奥にあるステージに引いていく。グランドピアノのカバーを勝手にあけ、オレを座らせた。

客は佐伯さんを入れても3組。ここで弾けってことか？

「テツが気にしてるのは、時々指が動かなくなること？それとも、別のこと？」

彼女は知っていた。彼女が知っているのも、知っていた。多分、御浜も知っている。ティースも御浜も、知らない振り、見なかった振り、何もなかった振りをしてくれていた。知ってて、オレは甘えた。

オレの練習不足を嘆く愛里は、きっと知らないけど。だから彼女には、必死に取り繕った。

「動かないかもしれないぞ」

本当は「全て」だと言ってやりたかった。オレ自身、どうしていかかわらなくなっていた。そうとしか、言えなかった。

ほか「全て」なんて、オレがオレ自身を責める要因を増やすだけ

だ。十分判つてゐる。

今オレができる、精一杯だ。

「大丈夫。動くよ」

「どこからそんな自信が」

「だって、私と一緒にときは、弾いてくれたじゃない」

彼女が楽譜をオレの前に置く。てつきり、以前読めといって渡された佐伯さんがアレンジした曲だと思ったのだが、違った。子守唄だ。

「お前、ずるいよ」

どうせ心を持つてくなら、愛里への執着も全て、持つて行つてくれたら良かったのに。

あの夜から、オレはとくに持つていかれていたのだと、いまさら自覚させられた。

愛里への執着も、そのままだったけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2170b/>

W.E.M【世界の終わる音が聞こえる】

2010年10月14日20時09分発行